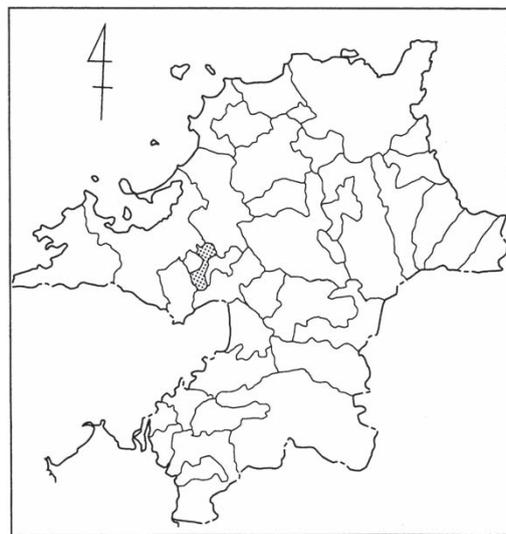


かみ の その

上園遺跡 8

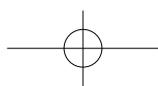
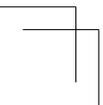
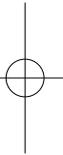
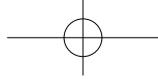
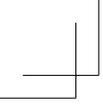
—第8・9・11・12次調査—

大野城市文化財調査報告書 第187集



2021

大野城市教育委員会



序

大野城市は、福岡平野の南部に位置し、西暦 665 年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた緑の街です。市内には、大野城跡・水城跡・牛頸須恵器窯跡といった国指定史跡をはじめとして、多くの文化財があります。

上園遺跡は、市のほぼ中心部に位置します。近くには国の特別史跡である水城跡があり、国の史跡である牛頸須恵器窯跡の北辺部にあたる場所です。これまでに 10 回以上の発掘調査が行われており、古墳時代から平安時代にかけての人々の生活の跡が確認されています。特に、須恵器づくりにかかわる遺構が多数確認されていることから、この遺跡の南側に広がる牛頸須恵器窯跡の操業に関係した工人が暮らしていたところではないかと注目されています。

今回報告する調査地点からは、弥生時代の竪穴住居跡や、古代の我が国と交流のあった新羅からもたらされた土器などが新たに見つかり、地域の歴史を理解する上で貴重な成果を得ることができました。

本書が今後、地域の歴史・文化財への理解を深める一助となるとともに、教育や学術分野で広く活用されることを心から願っています。

最後になりましたが、発掘調査に際してご理解ご協力をいただいた皆様をはじめ関係各位に厚くお礼を申し上げます。

令和 3 年 3 月 31 日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

例 言

- 1 本書は、大野城市教育委員会が実施した上園遺跡第8・9・11・12次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、徳本洋一が担当した。各調査の調査期間と調査面積は以下のとおりである。
第8次調査 調査期間：平成3年10月30日～同年11月7日 調査面積：978㎡
第9次調査 調査期間：平成4年10月12日～同年12月10日 調査面積：約400㎡
第11次調査 調査期間：平成16年11月15日～同年11月30日 調査面積：約35㎡
第12次調査 調査期間：平成19年1月9日～同年1月12日 調査面積：約25㎡
- 3 遺構の実測は、徳本、舟山良一、岡田裕之が行った。製図は、吉田薫と小畑貴子が行った。
- 4 遺構写真は、徳本が撮影した。
- 5 遺物の実測は、上田龍児、山元瞭平、古賀栄子、小嶋のり子、白井典子、仲村美幸、松本友里江、津田りえ、氷室優が行った。製図は、小嶋、小畑、篠田千恵子が行った。
- 6 拓本作成は、古賀、小嶋、白井、仲村、松本、津田、氷室が行った。
- 7 遺物写真撮影は、株式会社写測エンジニアリングに委託した。
- 8 本書における遺構の分類記号は、SB：掘立柱建物跡、SC：竪穴住居跡、SX：不整形土坑、SP：ピット、SD：溝、SK：土坑とした。
- 9 本書において使用する色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
- 10 実測図中の方位は磁北を表し、座標は国土座標（第Ⅱ系）を使用している。
- 11 本書掲載の遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会が保管・管理している。
- 12 本書の執筆はIV章4を上田、他と編集は徳本が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 位置と環境	
1. 遺跡の立地	5
2. 遺跡の環境	5
III. 調査の結果	
1. 第8次調査	
(1) 調査の概要	8
(2) 遺構と遺物	8
(3) 小結	12
2. 第9次調査	
(1) 調査の概要	12
(2) 遺構と遺物	12
(3) 小結	31
3. 第11次調査	
(1) 調査の概要	32
(2) 遺構と遺物	32
(3) 小結	41
4. 第12次調査	
(1) 調査の概要	42
(2) 遺構と遺物	42
(3) 小結	43
IV. まとめ	
1. 調査のまとめ（本報告書記載の各遺構の時期について）	44
2. 上園遺跡の変遷について	
(1) 弥生時代	45
(2) 古墳時代から奈良時代	45
(3) 平安時代	46
3. 今後の課題	46
4. 上園遺跡出土新羅土器の位置づけ	
(1) 上園遺跡第11次調査出土の新羅土器	46

(2) 周辺遺跡の新羅土器	47
(3) 上園遺跡周辺におけるその他の朝鮮半島系土器	47
(4) 上園遺跡第 11 次調査出土の新羅土器の評価	48

挿 図 目 次

第 1 図 上園遺跡周辺遺跡分布図(S = 1 / 25,000)	4
第 2 図 上園遺跡調査地位置図(S = 1 / 3,000)	7
第 3 図 上園遺跡第 8 次調査地北・南調査区位置図(S = 1 / 200)	8
第 4 図 上園遺跡第 8 次調査地北調査区遺構配置図(S = 1 / 100)	9
第 5 図 上園遺跡第 8 次調査地南調査区遺構配置図(S = 1 / 100)	10
第 6 図 上園遺跡第 8 次調査地SB01平・断面見通図(S = 1 / 60)	11
第 7 図 上園遺跡第 8 次調査地出土遺物実測図(S = 1 / 2、1 / 3)	11
第 8 図 上園遺跡第 9 次調査地遺構配置図(S = 1 / 100)	13~14
第 9 図 上園遺跡第 9 次調査地SC01平・断面見通図(S = 1 / 60)	15
第10図 上園遺跡第 9 次調査地SC01出土遺物実測図①(S = 1 / 3、1 / 4)	16
第11図 上園遺跡第 9 次調査地SC01出土遺物実測図②(S = 1 / 3)	17
第12図 上園遺跡第 9 次調査地SC01出土遺物実測図③(S = 1 / 2)	17
第13図 上園遺跡第 9 次調査地SC02平・断面見通図(S = 1 / 60)	18
第14図 上園遺跡第 9 次調査地SC03平・断面見通図(S = 1 / 60)	19
第15図 上園遺跡第 9 次調査地SC03出土遺物実測図(S = 1 / 3)	20
第16図 上園遺跡第 9 次調査地SC04平・断面見通図(S = 1 / 60)	21
第17図 上園遺跡第 9 次調査地SC04出土遺物実測図(S = 1 / 3)	21
第18図 上園遺跡第 9 次調査地SC05平・断面見通図(S = 1 / 60)	22
第19図 上園遺跡第 9 次調査地SC05出土遺物実測図(S = 1 / 2)	22
第20図 上園遺跡第 9 次調査地SC06平・断面見通図(S = 1 / 60)	23
第21図 上園遺跡第 9 次調査地SC06出土遺物実測図①(S = 1 / 3、1 / 4)	24
第22図 上園遺跡第 9 次調査地SC06出土遺物実測図②(S = 1 / 2)	24
第23図 上園遺跡第 9 次調査地SX01~03、05~10平・断面見通図(S = 1 / 40)	25
第24図 上園遺跡第 9 次調査地SX04平・断面見通図(S = 1 / 60)	26
第25図 上園遺跡第 9 次調査地SX出土遺物実測図①(S = 1 / 3)	27
第26図 上園遺跡第 9 次調査地SX出土遺物実測図②(S = 1 / 3)	28

第27図	上園遺跡第9次調査地その他の遺物実測図(S = 1 / 3、1 / 4)……………	30
第28図	上園遺跡第11次調査地遺構配置図(S = 1 / 40) ……………	32
第29図	上園遺跡第11次調査地SD01平・断面見通図(S = 1 / 60) ……………	33
第30図	上園遺跡第11次調査地SD01出土遺物実測図①(S = 1 / 3) ……………	34
第31図	上園遺跡第11次調査地SD01出土遺物実測図②(S = 1 / 3) ……………	35
第32図	上園遺跡第11次調査地SD01出土遺物実測図③(S = 1 / 3) ……………	36
第33図	上園遺跡第11次調査地SK01平・断面見通図(S = 1 / 40) ……………	38
第34図	上園遺跡第11次調査地SK01出土遺物実測図(S = 1 / 3) ……………	38
第35図	上園遺跡第11次調査地SX01平・断面見通図(S = 1 / 60) ……………	40
第36図	上園遺跡第11次調査地SX01出土遺物実測図(S = 1 / 2、1 / 3) ……………	40
第37図	上園遺跡第11次調査地SX02平・断面見通図(S = 1 / 40) ……………	41
第38図	上園遺跡第11次調査地SX02出土遺物実測図(S = 1 / 3) ……………	41
第39図	上園遺跡第12次調査地遺構配置図(S = 1 / 80) ……………	42
第40図	上園遺跡第12次調査地SK01平・断面見通図(S = 1 / 40) ……………	43
第41図	上園遺跡第12次調査地SK01出土遺物実測図(S = 1 / 3) ……………	43

表 目 次

第1表	上園遺跡調査一覧表……………	45
第2表	出土遺物観察表……………	49 ~ 54

図 版 目 次

図版1	(1)上園遺跡第8次調査地北調査区全景 (2)上園遺跡第8次調査地南調査区全景
図版2	(1)上園遺跡第9次調査地北部 (2)上園遺跡第9次調査地中央部
図版3	(1)上園遺跡第9次調査地南部 (2)上園遺跡第9次調査地SC01・02

- 図版 4 (1)上園遺跡第9次調査地SC03
(2)上園遺跡第9次調査地SC04
- 図版 5 (1)上園遺跡第9次調査地SC01・02・03・04
(2)上園遺跡第9次調査地SC05
- 図版 6 (1)上園遺跡第9次調査地SC06
(2)上園遺跡第11次調査地全景
- 図版 7 (1)上園遺跡第11次調査地SD01遺物出土状況
(2)上園遺跡第11次調査地SX01遺物出土状況①
- 図版 8 (1)上園遺跡第11次調査地SX01遺物出土状況②
(2)上園遺跡第11次調査地SK01遺物出土状況
- 図版 9 (1)上園遺跡第12次調査地全景①
(2)上園遺跡第12次調査地全景②
- 図版10 遺物写真 1
- 図版11 遺物写真 2
- 図版12 遺物写真 3
- 図版13 遺物写真 4
- 図版14 遺物写真 5
- 図版15 遺物写真 6
- 図版16 遺物写真 7

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

(1) 第8次調査

上園遺跡は現在の大野城市上大利四丁目を中心に広がる遺跡である。昭和55年に福岡県教育委員会が刊行した『福岡県遺跡等分布地図（筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編）』には記載されていないが、本堂遺跡（190135）、横堤遺跡（190136）、谷川遺跡（190132）に囲まれた部分にあたる。昭和60年1月に開発行為に伴って実施した試掘調査の結果、その存在が明らかになった。

第8次調査は、市道拡幅工事に伴って実施された。調査地の地番は上大利二丁目641外、調査面積は978㎡、調査期間は平成3年10月30日から同年11月7日までである。

(2) 第9次調査

第9次調査地は、第8次調査地の北に隣接している。地番は上大利二丁目551、565-1である。発掘調査は、当該地における共同住宅建設に伴って実施された。調査面積は約400㎡（開発面積は995㎡）、調査期間は平成4年10月12日から同年12月10日までである。

(3) 第11次調査

第11次調査は、個人専用住宅の建設に伴い国庫補助事業として実施された。調査地の地番は、上大利四丁目120-4、調査面積は約35㎡、調査期間は平成16年11月15日から同年11月30日までである。

(4) 第12次調査

第12次調査は、国立研究開発法人産業技術総合研究所（産総研）による地質調査に伴って実施された。調査地の地番は上大利四丁目111-1の一部（水田）、調査面積は約25㎡、調査期間は平成19年1月9日から同年1月12日までである。

2. 調査組織

第8次・9次・11次・12次調査、及び整理作業それぞれの時点における調査組織は以下の通りである。

第8次調査時（平成3年度）

大野城市教育委員会	教育長	久野 英彦
同	教育部長	後藤 幹生
同	社会教育課長	關 隆昭
同	同 課長補佐	白水 岩人
同	同 文化担当	舟山 良一
同	同 同	浦山 敏弘

同	同	同	向 直也
同	同	同	徳本 洋一
同	同	嘱託	秀嶋 和子

第9次調査時（平成4年度）

大野城市教育委員会	教育長	久野 英彦
同	教育部長	後藤 幹生
同	社会教育課長	關 隆昭
同	同 課長補佐	白水 岩人
同	同 文化担当	舟山 良一
同	同	浦山 敏弘
同	同	向 直也
同	同	徳本 洋一
同	同 嘱託	秀嶋 和子

第11次調査時（平成16年度）

大野城市教育委員会	教育長	古賀 宮太
同	教育部長	鬼塚 春光
同	社会教育課長	秋吉 正一
同	文化財担当係長	舟山 良一
同	主査等	石木 秀啓
同	同	緒方 一幹
同	同	徳本 洋一
同	同	丸尾 博恵
同	同	林 潤也
同	同	早瀬 賢
同	嘱託	一瀬 智
同	同	井上 愛子
同	同	西堂 将夫

第12次調査時（平成18年度）

大野城市教育委員会	教育長	古賀 宮太
同	教育部長	小嶋 健
同	ふるさと文化財課長	舟山 良一
同	文化財担当係長	中山 宏
同	主査等	石木 秀啓
同	同	徳本 洋一
同	同	丸尾 博恵
同	同	林 潤也

同	同	早瀬 賢
同	嘱託	井上 愛子
同	同	北川 貴洋
同	同	城戸 義廣
同	同	岡田 裕之

整理作業実施時（令和2年度）

大野城市教育委員会	教育長	吉富 修
同	教育部長	日野 和弘
同	ふるさと文化財課長	石木 秀啓
同	発掘調査担当係長	上田 龍児
同	啓発・整備担当係長	佐藤 智郁
同	同	林 潤也
同	主査等	秋穂 敏明
同	同	徳本 洋一
同	同	山元 瞭平
同	同	齋藤明日香
同	会計年度任用職員	澤田 康夫
同	同	木原 堯

整理作業員

白井 典子 仲村 美幸 小嶋のり子 松本友里江 津田 りえ 氷室 優
古賀 栄子 小畑 貴子 篠田千恵子



第1図 上園遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)

- | | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|-----------------|-------------|----------------|
| 大野城市 | 16. 国分田遺跡 | 32. 華無尾遺跡群 | 44. 駿河D遺跡 | 58. 向谷古墳群 | 大宰府市 |
| 1. 御供田遺跡 | 17. 後原遺跡 | 33. 屏風田遺跡 | 45. 駿河E遺跡 | 59. 春日平田北遺跡 | 73. 島本遺跡 |
| 2. 古賀遺跡 | 18. 原ノ畑遺跡 | 34. 日ノ浦遺跡群 | 46. 原ノ口遺跡 | 60. 春日平田遺跡 | 74. 神ノ前窯跡群 |
| 3. 御笠の森遺跡 | 19. 金山遺跡 | 35. 塚原遺跡群 | 47. 立石遺跡 | 61. 大牟田窯跡 | 75. 原口遺跡 |
| 4. 宝松遺跡 | 20. 釜蓋原古墳群 | 36. 畑ヶ坂遺跡群 | 48. 先ノ原B遺跡 | 62. 惣利窯跡群 | 76. 久郎利遺跡 |
| 5. 村下遺跡 | 21. 笹原古墳 | 37. 上大利小水城跡 | 49. 先ノ原・春日公園内遺跡 | 63. 惣利遺跡 | 77. 日焼遺跡群・窯跡群 |
| 6. 雑餉隈遺跡 | 22. ハザコ遺跡 | | | 64. 惣利北遺跡 | 78. 宮ノ本遺跡群・窯跡群 |
| 7. 中ノ寺尾遺跡 | 23. 梅頭遺跡群 | 福岡市 | 50. 伯丈社遺跡 | 65. 惣利西遺跡 | 79. 成屋形遺跡群 |
| 8. 薬師の森遺跡 | 24. 本堂遺跡群 | 38. 麦野C遺跡 | 51. 大南遺跡 | 66. 惣利東遺跡 | 80. 成屋形古墳群 |
| 9. 原口古墳群 | 25. 上園遺跡 | 39. 南八幡遺跡群 | 52. 大谷遺跡 | 67. 大土居水城跡 | 81. 前田遺跡 |
| 10. 銀山遺跡 | 26. 出口窯跡・遺跡 | 40. 雑餉隈遺跡群 | 53. 九州大学筑紫地区遺跡群 | 68. 円入遺跡 | |
| 11. 雄子ヶ尾遺跡 | 27. 谷川遺跡 | 春日市 | 54. 向谷遺跡 | 69. 春日平田遺跡群 | |
| 12. 雄子ヶ尾古墳群 | 28. 水城跡 | 41. 上平田・天田遺跡 | 55. 向谷北遺跡 | 70. 春日平田西遺跡 | |
| 13. 原門遺跡 | 29. 野添遺跡群 | 42. 駿河A遺跡 | 56. 向谷西遺跡 | 71. 塚原古墳群 | |
| 14. 石勺遺跡 | 30. 大浦窯跡群 | 43. 駿河B遺跡 | 57. 向谷南遺跡 | 72. 浦ノ原窯跡群 | |
| 15. 瑞穂遺跡 | 31. 平田窯跡群 | | | | |

Ⅱ. 位置と環境

1. 遺跡の立地

大野城市は福岡県の南東部の一角に位置し、北を福岡市に接し、東を月隈丘陵から派生する乙金山・四王寺山、南を牛頸山系、西を脊振山系によって囲まれており、これらに囲まれた平野に住宅地が展開する。市域の中央部を御笠川が貫流し、牛頸川がこれに合流している。また、JR 鹿児島本線、西鉄天神大牟田線、国道3号線等の主要な交通網が市内を南北に通っており、交通の要衝となっている。面積は26.89㎢である。

大野城市の市域は、南北に細長く中央部がくびれる、いわゆるヒョウタン形を呈する。その北部には四王寺山から南西方向に派生する低丘陵群が、南部には牛頸山から北に派生する低丘陵群がある。牛頸山は脊振山系の一角をなしており、その地盤は早良花崗岩で、表面はそれが風化した真砂土である。市域の中央部は、御笠川による沖積地及び氾濫原の低地となっている。

市南部の低丘陵群は、牛頸川及びその支流である平野川、御笠川及びその支流である平田川などの小河川によって開析が進み、多くの谷、台地、丘陵を有する複雑な地形をなしている。上園遺跡は、主に平田川による開析を受けた低台地上に立地しており、現在の地番で上大利四丁目を中心に広がっている。また、さらにその南方の、牛頸山から派生する低丘陵上には、牛頸須恵器窯跡が展開する。

2. 遺跡の環境

上園遺跡は、古墳時代から平安時代を中心とする遺跡であるが、ここでは主に市内の遺跡を概観して、歴史的な環境を見ておきたい。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は少なく、明確な遺構は確認されていない。ただし、中ノ原遺跡、釜蓋原遺跡、出口遺跡、金ヶ浦遺跡、成屋形遺跡、向谷北遺跡等においては、出土遺物からではあるが、当該期における人間活動の痕跡が確認されている。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、市内各地に散在する。それらのうち、薬師の森遺跡、石勺遺跡、金山遺跡では狩猟に関連する可能性のある遺構が、塚原遺跡では晩期の竪穴住居跡が確認されている。釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡では早期の土器が出土しており、釜蓋原遺跡ではまた、多数の石鏃も採集されている。原田遺跡、中ノ原遺跡でも遺物が採集されており、成屋形遺跡は丘陵の北側一帯に広がりを見せる。

弥生時代

弥生時代になると福岡平野全域で遺跡が増加するが、市内では北部丘陵部、御笠川周辺の平野部に遺跡が広がる。また、四王寺山等東部の山々から西に伸びる丘陵先端部及びその先の平地に墳墓遺跡が集中する傾向が見られる。前期の集落遺跡としては塚口遺跡、石勺遺跡、川原遺跡、仲島遺跡などがあり、中期へと継続する。特に仲島遺跡は、鎌倉時代まで存続することがわかっている。前期の墓地としては御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡などが挙げられる。中期には森園遺跡で集落と墳墓、瑞穂遺跡で墳墓が営まれる。後期になると集落が増加し、仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、

村下遺跡、松葉園遺跡、本堂遺跡などが営まれる。本市周辺では、前期には板付遺跡で集落、金隈遺跡で墓地が広がり、中期になると春日丘陵一帯に須玖遺跡群と呼ばれる多くの遺跡が展開する。

古墳時代

古墳時代前期には、仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡などの集落が継続して営まれるほか、瑞穂遺跡では方形周溝墓が確認されている。本市には前方後円墳はないが、御陵古墳群周辺で三角縁神獸鏡が出土している。古墳時代中期には遺跡数が減少し、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、仲島遺跡、上園遺跡などで小規模な集落が営まれる。その一方、乙金山西麓の開発が始まり、笹原古墳、成屋形古墳が築造されるほか、古野古墳群の築造が始まる。古墳時代後期になると、市北部では月隈丘陵から乙金山麓にかけて大規模な群集墳が営まれる。市南部では中通古墳群、塚原古墳群などが築造される。この時期の集落遺跡としては、仲島遺跡、上園遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡などが挙げられる。また、6世紀半ばには牛頸須恵器窯跡の操業が始まり、以後約300年間に渡って須恵器を焼き続ける。市北部にある乙金窯跡、雉子ヶ尾窯跡、裏ノ田窯跡などの須恵器窯跡も、古墳時代に操業していたことが分かっている。

飛鳥時代

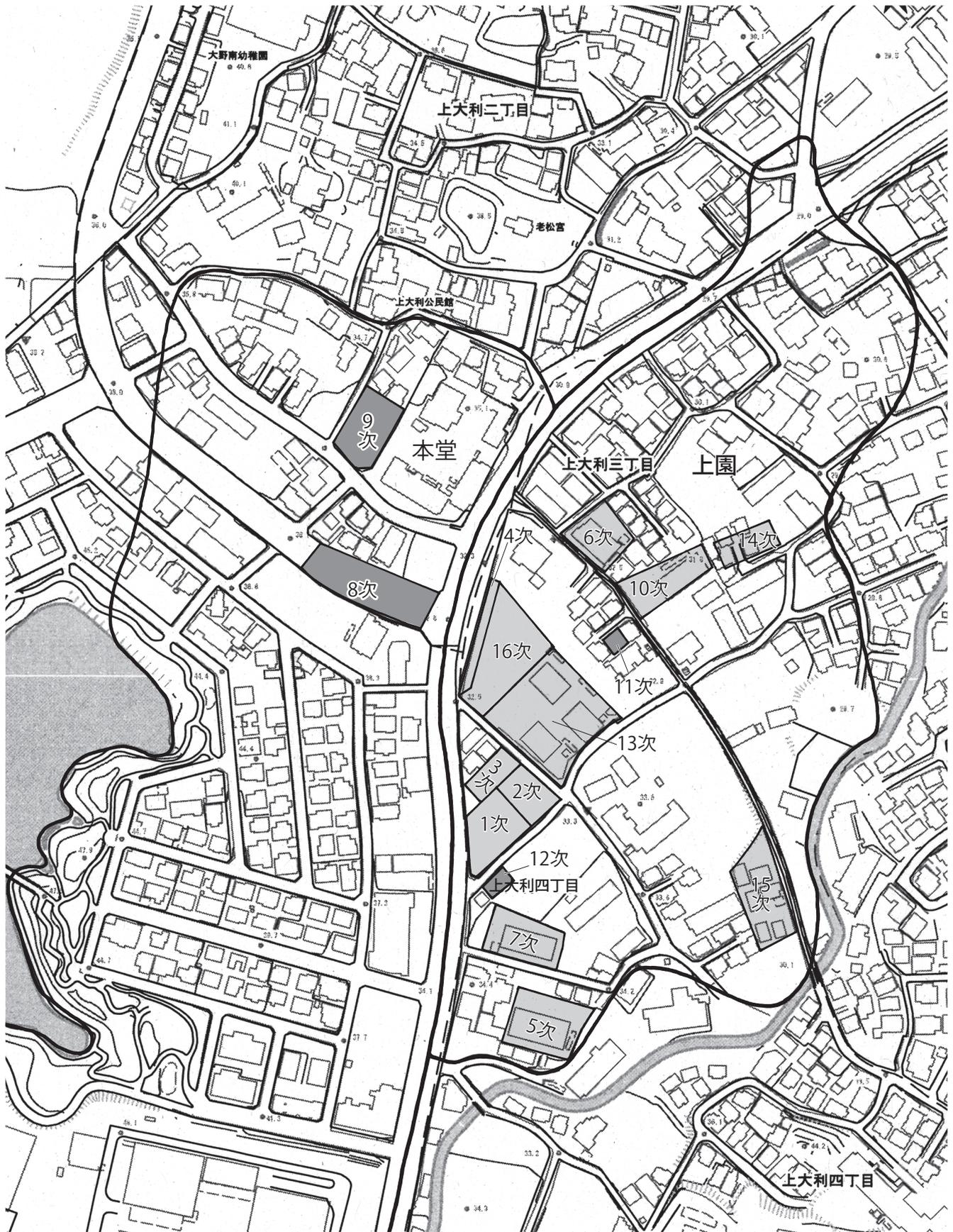
この時代にも、古墳時代後期の集落、群集墳は継続的に営まれる。この時期の集落としては、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡などがあり、これらは須恵器工人の集落であると考えられている。牛頸須恵器窯跡では、月ノ浦窯跡、小田浦窯跡で初期瓦が製作され、「那津官家」に比定されている比恵・那珂遺跡群に搬入されている。7世紀になると、朝鮮半島での動乱が激化し、北部九州は国防上の最前線として重要度を増す。7世紀半ばには、白村江の戦いの結果を受けて水城・大野城が築かれ、中央集権国家を作るために律令制度の整備が急がれることとなる。

奈良時代

8世紀初頭、大宝律令が制定され、九州では大宰府を中心とした統治体制が整えられる。大宰府政庁からは水城を通過して博多方面に通じる東西2本の官道が整えられた。これら官道沿いには仲島遺跡、井相田C遺跡など大規模な集落遺跡が営まれた。牛頸須恵器窯跡では窯の小型化と窯数の増加が見られ、小型器種の焼成を中心に操業の最盛期を迎える。また、仏教の普及と共に火葬の習慣が広がり、石勺遺跡では火葬墓が検出されている。

平安時代以降

9世紀代には、仲島遺跡、井相田C遺跡、麦野遺跡など御笠川周辺で営まれていた集落遺跡のほとんどが廃絶し、牛頸須恵器窯跡も9世紀半ばには操業を停止する。11世紀後半には大宰府もその機能を停止し、以降は中世都市「博多」が外交交易の拠点となる。市内の中世の遺跡としては、御笠の森遺跡、石勺遺跡、本堂遺跡などが挙げられる。御笠の森遺跡では近世まで継続して集落が営まれ、多数の井戸や区画溝などが確認されている。



第2図 上園遺跡調査地位置図 (S = 1/3,000)

Ⅲ．調査の結果

1. 第8次調査

(1) 調査の概要

第8次調査地は、上園遺跡の北部、上大利二丁目（調査当時は大字上大利）641他に所在する。平田川西岸の南向き緩斜面部に位置し、調査時は水田として利用されていた。標高は34m程度である。

本次調査は市道の拡幅工事に伴って実施されたもので、調査面積は約978㎡、調査期日は平成3年10月30日から同年11月7日までである。調査の結果、時期を特定することができない掘立柱建物跡、溝、ピット群等が検出され、弥生土器、須恵器、石製品が出土した。

なお、調査地は耕作に伴う削平を受けており、遺構の残存状況は良くなかった。

(2) 遺構と遺物

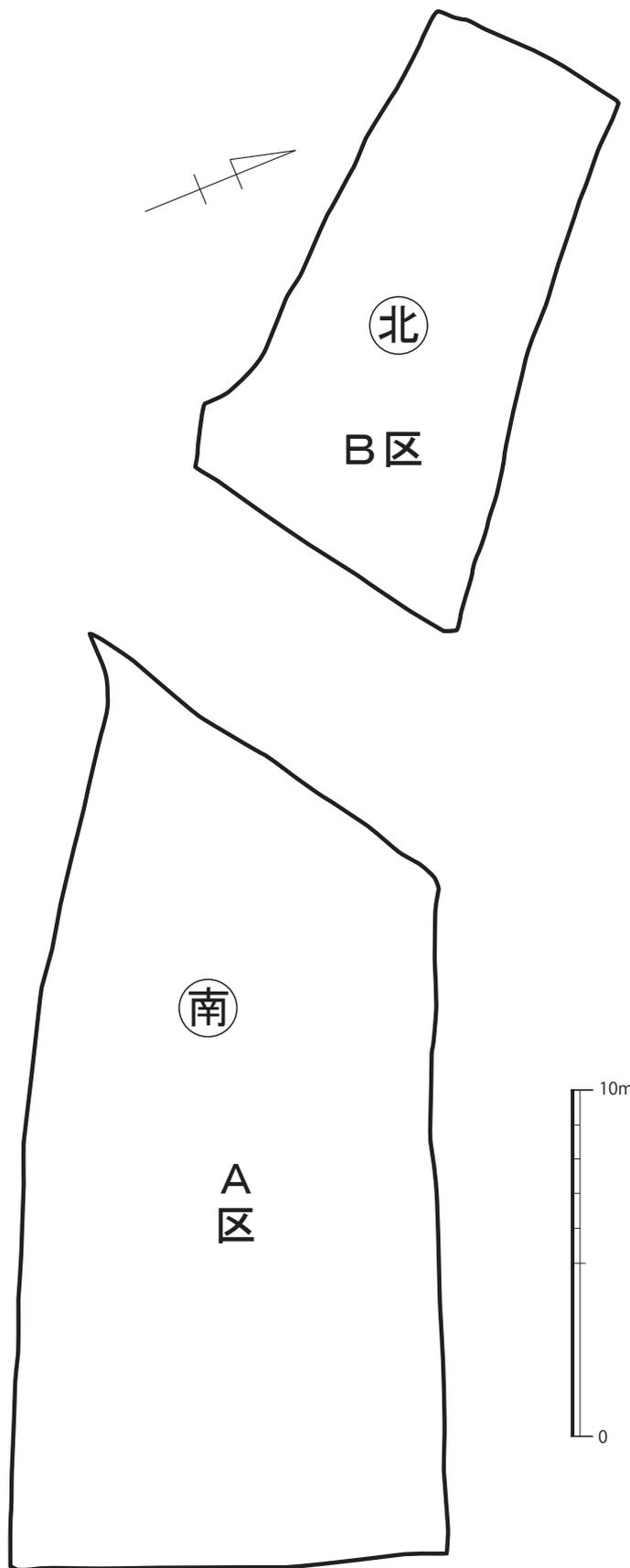
①掘立柱建物

SB01（第6図、図版1）

調査区中央部の南端に位置する。現況で東西1間（2.8m）×南北1間（2.1m）であるが、本来南側の調査区外に伸びていたと想定できる。柱穴の直径は約0.4～0.5m、遺構検出面からの深さは約0.1～0.2mを測る。柱穴と判断したピットからの出土遺物はなかった。

その他の出土遺物（第7図、図版10）

弥生土器



第3図 上園遺跡第8次調査地北・南調査区位置図（S = 1/200）

甕 (1)

口縁部のみの小片。内外面とも磨滅のため調整不明。外面に1条の刻目突帯が付く。

須恵器

杯蓋 (2、3)

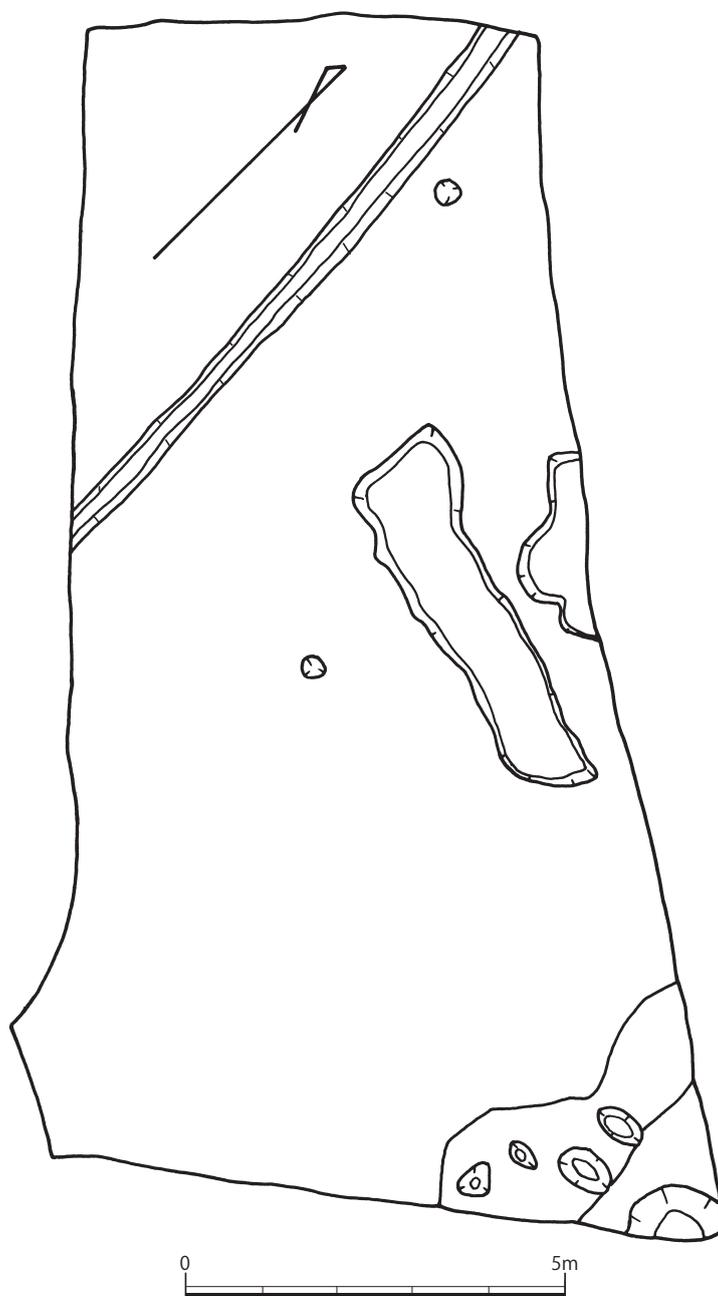
2、3とも天井部外面にヘラケズリ後不定方向のナデ、その他の部分には回転ナデを施す。

杯身 (4)

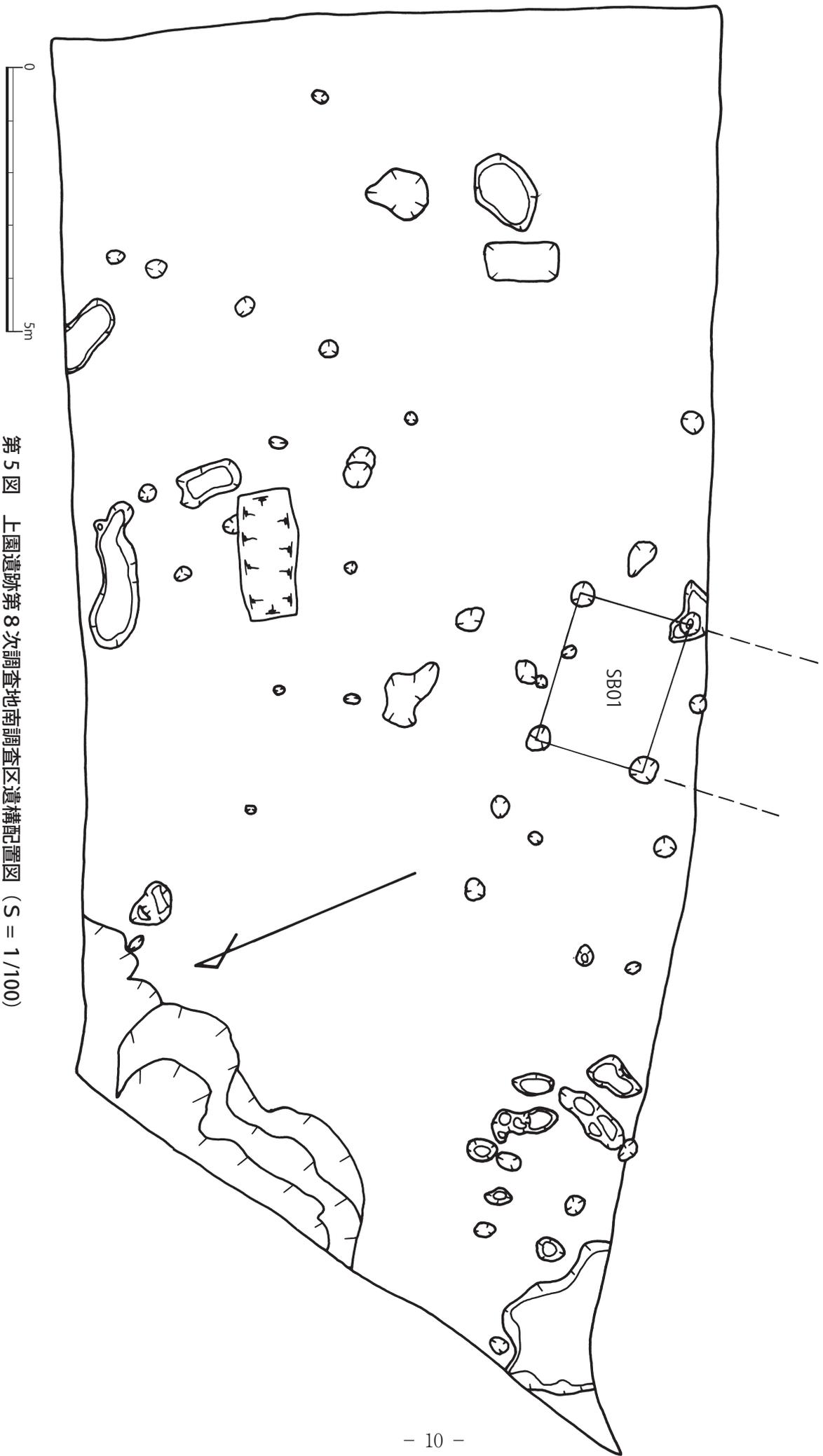
底部外面にヘラ切り後不定方向のナデ、その他の部分には回転ナデを施す。

石製品

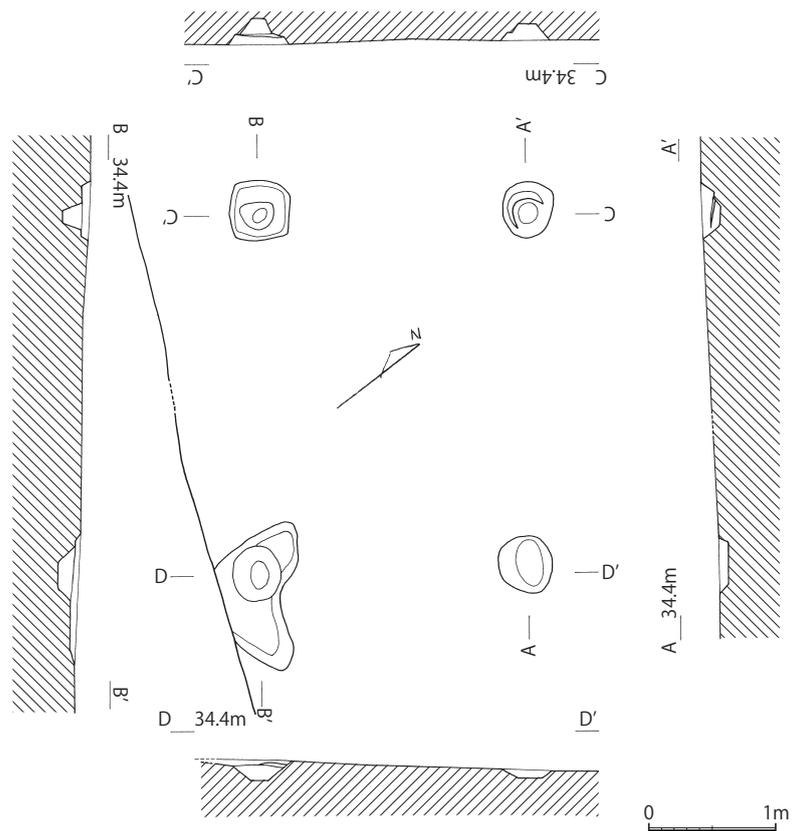
石鍋 (5)



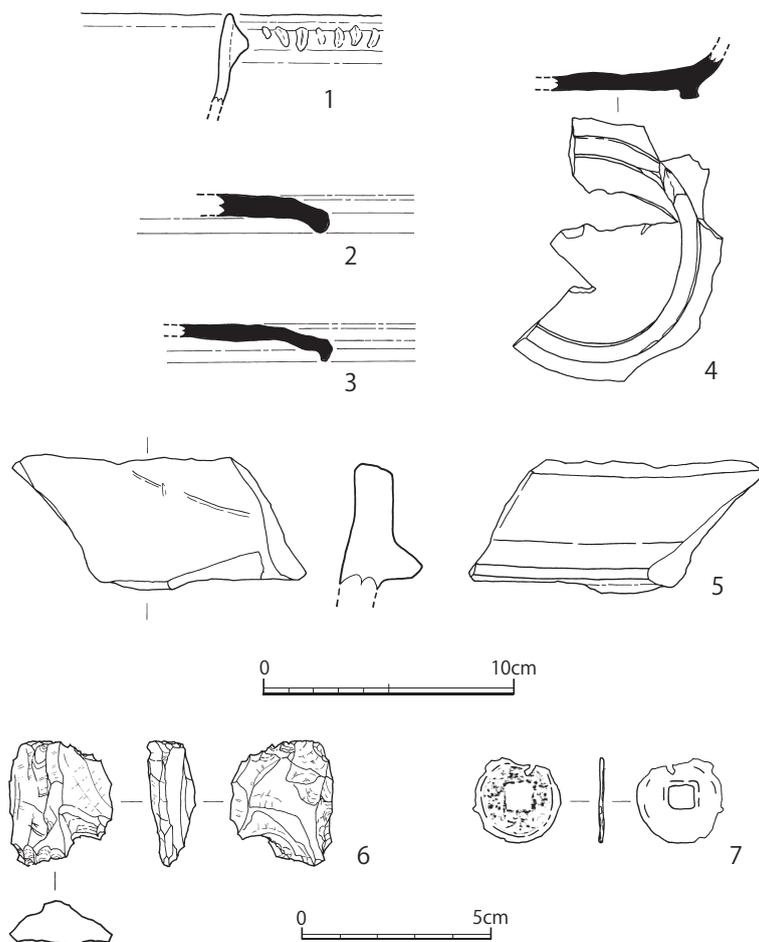
第4図 上園遺跡第8次調査地北調査区遺構配置図 (S = 1/100)



第 5 图 上園遺跡第 8 次調査地南調査区遺構配置図 (S = 1/100)



第6図 上園遺跡第8次調査地 SB01 平・断面見通図 (S = 1/60)



第7図 上園遺跡第8次調査地出土遺物実測図 (S = 1/2、1/3)

重機による表土掘削時に出土した。口縁部付近の小片で、滑石製。

二次加工剥片（6）

サヌカイト製である。

古銭

銅銭（7）

表裏両面とも風化が著しい。「寛永通寶」の文字が陽刻されている。

（3）小結

第1次から第7次に及ぶ調査の結果、上園遺跡は平田川西岸に広がる低丘陵の平坦部に展開するものと認識されていたが、第8次調査により、より北側の傾斜部にも及んでいることが明らかになった。また、初めて弥生時代と奈良時代の遺物が出土した。

2. 第9次調査

（1）調査の概要

第9次調査地は、第8次調査地に隣接し、上大利二丁目 551・565－1 に所在する。平田川西岸の緩斜面の頂部に近い場所であり、標高は約 37m を測る。

本次調査は、共同住宅の建設に伴って実施されたもので、調査面積は約 400㎡、調査期日は平成 4 年 10 月 12 日から同年 12 月 10 日までである。調査の結果、弥生時代中期の竪穴住居跡 1 軒、古墳時代後期の竪穴住居跡 4 軒、古墳時代後期の不整形土坑 10 基、その他ピット群が検出され、弥生土器、須恵器、土師器が出土した。

（2）遺構と遺物

①竪穴住居跡

SC01（第9図、図版3）

調査区北端部付近で、SC02 と重複した状態で検出された。前後関係としては、SC01 の方が古い。西側の壁の一部を SC02 によって破壊されているが、その部分を補うと一辺ほぼ 4.5m の、正方形に近い平面プランを呈する。遺構検出面から床面までの深さは、最深で約 0.18m を測る。床面はほぼ平坦で、いくつかのピットを検出したが、柱穴を確定することはできなかった。竈、壁溝は確認できなかった。

遺物は、埋土中及び床上直上から須恵器、土師器、石製品が出土した。

出土遺物（第10～12図、図版10・11）

須恵器

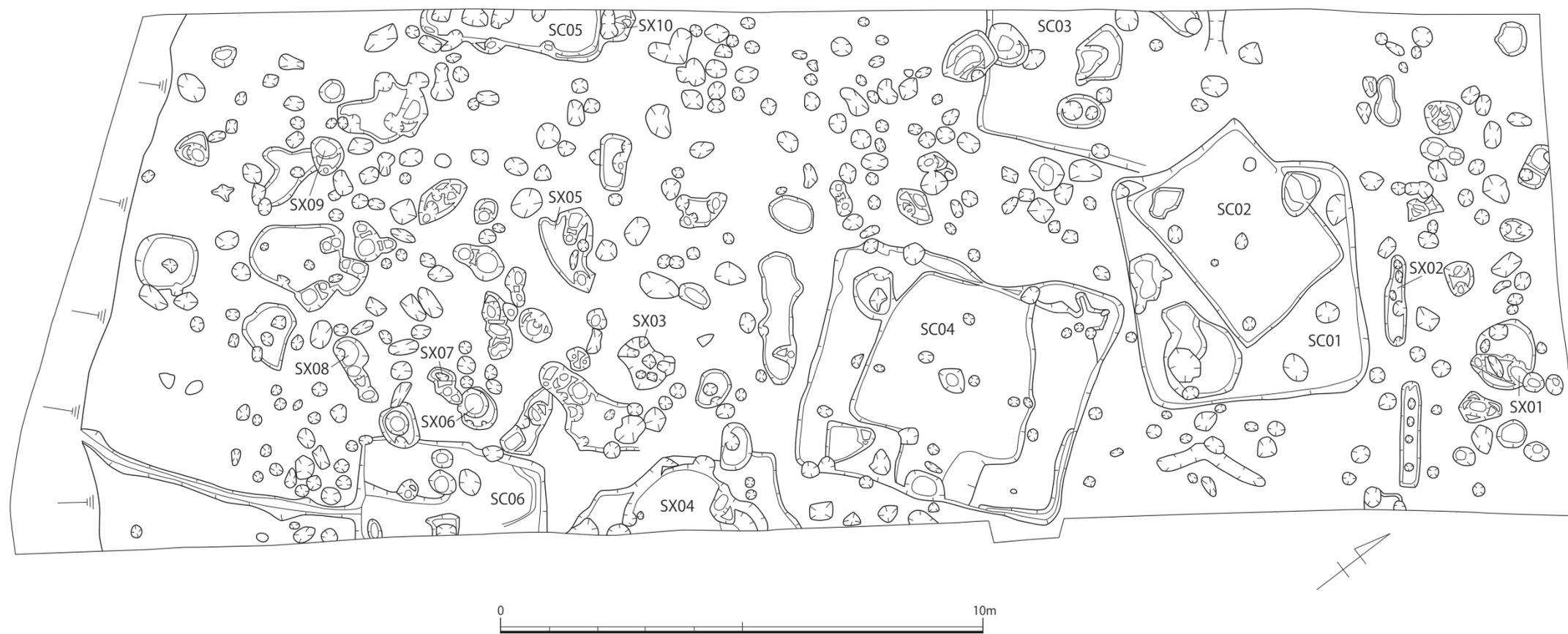
杯蓋（8、9）

いずれも床上直上出土。焼成不良で、内外面とも磨滅のため調整が分かりづらい。

杯身（10～12）

10 と 11 が床上直上出土。10 は底部外面にヘラ切り後粗いナデを施す。内外面ともに降灰が見られる。11 は体部下部に 2 条の沈線を施し、底部外面にはヘラ記号を有する。12 は底部外面にヘラ切り後粗いナデを施す。底部外面にヘラ記号を有する。

甕（13、14）



第8図 上園遺跡第9次調査地遺構配置図 (S = 1/100)

13は、口頸部約4分の1が残存する。外面に3条の沈線を有し、口縁端部を複雑に仕上げる。14は、頸部付け根から体部中位にかけての残存。外面は平行タタキの後、部分的にナデる。内面には同心円状当具痕が残る。この13と14は胎土、焼成の状態が酷似しており、接合しなかったものの同一個体である可能性が高い。

土師器

高杯 (15)

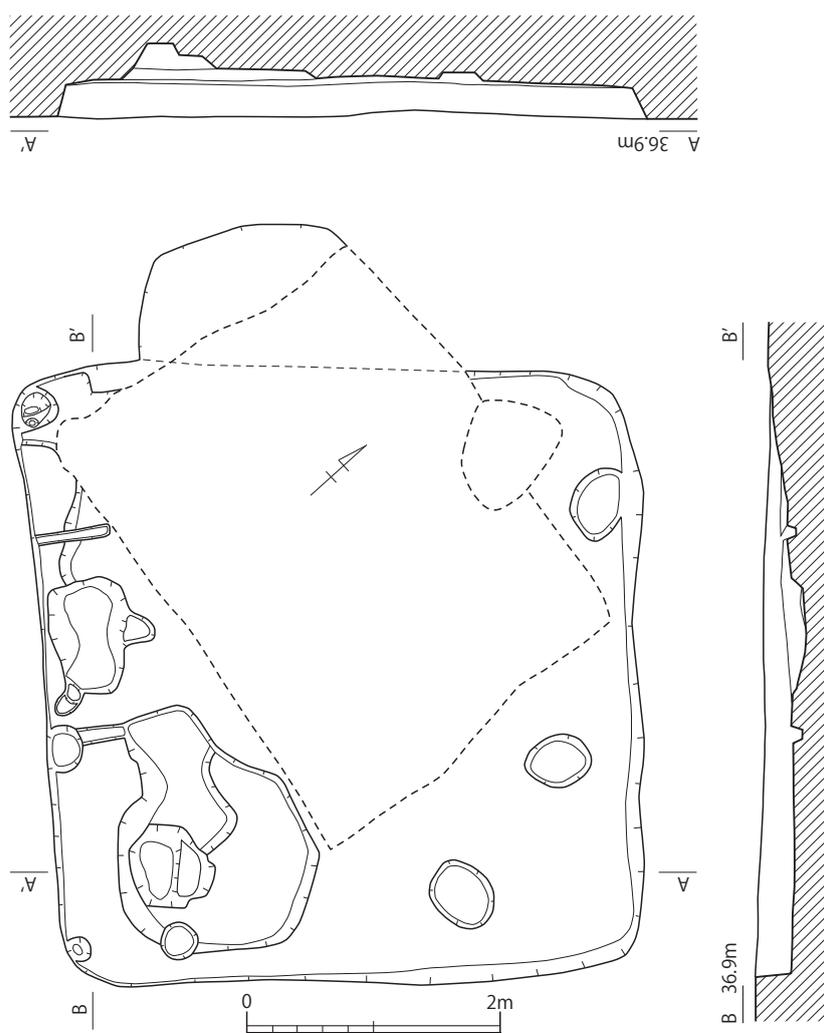
杯部下位と脚部上位のみの残存。内外面とも磨滅のため調整不明。

丸底壺 (16)

底部を欠く。内外面とも磨滅のため調整が分かりにくい。体部外面上位にわずかに指オサエの痕が残る。また、口縁部内外面は回転ナデで仕上げる。

甕 (17、18)

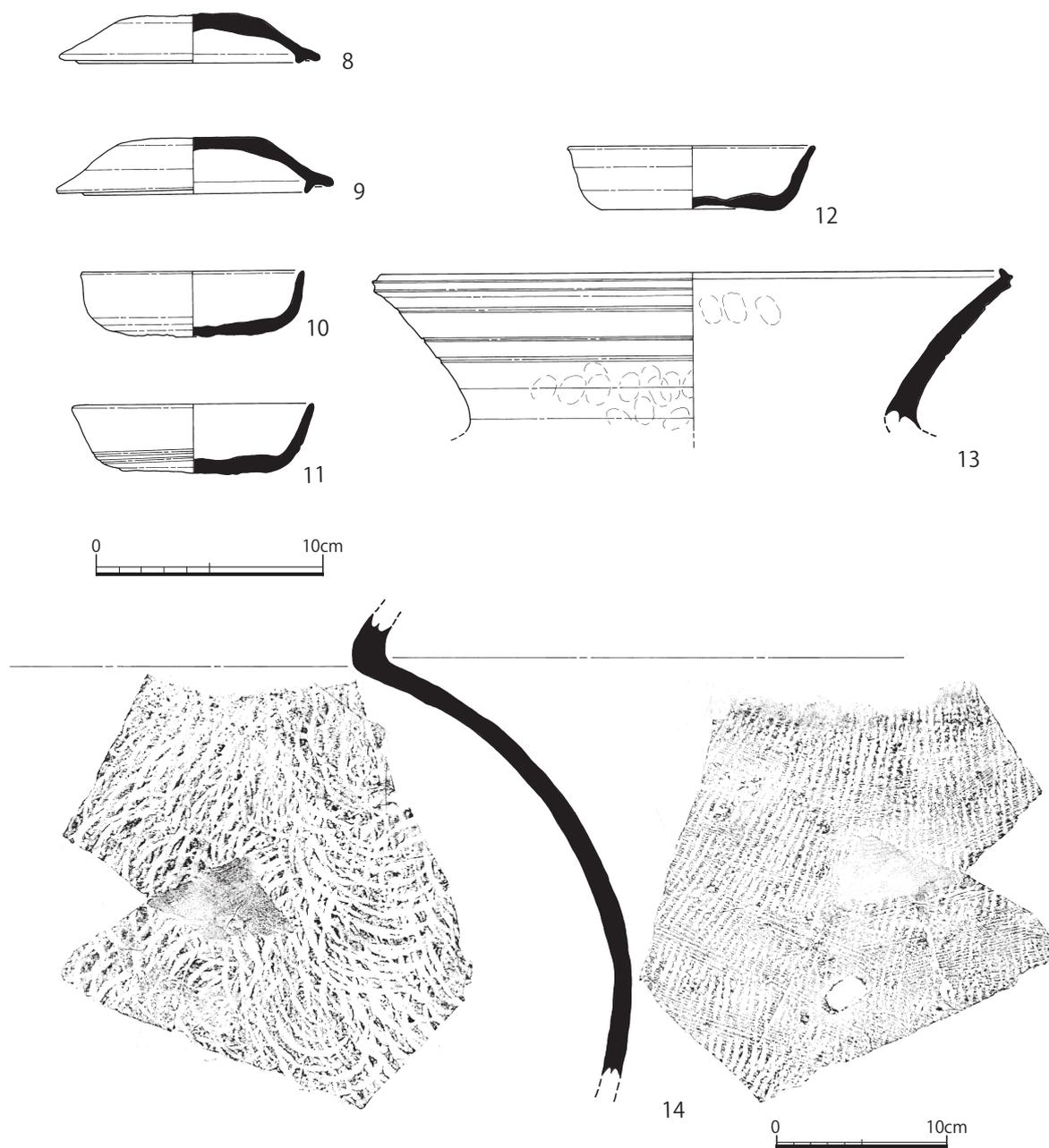
17は体部下位を欠く。内面にはケズリの痕跡が認められるが、外面は磨滅のため調整不明である。18は口縁部周辺のみが残存。内外面とも磨滅のため調整が分かりにくい。外面にハケメ、内面にケズリの痕跡がわずかに認められる。



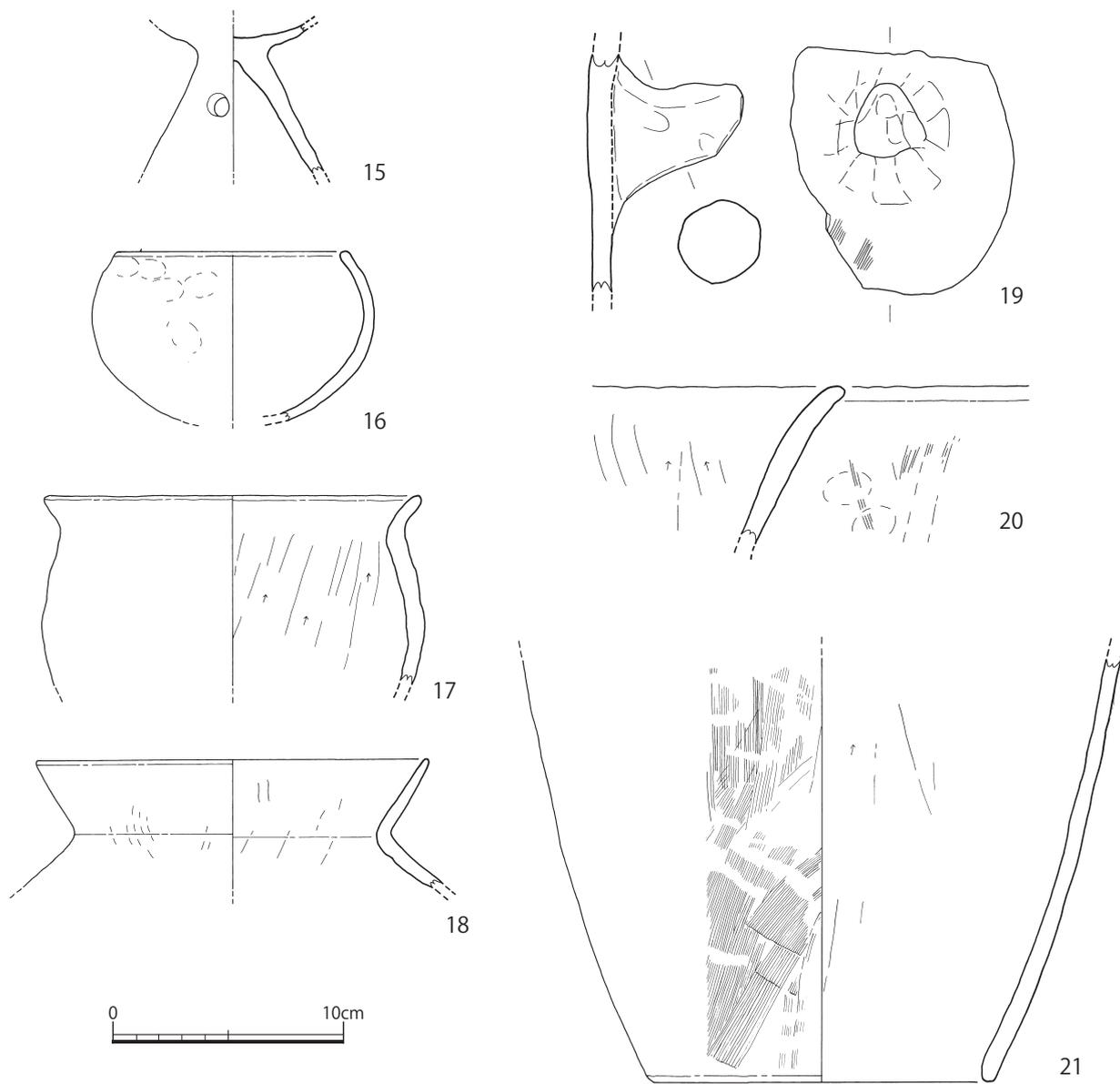
第9図 上園遺跡第9次調査地 SC01 平・断面見通図 (S = 1/60)

甑 (19 ~ 21)

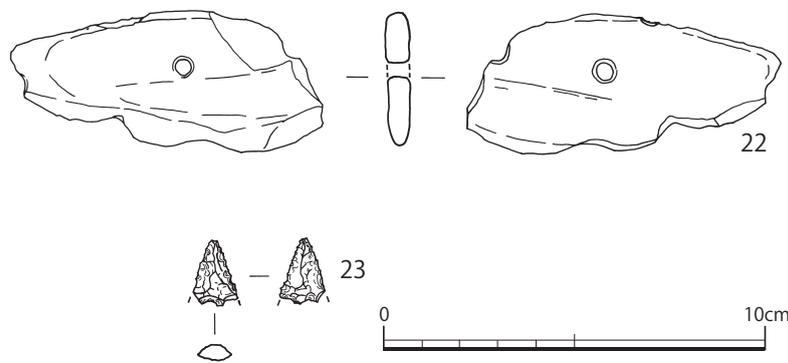
19 は把手付近の残存。把手部分にケズリ、体部にはハケメの痕跡が見られる。20 は口縁部付近の残存。内外面とも磨滅のため調整が分かりにくい。外面にハケメと指オサエの痕跡、内面にケズリの痕跡がわずかに認められる。21 は底部から体部中位にかけての残存。外面にはハケメが明瞭に残る。内面は磨滅しているが、ケズリの痕跡がわずかに残る。なお、20 と 21 は胎土、焼成の具合から、同一個体の可能性がある。



第 10 図 上園遺跡第 9 次調査地 SC01 出土遺物実測図① (S = 1/3、1/4)



第 11 図 上園遺跡第 9 次調査地 SC01 出土遺物実測図② (S = 1/3)



第 12 図 上園遺跡第 9 次調査地 SC01 出土遺物実測図③ (S = 1/2)

石製品 (第 12 図、図版 10)

石庖丁 (22)

結晶片岩製で、欠損した部分にもう 1ヶ所穿孔があったと思われる。

石鏃 (23)

黒曜石製で、先端は残存するが、両脚部をともに欠く。

SC02 (第 13 図、図版 3)

調査区北端部付近で、SC01 と重複した状態で検出された。前後関係としては、SC02 の方が新しい。短辺約 3m、長辺約 3.5～4m の長方形に近い平面プランを呈する。遺構検出面から床面までの深さは、最深で約 0.4m を測る。北側の壁から西側の壁の一部にかけて壁溝を検出したが、竈は検出されなかった。支柱穴らしきピットは 3 基検出できたが、浅いものであり、やや判然としない。

遺物は出土しなかった。

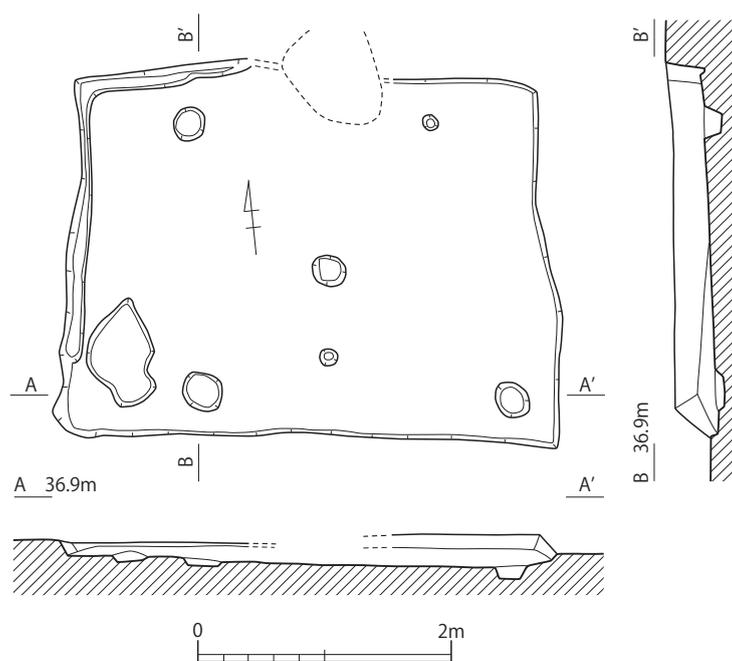
SC03 (第 14 図、図版 4)

調査区西端近くで検出された。本来西側の調査区外に伸びるものと想定され、その部分を補ってみると一辺約 4.8m の正方形に近い平面プランを呈すると思われる。おそらく削平のために壁の立ち上がりがなくなっている部分がある。また、本来 SC01・02 と切り合っていたと考えられるが、前後関係は不明である。遺構検出面から床面までの深さは、最深で約 0.15m。床面はほぼフラットで、支柱穴と思われるピットを 1 基確認したが、その他は不明である。竈、壁溝は検出されなかった。南側の壁の一部が二段掘りになっている。

遺物は、埋土中から須恵器、土師器等が出土した。

出土遺物 (第 15 図、図版 10・11)

土師器



第 13 図 上園遺跡第 9 次調査地 SC02 平・断面見通図 (S = 1/60)

高杯 (24～26)

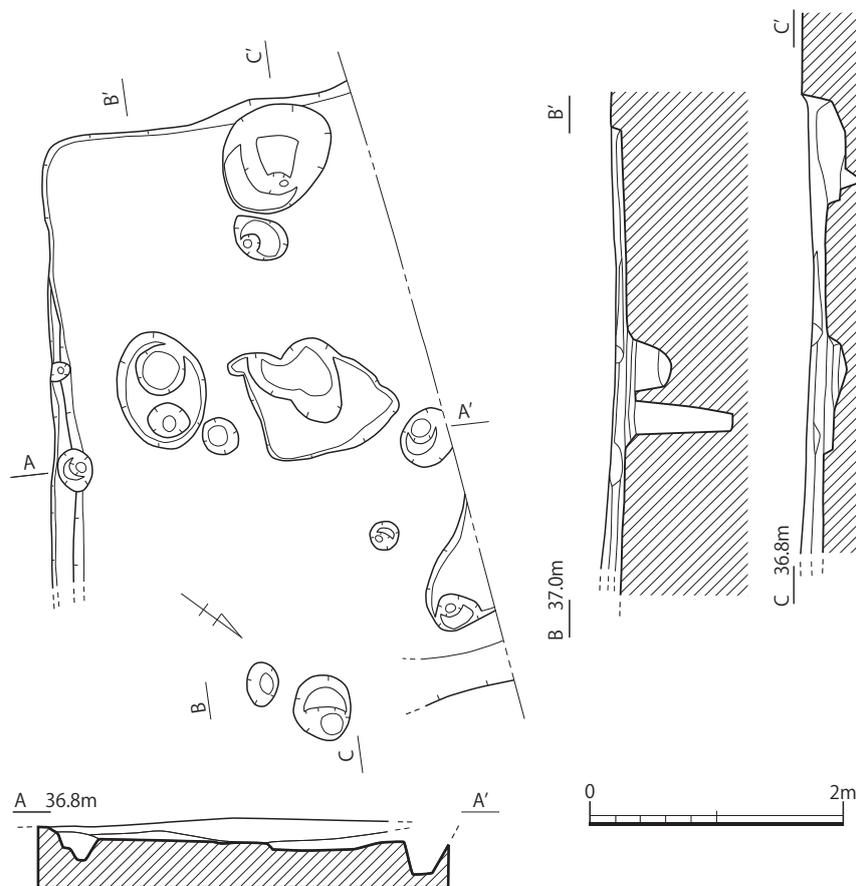
いずれも脚端部と杯部を欠く。24 は内面にシボリ痕が残るほか、外面にわずかにハケメの痕跡が残る。脚部に3ヶ所の穿孔がある。25 は脚部外面の一部にケズリが認められる。脚部に3ヶ所の穿孔がある。26 は脚部・杯部内面に部分的にハケメが認められる。

甕 (27～30)

27 は下半部のみが残存。内外面とも磨滅しているが、体部内面下位にハケメの痕跡が認められる。28 は口縁部から体部中位にかけての残存。内外面とも磨滅しているが、体部外面に斜方向のタタキが部分的に観察できるほか、体部内面にはわずかにハケメが残る。口縁部外面には回転ナデを施す。29 は体部中位から底部にかけての残存。内外面とも磨滅しているが、体部外面に斜方向のタタキが部分的に観察できるほか、体部内面にはわずかにハケメが残る。底部付近は一部に煤が付着する。30 は口縁部から体部上位にかけての残存。体部外面にハケメ、体部内面には指オサエを施す。口頸部の調整は磨滅のため不明である。なお、28、29 は接合しなかったものの、法量、胎土、調整、焼成の具合から同一個体である可能性が高い。

SC04 (第16図、図版4)

調査区中央、やや東寄りの場所で検出された。短辺4.6～4.9m、長辺5.5～6mのほぼ長方形を呈する。床面はほぼ平坦で、両方の短辺沿いに2段掘りし、いわゆるベッド状遺構を設けている。床面からはいくつかのピットを検出したが、主柱穴を確定するには至らなかった。遺構面からの深さ



第14図 上園遺跡第9次調査地 SC03 平・断面見通図 (S=1/60)

は、西側のベッド状遺構の上面までで0.05～0.08m、東側では0.2～0.25m、一段下までは約0.3mを測る。一部を除いて壁溝を巡らせている。竈は検出できなかったが、中央部にあるピットは炉の可能性はある。

遺物は、埋土内から須恵器、土師器、瓦器、石製品が出土した。

出土遺物 (第17図、図版11)

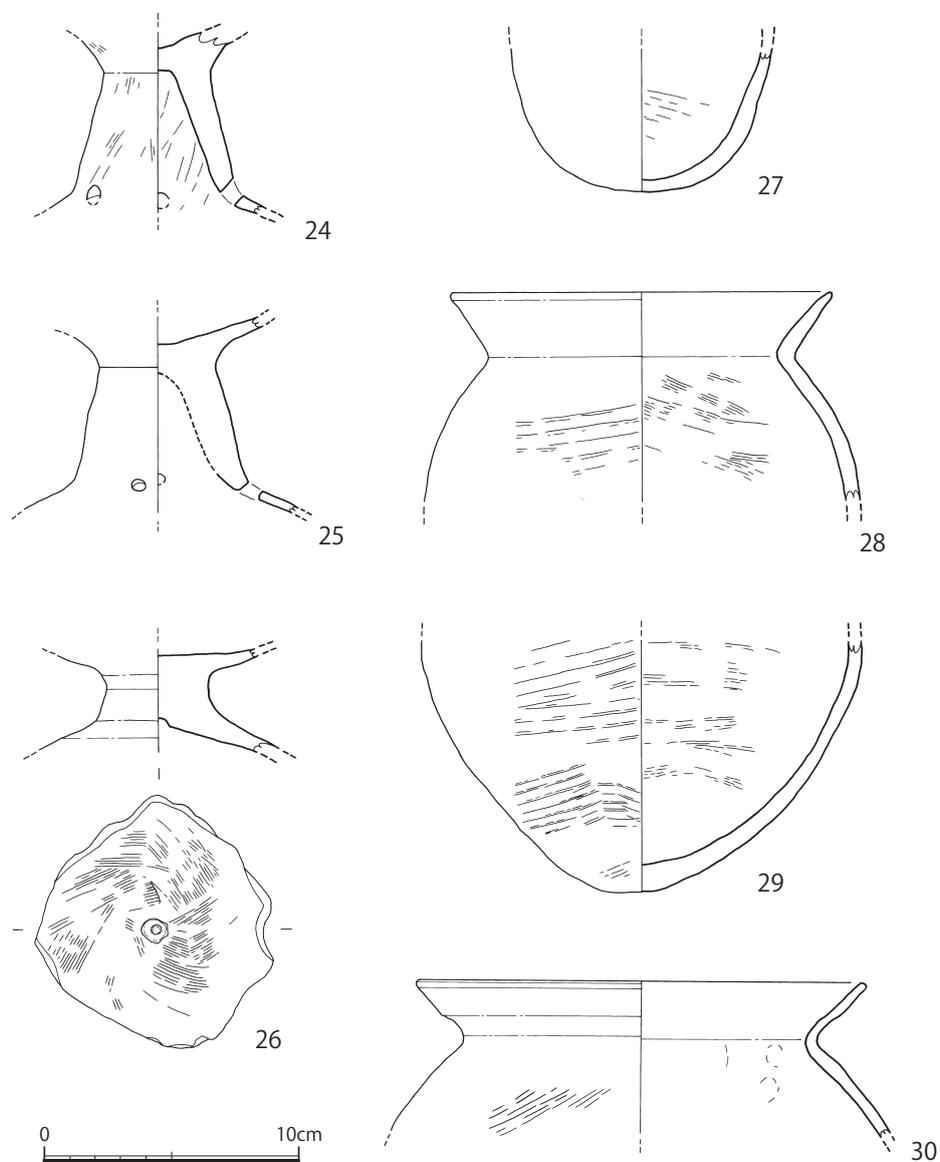
須恵器

杯蓋 (31、32)

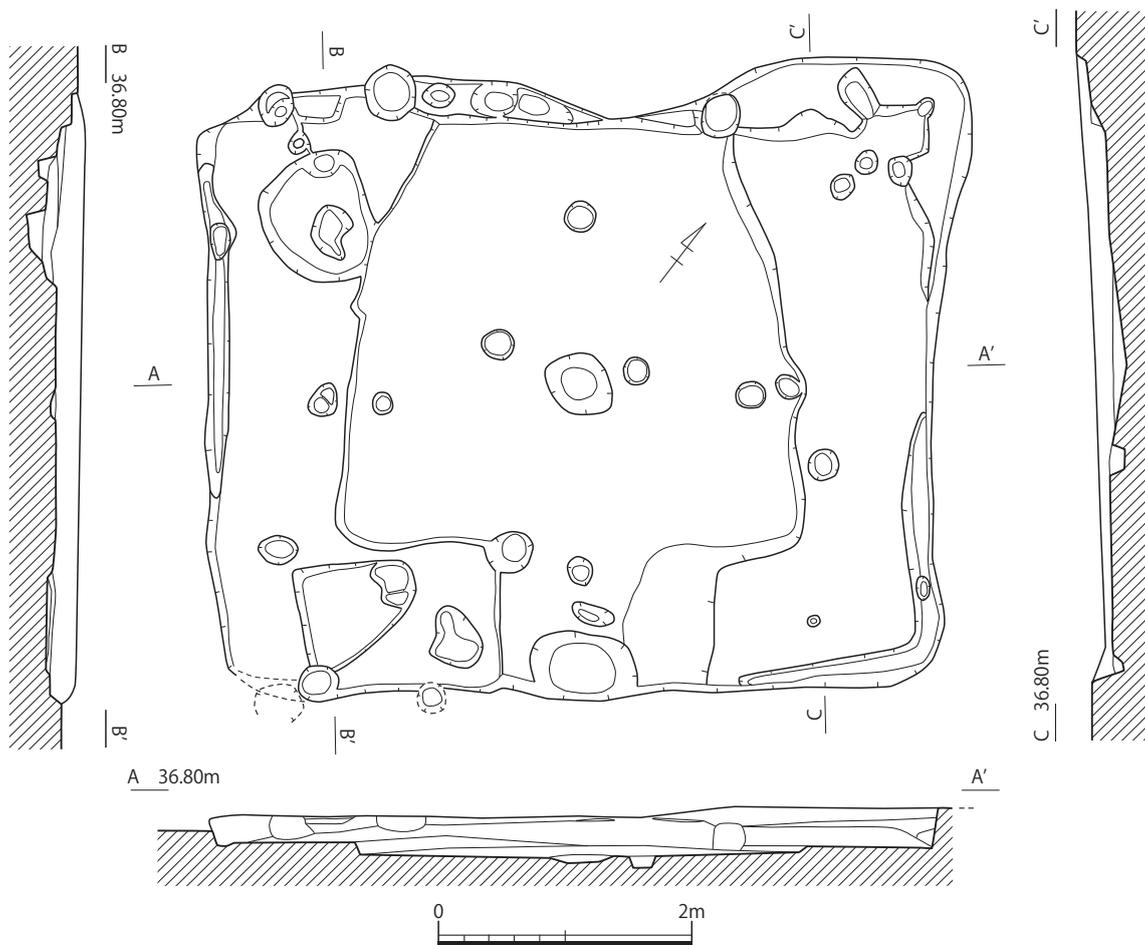
31はやや焼成不良で橙色を呈し、天井部外面にヘラ記号を有する。32の外面は降灰のため調整不明。口縁端部には重ね焼きの痕跡が認められる。

杯身 (33、34)

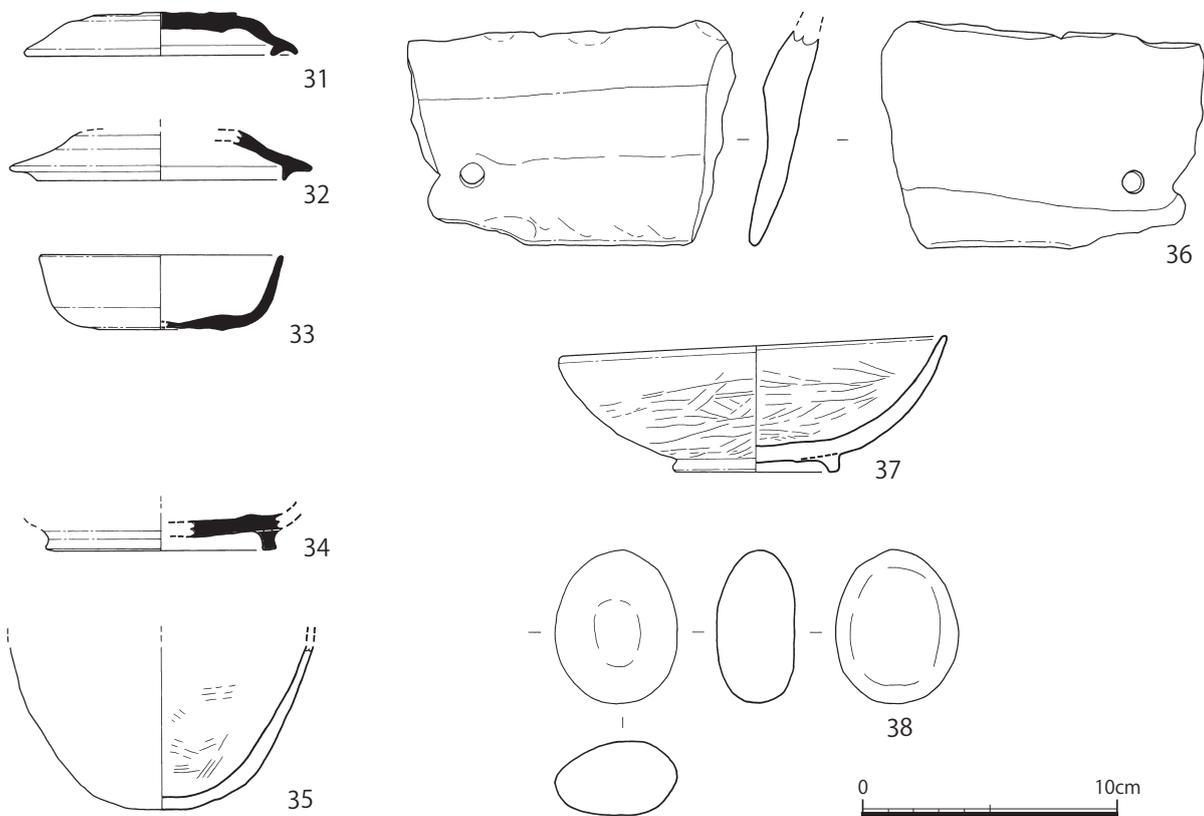
33の底部はヘラ切り後不定方向のナデを施す。底部外面にヘラ記号を有する。34は高台貼り付け後回転ナデで仕上げる。



第15図 上園遺跡第9次調査地 SC03 出土遺物実測図 (S=1/3)



第 16 図 上園遺跡第 9 次調査地 SC04 平・断面見通図 (S = 1/60)



第 17 図 上園遺跡第 9 次調査地 SC04 出土遺物実測図 (S = 1/3)

土師器

甕 (35)

体部中位以下の残存。内外面ともに磨滅しているが、内面にかすかにハケメの痕跡が認められる。

甌 (36)

下端部付近の小片。内面に、胎土の表面を帯状にぬぐったような痕跡が観察できる。1ヶ所に穿孔がある。

瓦器 (37)

内外面ともヘラミガキの痕跡が部分的に認められる。

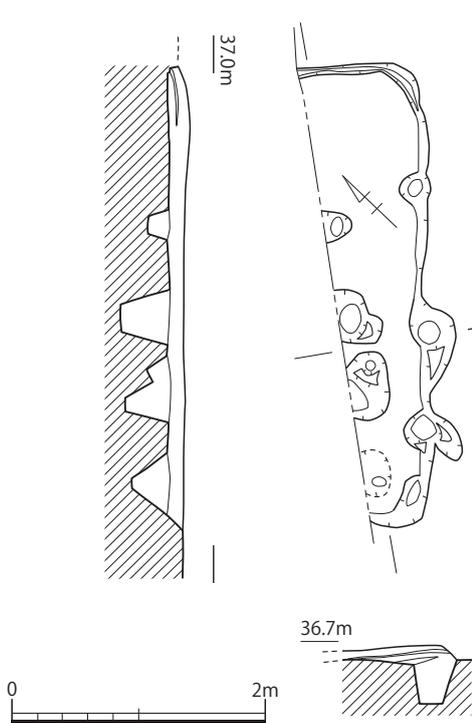
石製品 (38)

使用した痕跡が認められず、用途不明である。

SC05 (第18図、図版5)

調査区西隅付近で検出され、現況で東側の壁約3.8mが確認された。大部分は西側の調査区外に伸びるものと想定される。遺構検出面から床面までの深さは、最深で約0.12mを測る。床面はほぼ平坦で、いくつかのピットを検出したが、主柱穴を確定するには至らなかった。

遺物は埋土中から1点出土した。



出土遺物 (第19図)

石製品

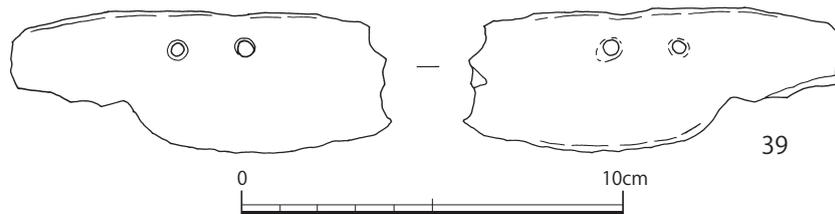
石庖丁 (39)

サヌカイト製で2ヶ所に穿孔がある。あまりに薄くもろいため、断面図を作成できなかった。

SC06 (第20図、図版6)

調査区南隅付近で検出された。現況で確認された部分から、調査区外に伸びる部分を補うと、一辺約3.9mの正方形に近い平面プランを呈すると思われる。床面はほぼ平坦だが、2ヶ所で2段掘りをして、不整形なベッド状遺構を設けている。床面はほぼ平坦で、主柱穴になりうるピット2基を検出したが、並びが悪く、判然としない。遺構面からの深さは最深部で約0.4mを測る。南側の壁に幅約0.2～0.4m、深さ約0.2mの溝が取り付くが、SC06との前後関係を明らかにすることはできなかった。

第18図 上園遺跡第9次調査地
SC05 平・断面見通図 (S=1/60)



第19図 上園遺跡第9次調査地 SC05 出土遺物実測図 (S=1/2)

遺物は、埋土中から弥生土器、石製品が出土した。

出土遺物 (第 21・22 図、図版 11)

弥生土器

壺 (40)

40 は内外面とも磨滅のため調整不明。

甕 (41～48)

41 は口縁部を強く外に折り曲げ、内面にハケメを施す。その他の部位の外表面はハケメ、内表面は磨滅のため調整不明。口縁部の下に 1 条の突帯をめぐらせる。42～44 はいずれも内外面とも磨滅のため調整不明。45 の底部内外面にはハケメが残る。46 は底部外表面に煤が付着する。47 は内面にわずかに指オサエの痕が認められる。48 は底部内面に薄い黒斑が見られる。

石製品

剥片 (49)

サヌカイト製で、一部に自然面が残る。

②不整形土坑

SX01 (第 23 図)

調査区北東隅付近で検出された。長径 1.55m、短径 0.75m の楕円形に近い平面プランを呈する。底面は東側が相対的に深くなっており、最深部は遺構検出面から 0.65m を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては、土師器の小片が出土した。

出土遺物 (第 25 図)

土師器

杯 (50)

残存高 2.6cm の小片である。体部外表面に薄い煤のようなものが観察できる。

SX02 (第 23 図)

調査区の北部、SC01 の 0.5m 北側で検出された。長径 1.9m、短径 0.44m を測る。床面はほぼ平坦である。遺構検出面からの深さは最深部でも 0.05m だが、壁面は斜めに立ち上がるようである。遺物としては、土師器が出土した。

出土遺物 (第 25 図、図版 11)

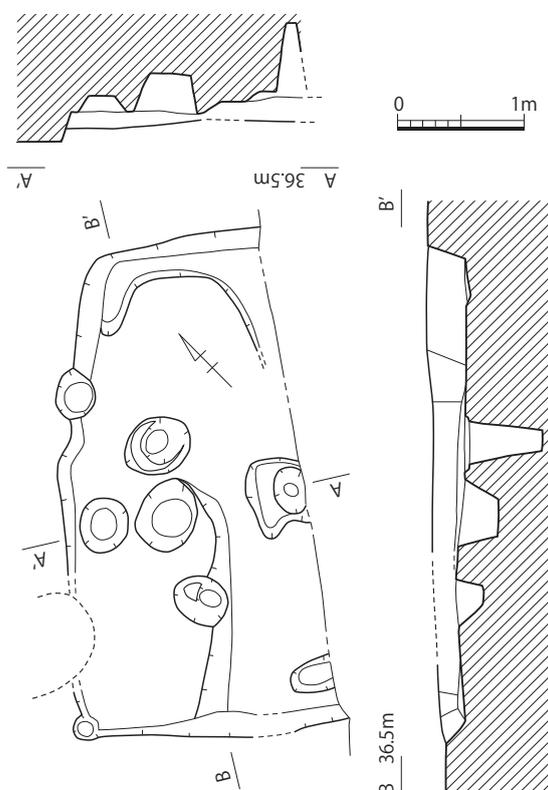
土師器

移動式カマド (51)

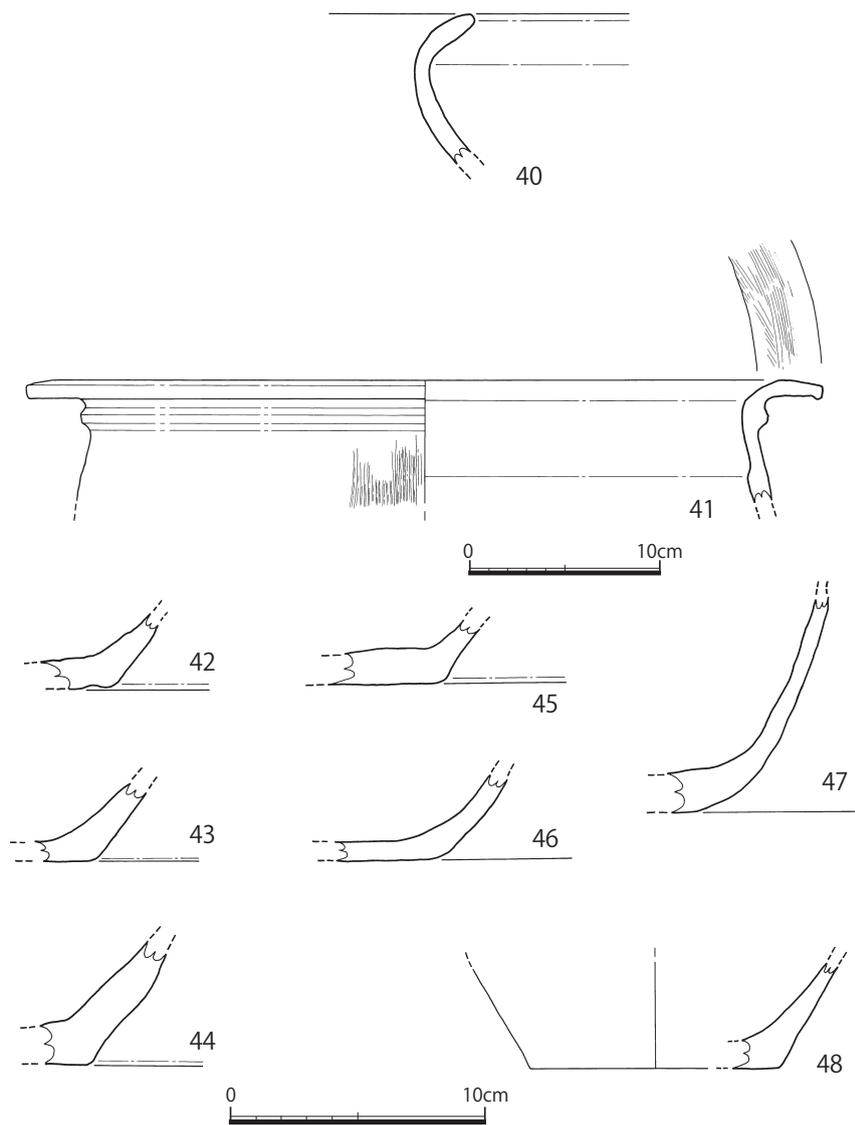
移動式カマドの裾部である可能性がある。全体をナデと指オサエで成形している。

SX03 (第 23 図)

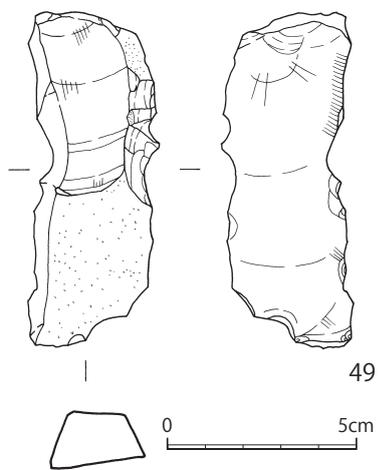
調査区のほぼ中央で検出された。1.08m × 1.2m ほどの凹凸の多い不整形な平面プランを呈する。



第 20 図 上園遺跡第 9 次調査地 SC06
平・断面見通図 (S = 1/60)



第 21 図 上園遺跡第 9 次調査地 SC06 出土遺物実測図① (S = 1/3、1/4)



第 22 図 上園遺跡第 9 次調査地 SC06 出土遺物実測図② (S = 1/2)

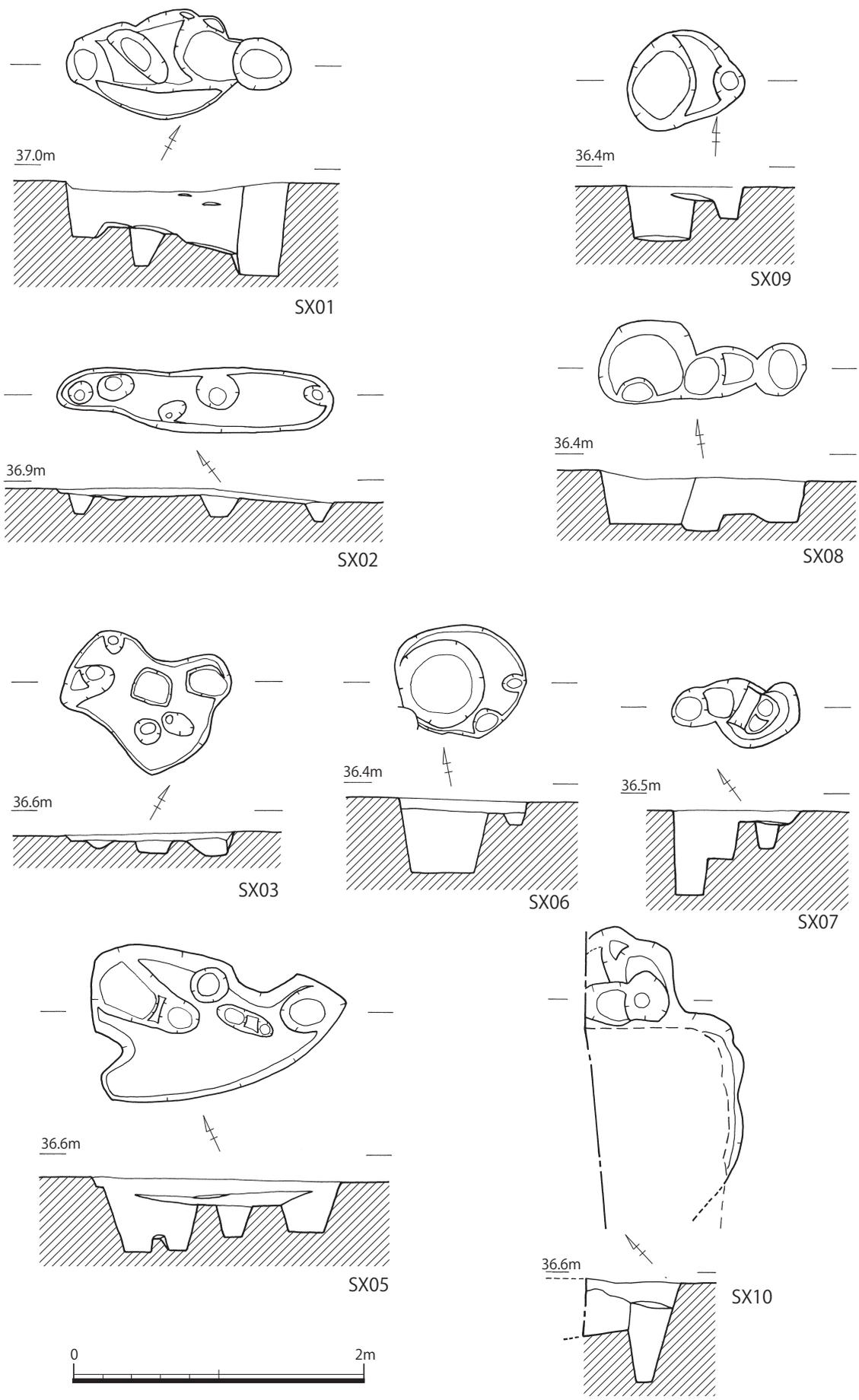
床面はほぼ平坦で、遺構検出面からの深さは最深部でも 0.18m だが、壁面は斜めに立ち上がるようである。遺物としては、須恵器が出土した。

出土遺物 (第 25 図)

須恵器

甌 (52、53)

52 は口縁部付近の小片である。内外面とも回転ナデを施し、焼成は非常に良好である。53 は把手部分のみで全体を不定方向のナデと指オサエで仕上げる。52、53 は胎土、色調とも酷似しており、



第 23 図 上園遺跡第 9 次調査地 SX01 ~ 03、05 ~ 10 平・断面見通図 (S = 1/40)

同一個体の可能性がある。

SX04 (第 24 図)

調査区のほぼ中央東端で検出された。約半分が東側の未調査区に伸びるものと思われる。現況では長径 4.8m×短径 1.5m ほどを測る。北側の長辺の一部は、削平により消失したものと判断した。床面は大きく 2 段掘り状になっており、最深部では検出面から 0.44m を測る。床面ではいくつかのピットが検出されており、最も深いもので検出面から 0.87m を測る。壁面は斜方向に立ち上がる。

出土遺物としては、埋土中から須恵器、土師器、瓦器などが出土した。

出土遺物 (第 25 図、図版 12)

須恵器

杯蓋 (54～57)

54～56 は天井部が丸みを帯びつまみが見つからない。57 は天井部が平坦でつまみがつく。54 と 56 は天井部外面にヘラ記号がある。55 は焼成良好だが、全体的に黄橙色から褐色を呈する。57 は口縁端部に重ね焼きの痕跡がある。

高杯 (58)

58 は脚部のみ残存である。焼成がやや不良で、全体的ににぶい黄橙色を呈する。

黒色土器

椀 (59～61)

59～61 は底部のみ残存。いずれも全体にやや磨滅しており、内外面ともヘラミガキが施されると考えられるが分かりにくい。

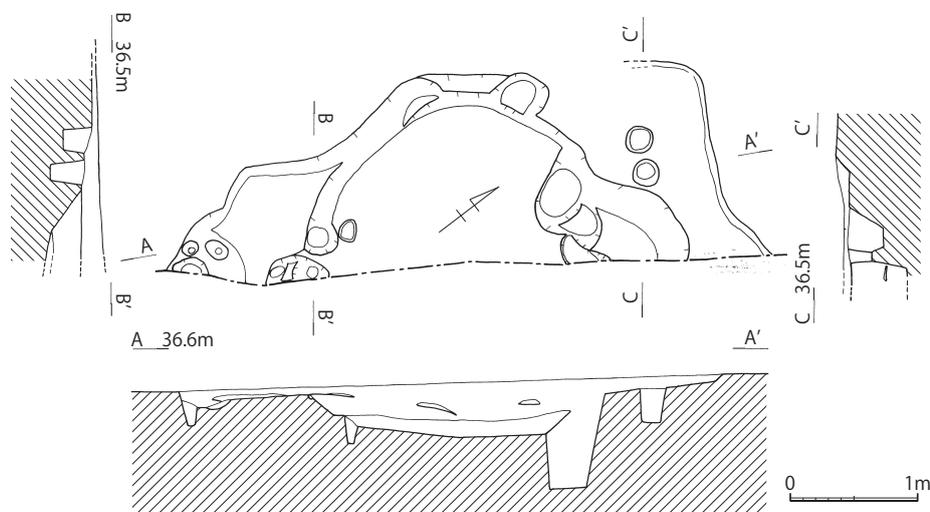
瓦器

椀 (62)

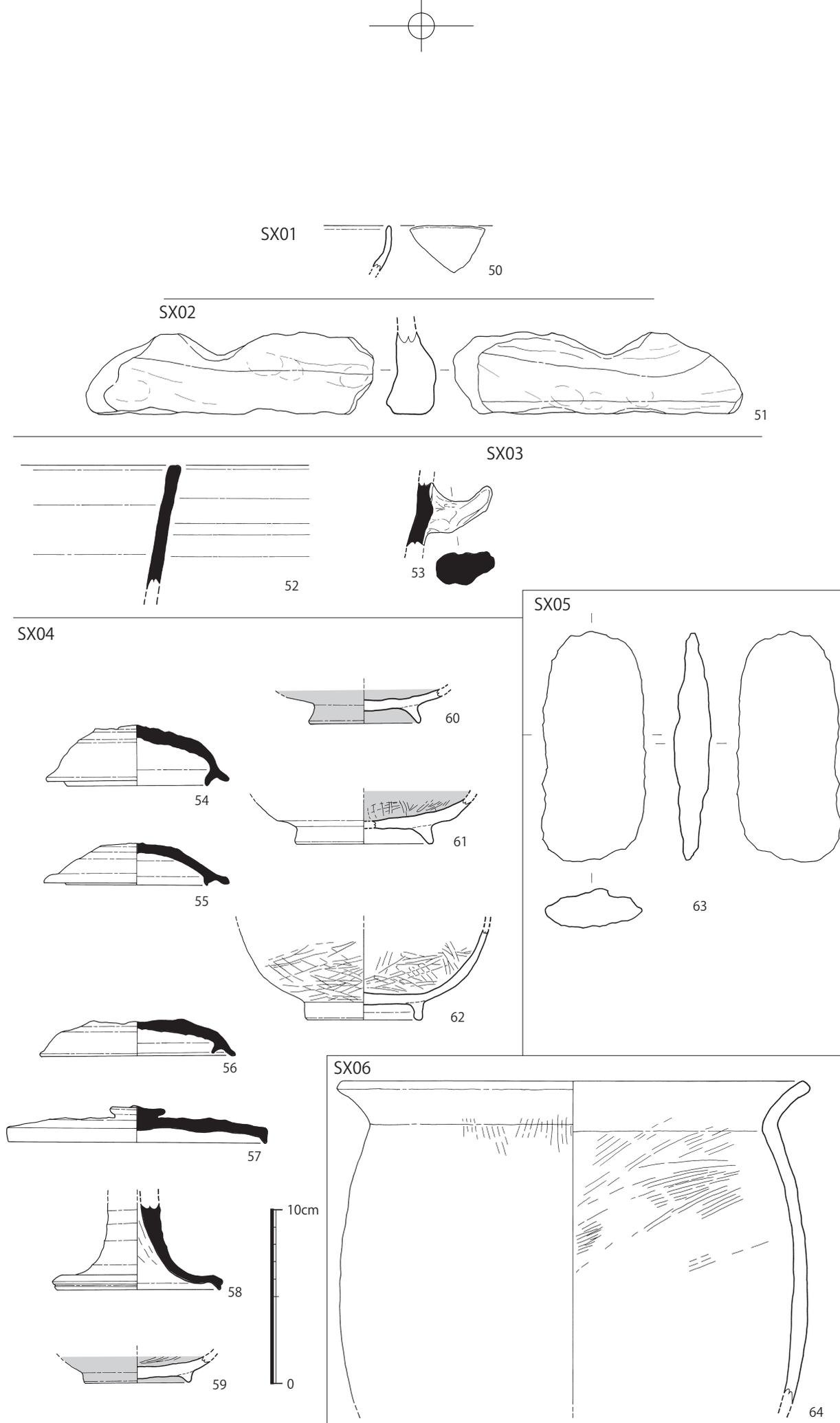
62 は炭素の吸着が良好で内外面とも黒色を呈する。

SX05 (第 23 図)

調査区中央、やや西寄り検出された。長径 1.76m、短径 1.1m の、二等辺三角形に近い不整形



第 24 図 上園遺跡第 9 次調査地 SX04 平・断面見通図 (S = 1/60)



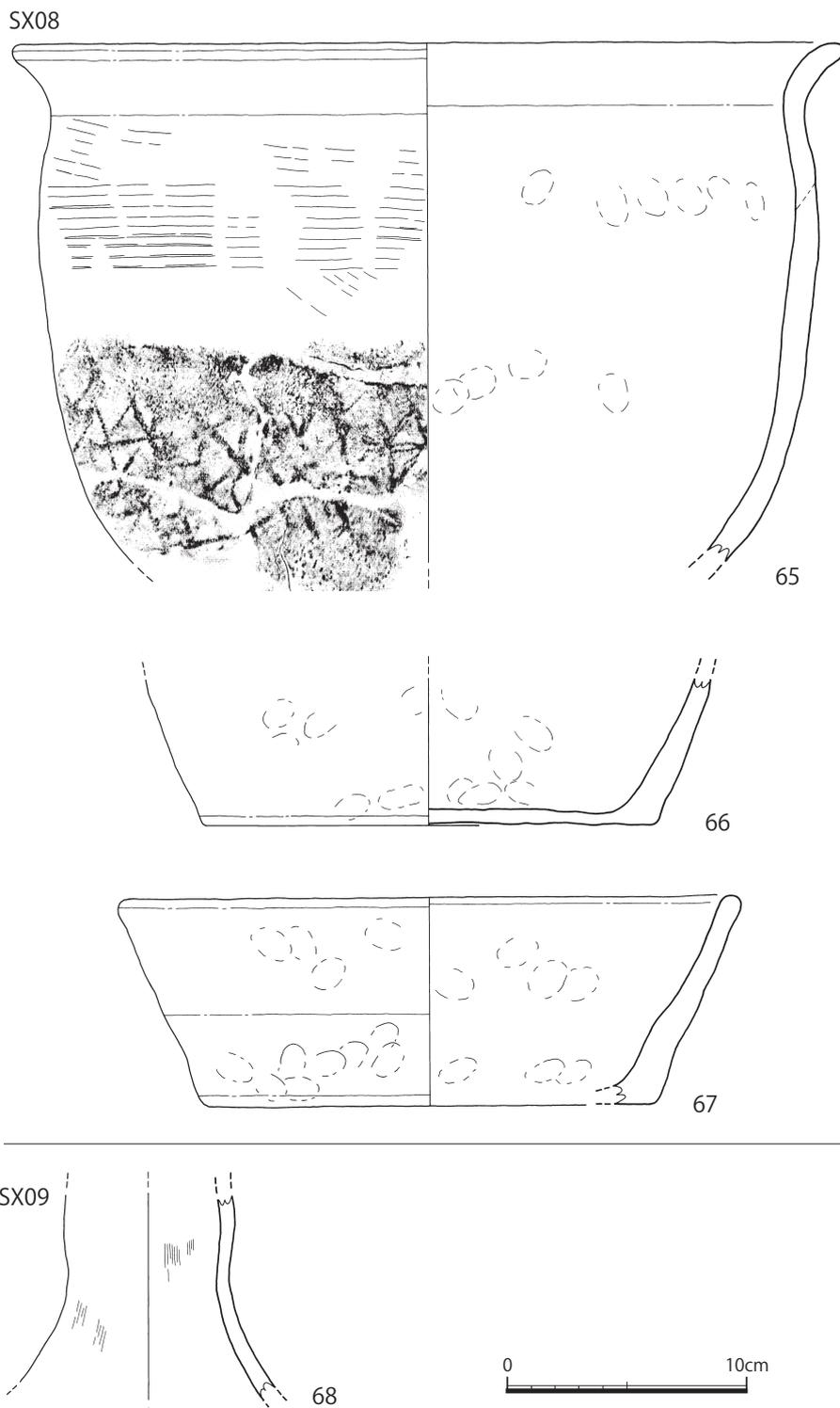
第 25 図 上園遺跡第 9 次調査地 SX 出土遺物実測図① (S = 1/3)

を呈する。床面はほぼ平坦で、遺構検出面からの深さは最深部で0.5mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては、石製品が出土した。

出土遺物（第25図、図版12）

石製品

石斧（63）



第26図 上園遺跡第9次調査地 SX 出土遺物実測図② (S=1/3)

蛇紋岩製の打製石斧で、全体的に風化している。

SX06 (第 23 図)

調査区南東寄りで検出された。長軸 0.9m、短軸 0.75m の正円形に近い平面プランを呈する。2 段掘りのような形状を呈し、遺構面から底面までは最深で 0.52m を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては、弥生土器が出土した。

出土遺物 (第 25 図、図版 12)

弥生土器

甕 (64)

体部中位以下を欠く。全体に磨滅しているが、外面に縦方向、内面に斜方向のハケメがかすかに観察できる。

SX07 (第 23 図)

調査区南より、SC06 から 0.84m 西側で検出された。長径 0.9m、短径 0.5m の、楕円形に近い平面プランを呈する。3 段掘りのような形状を呈し、遺構面から底面までは最深で 0.58m を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては土師器の小片が出土したが、図化できなかった。

SX08 (第 23 図)

SX07 の 1.3m 南西、SC06 から 0.72m の場所で検出された。長径 1.44m、短径 0.58m で、ピットを 3 基つないだような平面プランを呈する。床面は段があるがほぼ平坦で、遺構面から底面までは最深で 0.38m を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては、土師質土器、土師器が出土した。

出土遺物 (第 26 図、図版 12)

土師質土器

甕 (65)

体部下位を欠く。全体に磨滅しているが、体部外面中位タタキ、上位に粗いハケメが残る。体部内面には指オサエ、口縁部内外面は回転ナデを施す。

土師器

鉢 (66、67)

接合しなかったため別個体としたが、66 と 67 は法量、胎土、調整、焼成等が酷似しているため、同一個体である可能性が高い。

SX09 (第 23 図)

調査区北西隅近くで検出された。長軸 0.8m、短軸 0.7m のやや歪んだ円形の平面プランを呈する。中央が浅く、両端が深い、それぞれの底面はほぼ平坦である。遺構面から底面までは最深で 0.4m を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては、土師器が出土した。

出土遺物 (第 26 図、図版 12)

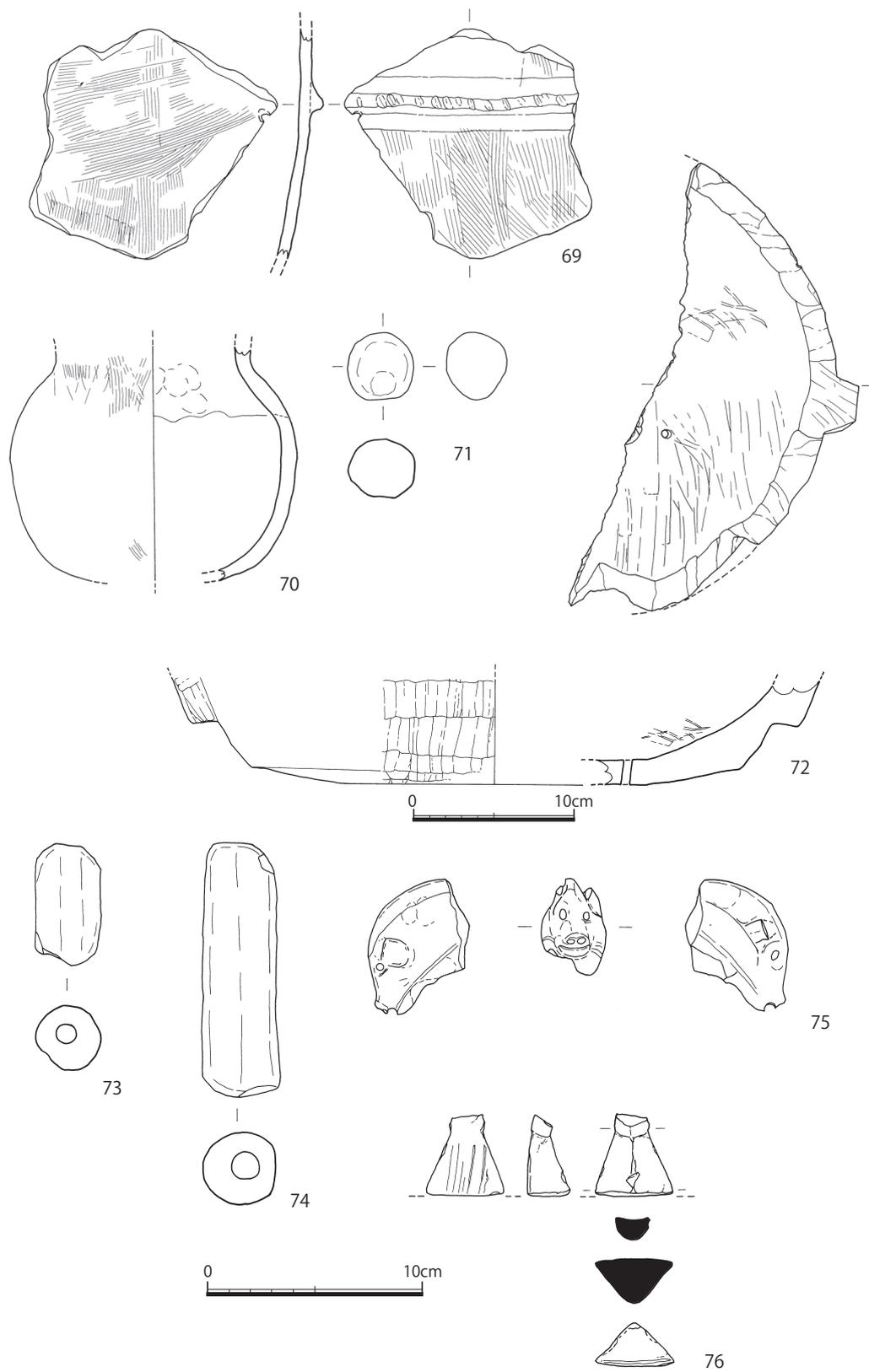
土師器

器台 (68)

上位と下位を欠く。外面に丹塗りとハケメ、内面にハケメを施す。

SX10 (第 23 図)

SC05 の北側壁と切り合っており、前後関係としては SX10 の方が古い。現況で長径 0.7m、短径 0.6m



第 27 図 上園遺跡第 9 次調査地その他の遺物実測図 (S = 1/3、1/4)

を測るが、SC05 に切られるほか西側の調査区に伸びており、本来の形状は不明である。現況で、遺構面から底面までは最深で 0.7m を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては、土師器が出土したが、小片のため図示できない。

その他の遺物（第 27 図 69～76、図版 13）

69～72 はピット出土、73～75 は遺構検出面出土、76 は遺物包含層出土の遺物である。

69 は弥生土器の甕である。内外面ともハケメを施し、外面に 1 条の刻目突帯を有する。

70 は土師器の小型壺である。頸部以上を欠く。調整は、体部外面上位にハケメ、内面に指頭痕がわずかに残るほかは磨滅のため不明である。体部内面に、胎土の継ぎ目が観察できる。

71 は花崗岩製の石製品。直径約 3.1cm の球体を呈するが、用途不明である。

72 は滑石製の石鍋を二次加工している。口縁部を打ち欠いているほか、直径 0.5cm の穿孔がある。

73 と 74 は土師器の器台である。いずれも全体に磨滅しており、調整は不明である。

75 は土馬で、土師質である。目、鼻、口、手綱を線刻で表す。耳は粘土を貼り付けているが、両耳とも途中で欠損している。また、粘土をつまみ出してたてがみを表す。

76 は蹄脚硯の脚部。須恵質で、焼成は良好である。横断面形は上部がほぼ半円形で、それ以下は三角形を呈する。底部には横位の沈線が確認できるが、基部との接合痕は不明瞭である。背面には縦方向の削痕が観察できる。四角錐を縦に半裁することで規格性を持たせたものか。

(3) 小結

本次調査で検出された 5 軒の竪穴住居跡のうち、4 軒は古墳時代後期、1 軒は弥生時代中期のものである。これまで上園遺跡は古墳時代から平安時代にかけての複合遺跡と認識されていたが、本次調査の結果、その始まりが弥生時代までさかのぼることが明らかとなった。

3. 第 11 次調査

(1) 調査の概要

第 11 次調査地は、上園遺跡のほぼ中央部、上大利四丁目 120 - 4 に所在する。平田川西岸の低位段丘上に立地し、標高は約 34m を測る。調査前は宅地として利用されていた。

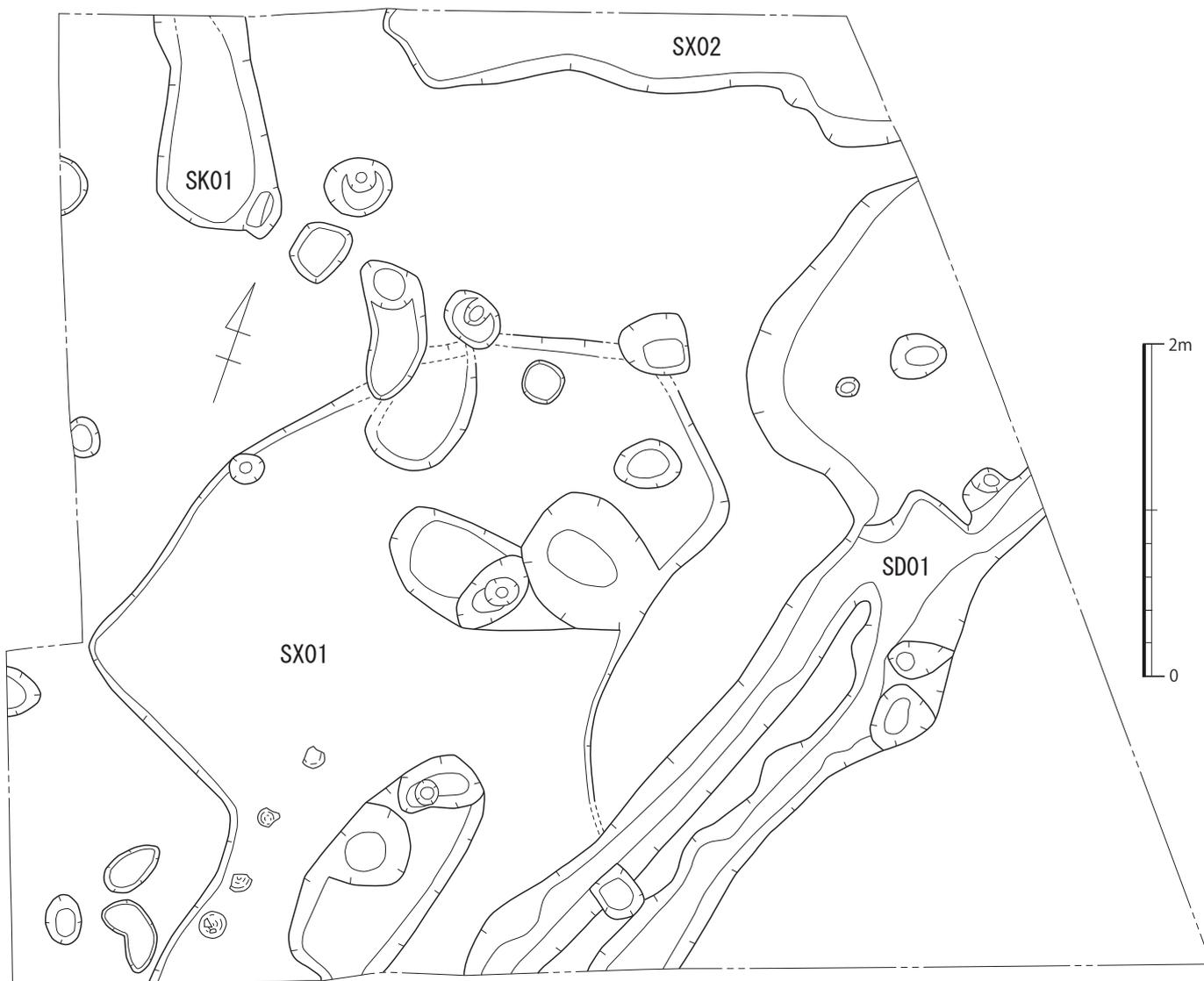
本次調査は、個人専用住宅の建て替えに伴って実施されたもので、調査面積は約 35㎡、調査期間は平成 16 年 11 月 15 日から同年 11 月 30 日までである。調査の結果、6 世紀後半に属する溝 1 条、土坑 1 基、6 世紀後半に属する不整形竪穴状遺構 1 基、その他時期の特定できないピットが検出され、須恵器、土師器、新羅土器、黒色土器、石製品が出土した。

(2) 遺構と遺物

① 溝

SD01 (第 29 図、図版 7)

調査区東部をほぼ南北に縦断する形で検出された。両端部とも未調査地に伸びる。平面プランは、南から中央部にかけては幅 0.8 ~ 1.1m 程度だが、北側の部分では幅 2.05m と急激に広がる。



第 28 図 上園遺跡第 11 次調査地遺構配置図 (S = 1/40)

底面は、南から中央部にかけては2段掘りしており、北側の急激に幅が広がる部分では平坦である。壁は両面とも斜方向に立ち上がる。

遺物としては、埋土中から主に須恵器が出土した。

出土遺物 (第30～32図、図版13・14)

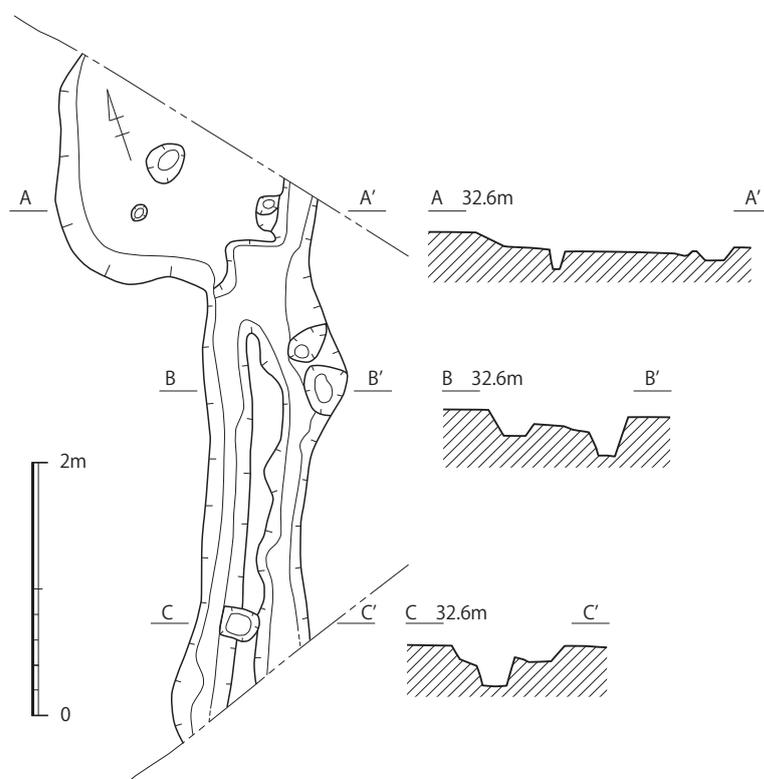
須恵器

杯蓋 (77～88)

77は体部の小片。調整は内外面とも回転ナデ。78は天井部外面にヘラ切り後回転ナデ、その他の部分に回転ナデを施す。天井部内面に当具痕がある。内外面とも自然釉がかかる。79、80は天井部外面に回転ヘラケズリ、その他の部分には回転ナデを施す。天井部内面の調整は、79が不定方向のナデ、80には当具痕が残る。ともに天井部外面に重ね焼きの痕跡が見られるほか、79は内外面に、80は外面の一部に自然釉がかかる。81は天井部外面にヘラ切り後粗いナデと回転ヘラケズリ、体部内外面に回転ナデ、天井部内面に不定方向のナデを施す。天井部内面に当具痕がある。82、83、84、85は天井部外面に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデ。83は天井部内面に当具痕が残る。85は著しく焼け歪んでいる。86、87、88は天井部付近の小片で、いずれも内面に当具痕が残る。

杯身 (89～104)

89は底部を欠く。体部外面下位に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデを施す。受部の端部を焼成後に打ち欠いている。90、91は底部外面にヘラ切り後粗いナデ、底部外面から体部外面下位にかけて回転ヘラケズリ後回転ナデ、その他の部分に回転ナデを施す。いずれも天井部内面に当具痕がある。90は受部に重ね焼きの痕跡が残り、91は立ち上がりの端部を焼成後に打ち欠いている。

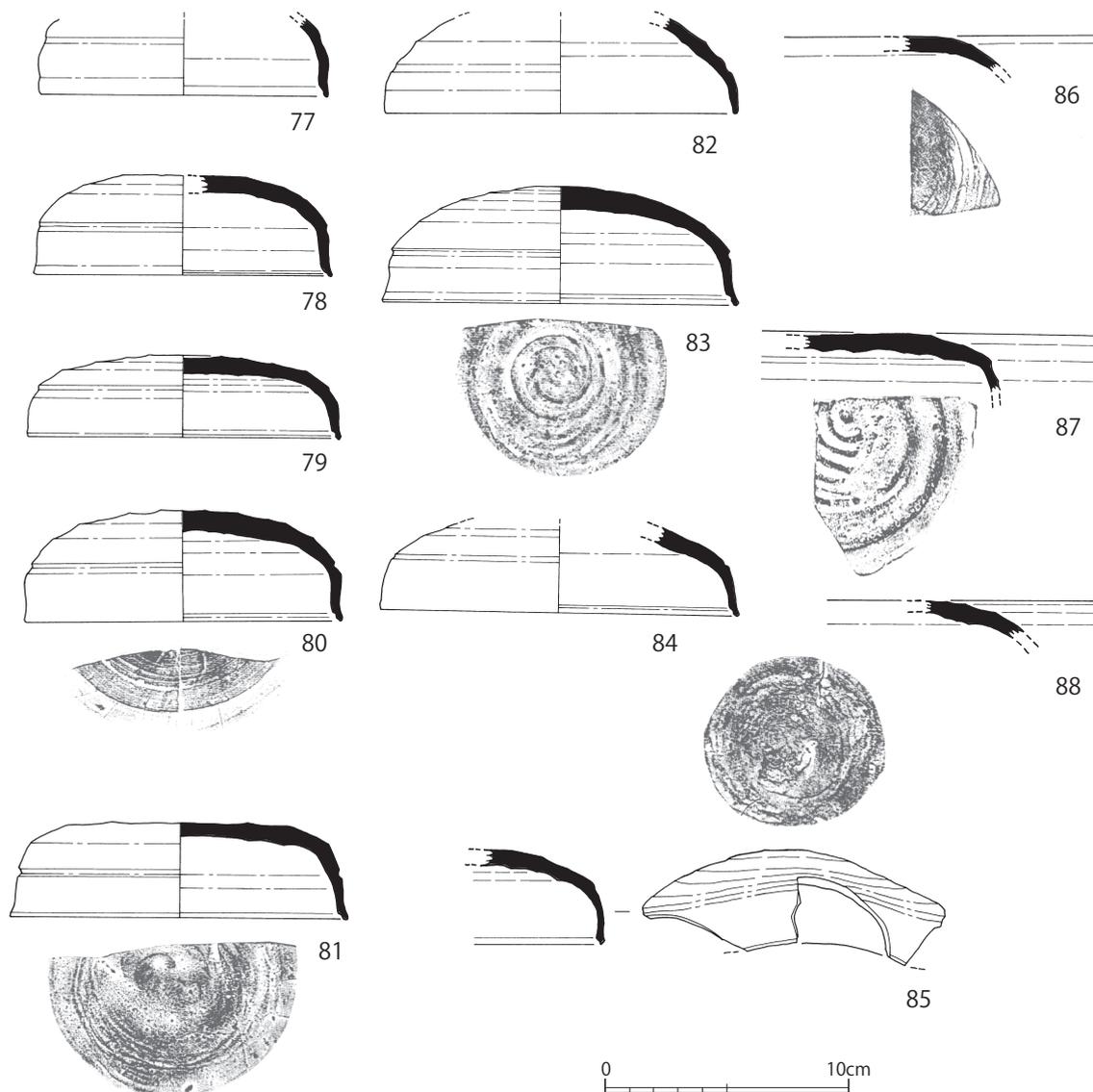


第29図 上園遺跡第11次調査地SD01平・断面見通図 (S=1/60)

92は体部外面下位に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデを施す。受部に重ね焼きの痕跡が残る。93、94、95、96は底部外面に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデを施す。93では底部内面に当具痕が残るほか、底部外面に板状圧痕のような痕跡が見られる。95は焼け歪んでいる。96は底部内面に当具痕が残るほか、受部に重ね焼きの痕跡が残る。97は降灰のため外面の調整が不明。内面には回転ナデと、一部に斜方向の静止ナデを施す。体部外面に窯壁と思われるものが融着するほか、立上がりに重ね焼きの痕跡が残る。98は底部外面に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデを施す。底部・受部外面で自然釉の上に煤が付着する。99、100、101は降灰のため外面の調整は不明。99の内面には回転ナデを施すほか、重ね焼きの痕跡が残る。100の内面は回転ナデと不定方向のナデ、101の内面は回転ナデと当具痕が残る。102、103、104は底部外面に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデを施す。底部内面の調整は、102と104には当具痕が残り、103は不定方向のナデである。

高杯 (105 ~ 109)

105は杯部と脚部の付け根がわずかに残る。調整は内外面とも回転ナデで、底部内面中央部には

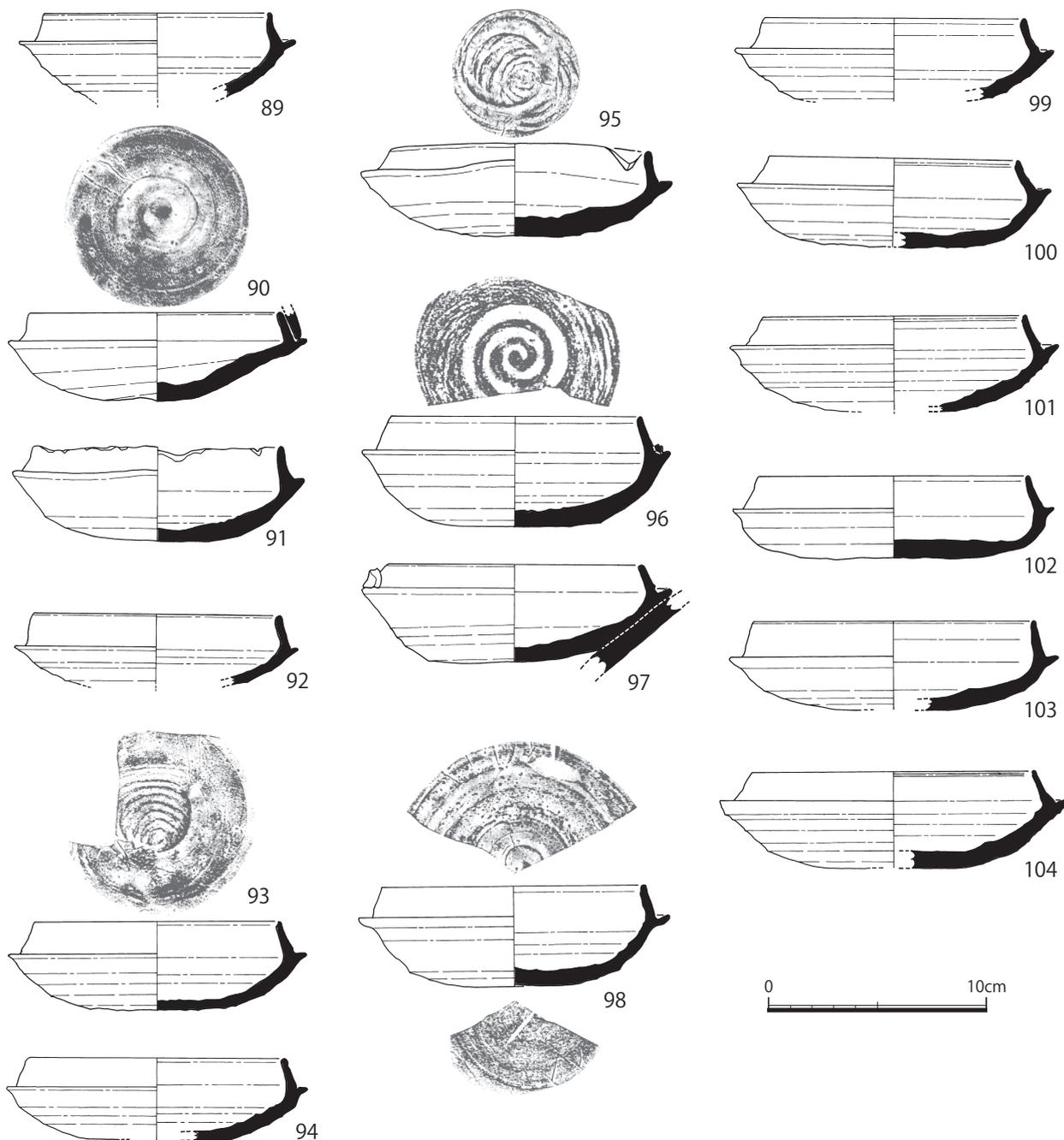


第30図 上園遺跡第11次調査地 SD01 出土遺物実測図① (S=1/3)

当具痕が残る。また、底部外面に櫛状工具による連続刺突文が施されている。脚部には3ヶ所の透かしの痕跡がある。後述する109と法量、焼成、胎土等が酷似しており、同一個体の可能性が高いと思われるが、接合しなかった。106は杯部のみの残存。底部外面から体部下位まで回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデを施す。底部内面には当具痕が見られる。底部外面には脚部を貼り付けた痕跡が見られる。107、108は杯部の小片。107の外面は降灰のため調整不明だが、2条の沈線を持つ。内面は回転ヘラケズリを施す。108は内外面とも回転ヘラケズリを施し、口縁端部に刻み目状の圧痕がある。109は脚部のみの残存。内外面に回転ナデを施し、3ヶ所に透かしがある。

壺 (110)

残存高 3.6cm。ミニチュア土器かあるいは装飾須恵器の可能性もある。調整は、底部から体部外面



第 31 図 上園遺跡第 11 次調査地 SD01 出土遺物実測図② (S = 1/3)

下位に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデと不定方向のナデを施す。体部外面に自然釉がかかり、他個体の一部が融着する。

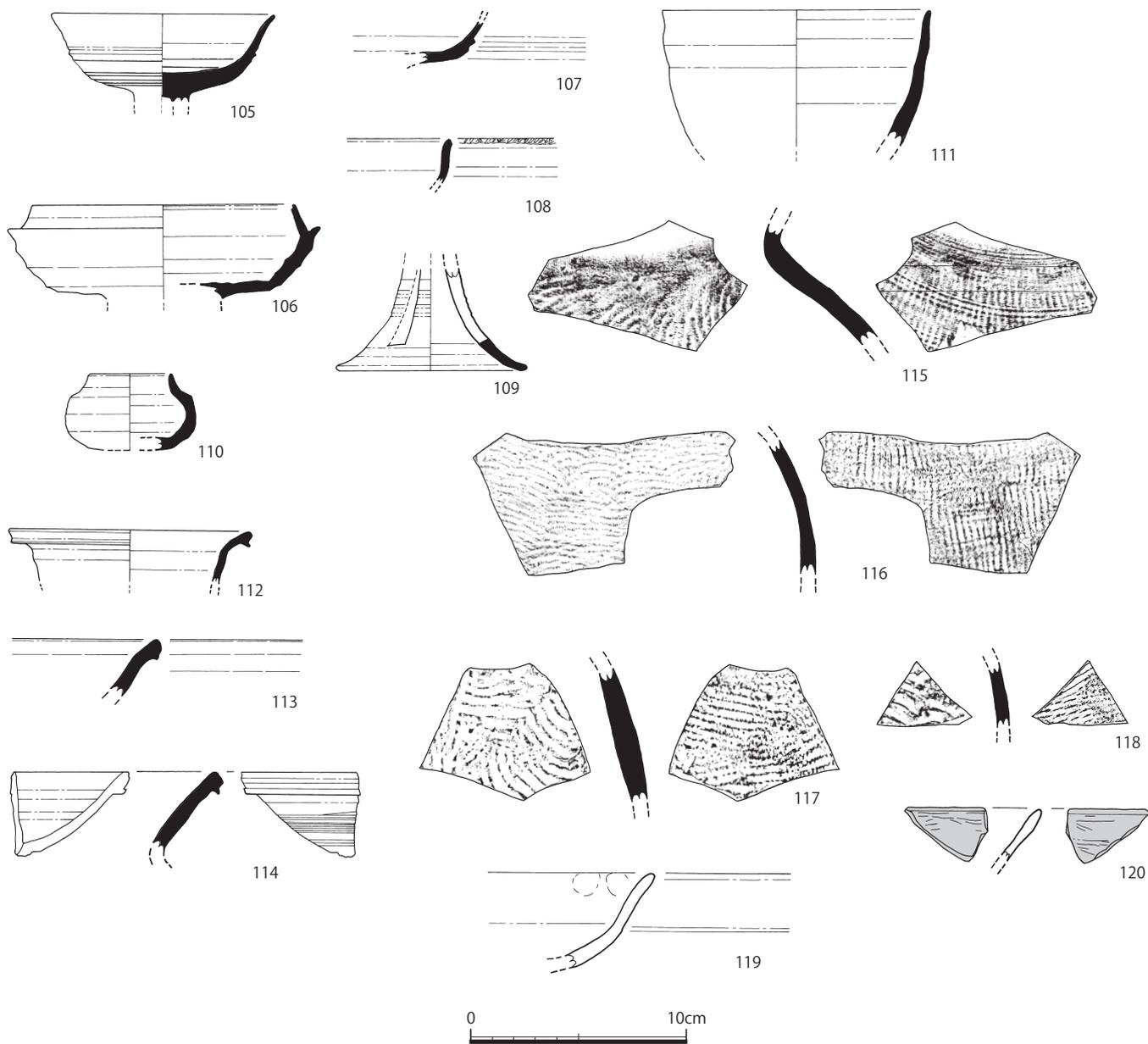
鉢 (111)

小ぶりの鉢である。降灰のため外面の調整は不明。内面は、やや強めの回転ナデを施している。

新羅土器の可能性のある土器 (112)

後述の新羅土器が確認されたため、これと同一個体の破片を搜索した。その結果、胎土・焼成や色調の雰囲気から新羅土器の可能性のある破片を2点抽出した。本件はその1点目である。

屈曲する口縁部片で、端部は二又状になる。内外面回転ナデで、内面はロクロ目が顕著である。全体に降灰がある。胎土は精良で、1 mm 以下の白色砂粒、黒色微粒子を含む。器壁は非常に薄く、胎



第 32 図 上園遺跡第 11 次調査地 SD01 出土遺物実測図③ (S = 1/3)

土・焼成や全体の雰囲気は 129 と良く似ており、同一個体の可能性がある。

甕 (113～118)

113、114 は口縁部の小片。113 は小型のものか。内外面とも回転ナデを施し、内面に自然釉がかかる。114 は外面にカキメと回転ナデ、内面に回転ナデを施す。端部は複雑な形に仕上げる。115～118 は体部の破片。115 は頸部付け根から肩部にかけての残存。外面は、平行タタキを回転ナデでナデ消し、内面は同心円文状当具痕を回転ナデでナデ消す。116、117、118 はおそらく体部上位。116、117 の外面は擬格子タタキ、内面は同心円文状当具痕が残る。116 は内外面とも降灰があり、一部自然釉化している。118 の外面は平行タタキの後磨り消し、内面は同心円文状当具痕が残る。

土師器

丸底杯 (119)

体部上位の小片である。全体的に磨滅しており調整は不明であるが、口縁部内面に指オサエの痕跡がわずかに観察できる。

黒色土器

椀 (120)

口縁部の小片と思われる。内外面ともミガキが一部残る。

②土坑

SK 01 (第 33 図、図版 8)

調査区北東隅付近で検出され、北側は調査区外に伸びる。現況で長径約 1.3m × 短径約 0.75m の楕円形に近い形を呈する。底面は平坦であるが、北側に傾斜する。最深部は検出面から 0.5m を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は、埋土中から須恵器、土師器、新羅土器が出土した。

出土遺物 (第 34 図、図版 15・16)

須恵器

杯身 (121～124)

121、122 は残存 1/4 程度の小片。121 は底部外面にヘラ切り後粗いナデ、その他の部分には回転ナデを施す。122 の外面は降灰のため調整不明、その他の部分は回転ナデ。123、124 は底部外面から体部中位にかけて回転ヘラケズリ、その他の部分には回転ナデを施す。底部内面には当具痕が見られる。

提瓶 (125)

把手のみの残存。全面に降灰があり、一部は自然釉がかかる。

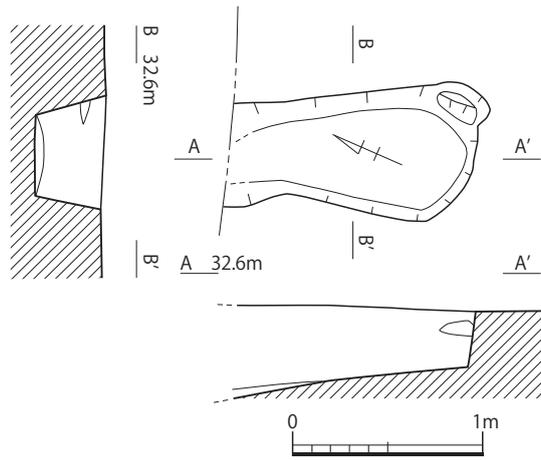
土師器

椀 (126)

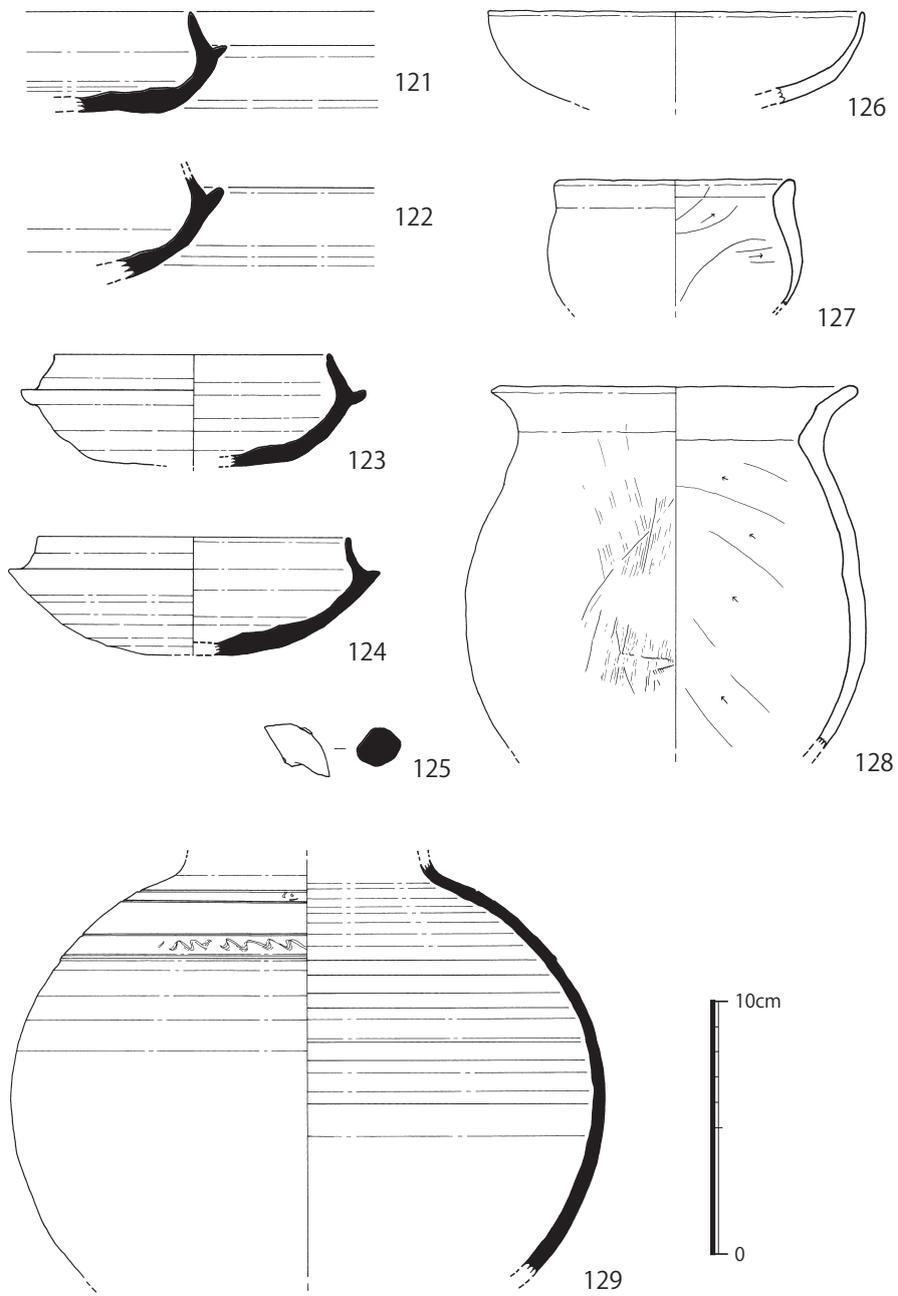
全体に磨滅しており調整不明。口縁部がやや黒変しかけている。

甕 (127、128)

127 は全体に磨滅しており調整が分かりにくい、内面の一部にケズリの痕跡が認められる。128 は底部を欠く。体部外面上位に細かいハケメ、口頸部には回転ナデを施す。体部内面のケズリはやや下がった場所から始まる。



第 33 図 上園遺跡第 11 次調査地 SK01 平・断面見通図 (S = 1/40)



第 34 図 上園遺跡第 11 次調査地 SK01 出土遺物実測図 (S = 1/3)

新羅土器 (129)

129 は新羅土器の壺である。頸部付根から体部下半にかけての破片である。15片ほどの破片になっており、直接接合しない破片を図上で復元したため、直径・傾きや全体の形状に不安がある（最も残存良好な部分で直径の1/8程度）。体部は球形で頸部の締まりは弱く、底部・口頸部を欠く。頸部付根付近の肩部に2条の沈線が巡り、その間にスタンプによる半円点文を施す。スタンプ文は現状で2ヶ所のみ確認でき、密に施すものではない。肩部下位には沈線・コの字状の小さな突帯が巡り、その間に1条の波状文を施す。外面全体は回転ナデである。体部下半は表面が磨滅するため不明瞭であるが、部分的に小さな面が複数あり、タタキの痕跡であろう。内面上半部は回転ナデで、ロクロ目が顕著に残る。下半部は表面に直径1.0～1.5cmほどの窪みが多くあり、当具痕と考えられる。当具原体は明確ではないが、部分的に平行条線を確認できることから、平行当具痕の可能性が高い。胎土は非常に精良で、1mm以下の白色砂粒の他、黒色の微粒子を含む。肩部にうっすら降灰の痕跡がある。

③不整形遺構

SX01 (第35図、図版7・8)

調査区中央から南部にかけて位置し、南側は未調査地に伸びる。SD01と切り合っており、前後関係はSX01の方が古い。現況で長径2.4m、短径1.5～2.0mの、中央部がくびれた不整形を呈する。底面はほぼ平坦で、いくつかのピットが検出された。遺構面からの最深部は0.37mを測る。

遺物としては、埋土中から須恵器、石製品等が出土した。特に遺構南西部で、底面からやや浮いた状態で、須恵器杯蓋3点、須恵器杯身1点が直線状にほぼ等間隔に並んで出土した。

出土遺物 (第36図、図版14)

須恵器

杯蓋 (130～132)

130、131は天井部外面に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデを施す。天井部内面には当具痕が残る。132の天井部外面には回転ヘラケズリを施すが、中心部はヘラ切り後粗いナデ。また、重ね焼きの痕跡が残る。その他の部分には回転ナデ、天井部内面には不定方向のナデを施す。内面の天井部から体部にかけて部分的に当具痕が残る。

杯身 (133、134)

133は底部外面に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデを施す。底部内面に当具痕がある。134の外面は降灰のため調整不明。内面は回転ナデを施し、底部には当具痕が残る。外面には別個体が融着している。

高杯 (135～137)

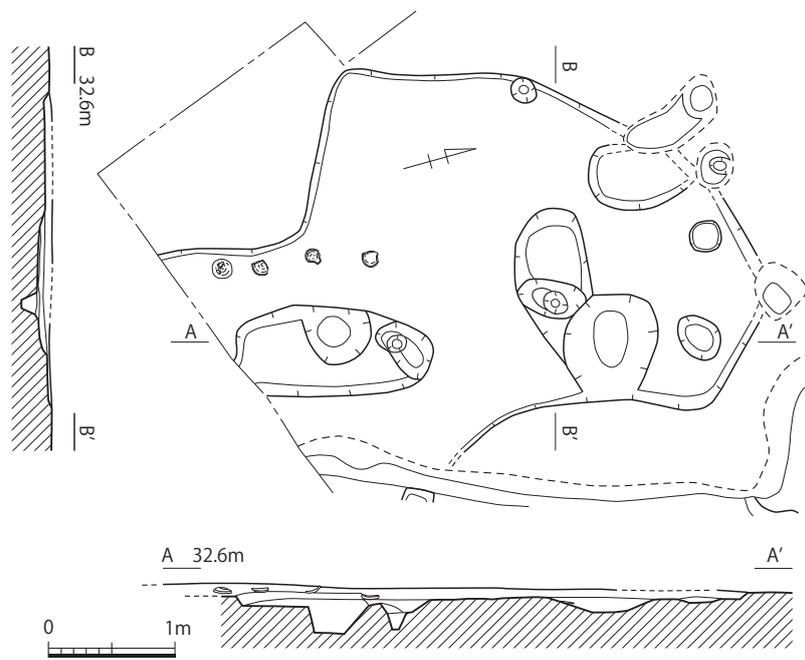
135、136は脚部の小片。いずれも外面にカキメ、内面にシボリ痕が残る。135には透かしと思われる断面が認められる。137は端部付近。外面上位にはカキメ、端部付近と内面には回転ナデを施す。降灰のため、外面の調整がやや不明瞭である。透かしは3方向と思われる。

甕 (138)

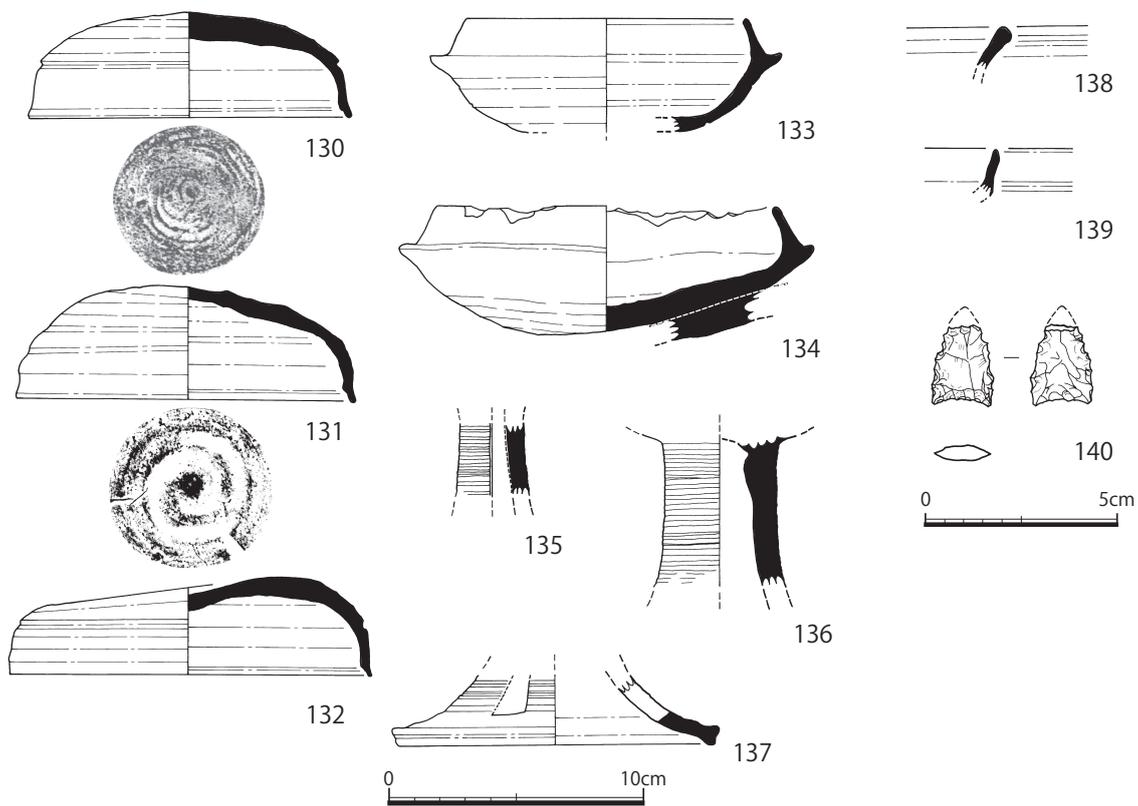
口縁部の小破片。内外面とも回転ナデを施す。

新羅土器の可能性のある土器 (139)

先述の新羅土器が確認されたため、これと同一個体の破片を搜索した。その結果、胎土、焼成や色



第 35 図 上園遺跡第 11 次調査地 SX01 平・断面見通図 (S = 1/60)



第 36 図 上園遺跡第 11 次調査地 SX01 出土遺物実測図 (S = 1/2、1/3)

調の雰囲気から新羅土器の可能性のある破片を抽出した。本件はその2点目である。

器種不明の口縁部片で、杯類の可能性もある。内外面回転ナデで、図上の下端部がわずかに屈曲する。胎土は精良で、白色砂粒、黒色微粒子を含む。SK01 出土の 129 と胎土、焼成等が似るが、細片のため詳細不明である。

石製品

石鏃 (140)

平基無茎鏃で先端を欠く。サヌカイト製。

SX02 (第 37 図)

調査区北側の壁に沿うような形で検出され、北側は未調査区に伸びている。現況で長径 3.2m × 短径 0.37 ~ 0.76m を測り、凹凸のある楕円形に近い形であろうか。床面はほぼ平坦で、遺構面からの深さは約 0.2m と一定している。床面からピット等は検出できなかった。

遺物としては、埋土中から須恵器、土師器が出土した。

出土遺物 (第 38 図)

須恵器

杯蓋 (141)

天井部外面はヘラ切り後粗いナデと回転ヘラケズリ、その他の部分には回転ナデを施す。天井部内面には当具痕が残る。外面は、ほぼ一面に降灰が見られる。

甕 (142)

甕の口縁部小片。内外面とも降灰のため調整不明だが、外面に 1 条の沈線を持つ。

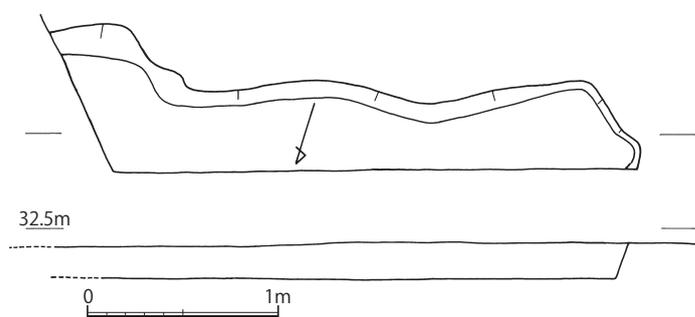
土師器

高杯 (143)

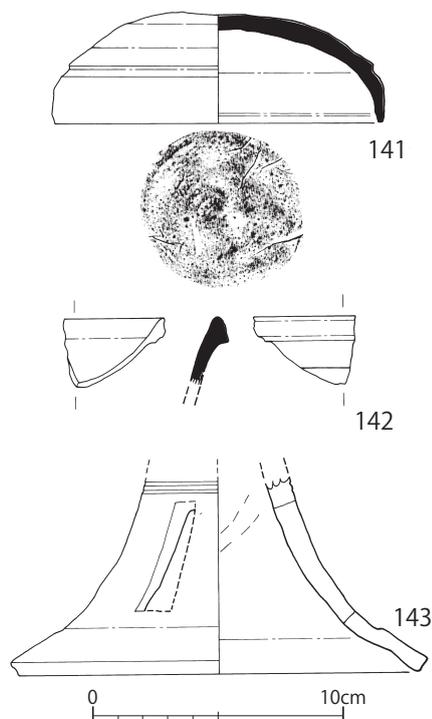
脚部のみが残存。全体的に磨滅しており調整が分かりにくい
が、部分的に回転ナデとシボリ痕が認められる。

(3) 小結

昭和 62 年に実施した上園遺跡第 4 次調査地点では、本次調査の西約 63m にあたる地点から平安時代の瓦がまとまって出土



第 37 図 上園遺跡第 11 次調査地 SX02
平・断面見通図 (S = 1/40)



第 38 図 上園遺跡第 11 次調査地 SX02
出土遺物実測図 (S = 1/3)

した。このため、本次調査により寺院関連遺構が検出されることも考えられたが、調査の結果、6世紀半ばから後半にかけての集落の一部であることが確認された。特に、不整形竪穴状遺構での須恵器杯蓋の出土状況と新羅土器の出土は、上園遺跡の性格を考えるうえで重要な資料となった。

4. 第12次調査

(1) 調査の概要

第12次調査地は、上園遺跡の南部、上大利四丁目111-1の一部に所在する。平田川西岸の河岸段丘上に位置し、令和2年現在も水田として利用されている。標高は32m程度である。

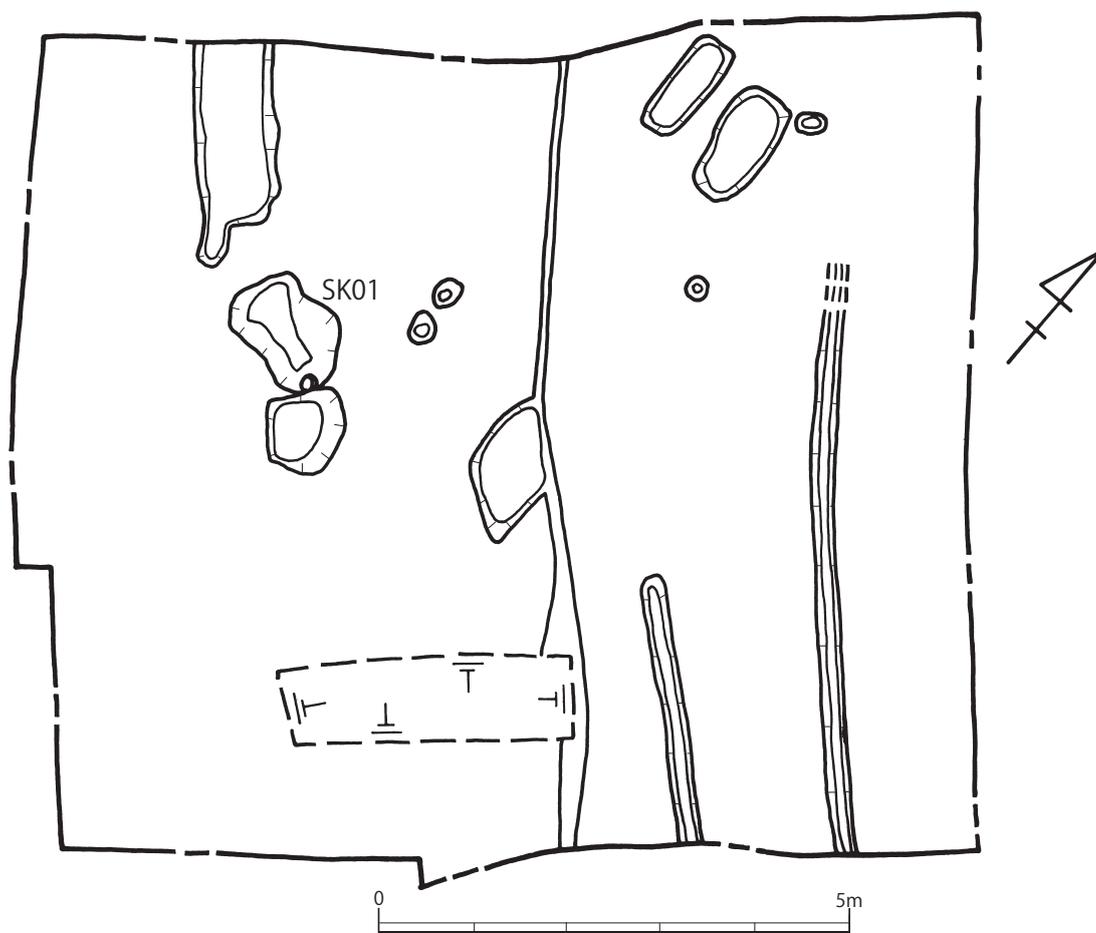
本次調査は、国立研究開発法人産業技術総合研究所（産総研）による土質調査に伴って実施された。調査面積は約25㎡、調査期日は平成19年1月9日から同年1月12日までである。調査の結果、奈良時代の土坑1基の他、時期を特定することができない土坑、ピット群、溝が検出され、須恵器が出土した。

(2) 遺構と遺物

①土坑

SK01 (第40図、図版9)

調査区中央、やや西寄りで検出された。長径1.27m×短径0.9mの凹凸の多い不整形を呈する。



第39図 上園遺跡第12次調査地遺構配置図 (S=1/80)

底面は平坦であるが、東へ傾斜している。最深部は遺構検出面から約 0.4m を測り、壁面は斜め方向に立ち上がる。

遺物は、遺構東端部で検出面の直下から須恵器が出土した。

出土遺物（第 41 図、図版 16）

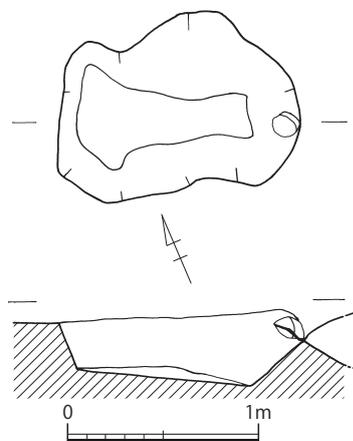
須恵器

杯身（144）

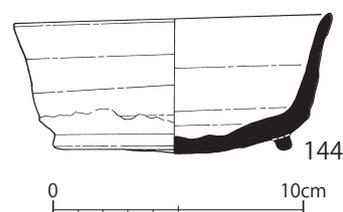
底部内外面に不定方向のナデ、その他の部分に回転ナデを施す。貼り付け高台の胎土の処理がややずさんで、一部に継ぎ目が観察できる。

（3）小結

奈良時代の遺構・遺物が検出されたことにより、調査地が、従前の調査で確認されている上園遺跡の範囲内に含まれることが明らかになった。



第 40 図 上園遺跡第 12 次
調査地 SK01 平・断面見通図
(S = 1/40)



第 41 図 上園遺跡第 12 次
調査地 SK01 出土遺物実測図
(S = 1/3)

IV. まとめ

1. 調査のまとめ（各遺構の時期：第1表を参照）

本文中に記述した各遺構の時期について、簡単にまとめておきたい。

(1) 第8次調査

- ① **SB01** 柱穴と判断したピットからは遺物が出土せず、時期については不明とせざるを得ない。

(2) 第9次調査

- ① **SC01** 出土した須恵器から、V期に属するものと考えられる。
- ② **SC02** 遺物は出土しなかったが、SC01と切り合い関係にあり、SC02の方が新しい。したがって、V期以降の年代に属するものと考えられる。
- ③ **SC03** 時期がわかるような須恵器は出土しなかったが、出土した土師器は古墳時代初頭期のものと考えられ、遺構の時期も同様と思われる。
- ④ **SC04** 出土した須恵器から、V期に属するものと考えられる。
- ⑤ **SC05** 石庖丁が1点出土したが、流れ込みの可能性もあり、時期については不明とせざるを得ない。
- ⑥ **SC06** 出土した土器は全て中期末の弥生土器であるため、遺構についてもその時期に属するものと考えられる。
- ⑦ **SX01** 土師器の小破片が1点出土したが、時期については不明とせざるを得ない。
- ⑧ **SX02** 同様の移動式竈が出土した仲島遺跡では、6世紀後葉から末を中心とした時期のものと考えられているので、ここでもそのように考えておきたい。
- ⑨ **SX03** 52の須恵器は、Ⅷ期のものである可能性もある。
- ⑩ **SX04** 11世紀から12世紀後半である可能性が高い。
- ⑪ **SX05** 不明。
- ⑫ **SX06** 出土遺物は古墳時代のものであるが、それ以上は不詳である。
- ⑬ **SX07** 不明。
- ⑭ **SX08** 65の大型甕は、弥生時代末から古墳時代初頭のものである可能性がある。
- ⑮ **SX09** 弥生時代の器台である可能性あり。
- ⑯ **SX10** 出土遺物は古墳時代のものであるが、それ以上は不詳である。

(3) 第11次調査

- ① **SK01** 出土した須恵器から、ⅢA～ⅢB期に属するものと考えられる。
- ② **SX01** 出土した須恵器から、ⅢA～ⅢB期に属するものと考えられる。
- ③ **SX02** 出土した須恵器から、ⅢA期に属するものと考えられる。
- ④ **SD01** 出土した須恵器から、ⅢA～ⅢB期に属するものと考えられる。

(4) 第12次調査

- ① **SK01** 出土した須恵器から、ⅦA期に属するものと考えられる。

2. 上園遺跡の変遷について

以下、時代を追って上園遺跡の変遷を考えてみたい。

	弥生			古墳						奈良		平安									
	前期	中期	後期	前期	中期	後期						前期	後期	9c	10c	11c	12c	13c~			
						ⅢA	ⅢB	ⅣA	ⅣB	V	Ⅵ								ⅦA	ⅦB	
1次調査						←	→														
2次調査					○(1)	←	→														
5次調査						○						○									
9次調査			○(2)			○				←	→			○							
10次調査																			←	→	
11次調査						○															
12次調査												○									
14次調査																				←	→
15次調査							←	→													

第1表 上園遺跡調査一覧表

(1) 弥生時代

第9次調査において、標高約36mの低丘陵上から弥生時代中期末に属すると思われる竪穴住居跡(SC06)が検出された。この第9次調査地から南に約25mの場所にある本堂遺跡第2次調査地点では、標高約34～35mの低丘陵上に弥生時代中期末から後期にかけて集落が営まれていたことが分かっている(註1)。第9次調査地も、その立地及び性格からこの集落の一部ととらえた方が自然で、今後上園遺跡の範囲については見直しが必要である。なお、第9次調査地のSC05埋土中からは石庖丁が出土しており、弥生時代には上園遺跡周辺の低丘陵上に集落が形成され、周辺の低地で水田耕作が行われた可能性が想定される。

(2) 古墳時代から奈良時代

古墳時代で最も古い遺構は、これまでの所、第2次調査で検出された3号竪穴住居跡(註2)であり、TK208期にあたる。おそらく集落形成の萌芽と思われる。

上園遺跡に本格的な集落が形成されるのは、第1表に示す通り小田編年ⅢA期であり、この時期の遺構は前表に示す通り9ヶ所の調査地点のうち6ヶ所で検出されている。この時期はまた、上園遺跡に近接する野添6号窯(註3)、本堂遺跡14次調査地点(註4)という牛頸窯跡群最古期の窯で須恵器焼成が始まった時期と考えられている。

一方上園遺跡におけるⅢA期の集落には、次のような特徴がある。

- 須恵器の出土量が多く、土師器は主に甕類に限定され、出土量も少ない。
- 焼け歪んだ須恵器が多く出土する。
- 竪穴住居内に粘土を貯蔵する例がある。
- 集落内でロクロピットが検出されている。

これらの事実及び前述した牛頸窯跡群最古期の窯跡との距離的な近接性から、上園遺跡の集落形成は、牛頸窯跡群の操業開始と強い関連性があるものと考えられる。

ところが、次のⅢB期になると遺構の数が減少を始め、これまでの調査の結果では奈良時代後半には集落が廃絶してしまうようである。すなわち、古墳時代から奈良時代にかけての上園遺跡は、牛頸窯跡群操業開始と同時期に形成され、初期の須恵器焼成に深くかかわっていたものの、早くもⅢB期

には衰退を始める。それ以降は、奈良時代前半までの遺構は認められるが、むしろ隣接する本堂遺跡の縁辺地としてとらえられるのである。

(3) 平安時代

前表に示すように、11世紀代になると第1次調査SB01(註5)、第2次調査SB02(註6)第9次調査SP04(註7)等の遺構が検出され、黒色土器・瓦器・瓦などが出土する。また、第4次調査では溝の埋土から大量の瓦が出土し、寺院が存在した可能性も考えられる。一度は廃絶した可能性のある上園遺跡は、この時期に、以前とは異なる性格の集落として新たに営まれたものと考えられる。

3. 今後の課題

これまでに行ってきた発掘調査の結果、上園遺跡について次のような課題が明らかになった。

- 弥生時代における土地利用の状況
- 古墳時代中期の萌芽期にあたる集落の様相
- 現状では遺構がない奈良時代後半から11世紀にかけての状況
- 中世以降の状況

今後も積極的に調査を進め、上園遺跡の全貌を明らかにすべく努力を続けたい。

註1 大野城市教育委員会 2008『牛頸本堂遺跡群V』大野城市文化財調査報告書第76集

註2 大野城市教育委員会 1987『上園遺跡II』大野城市文化財調査報告書第21集

註3 福岡県教育委員会 1970『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財調査報告書第43集

註4 大野城市教育委員会 2008『牛頸本堂遺跡群IX』大野城市文化財調査報告書第83集

註5 大野城市教育委員会 1986『上園遺跡I』大野城市文化財調査報告書第18集

註6 註2に同じ

註7 大野城市教育委員会 2008『牛頸本堂遺跡群VI』大野城市文化財調査報告書第80集

4. 上園遺跡出土新羅土器の位置付け

上園遺跡第11次調査では、SK01で新羅土器の壺が出土した。ここでは、上園遺跡周辺で出土した新羅土器やその他の朝鮮半島系土器を取り上げ、その意義について検討する。

(1) 上園遺跡第11次調査出土の新羅土器

出土状況 SK01の埋土中から、10数片の破片になった状態で須恵器や土師器とともに出土した。残存状況は1/10以下であり、破片の状態で土坑の中に廃棄ないしは流入し、埋没したのと考えられる。伴出する須恵器はⅢB古段階である。

新羅土器の特徴 頸部付根から体部下半にかけての破片で、口頸部と底部を欠く。体部は球形で頸部付根の締めりは弱い。頸部付根付近に単体スタンプによる半円点文を有し、肩部下位には波状文および極小のコの字状突帯が巡る。器壁が薄いことや内面の顕著なロクロ目のほか、胎土・色調など通常の新羅土器の特徴を有す。なお、一次成形はタタキ技法と考えられ、内面には平行当具を使用した可能性がある。

時期 スタンプ文を有すことから宮川禎一氏の編年のI a期(6世紀後葉～末)以降にあたる(宮川1987)。重見泰氏による壺A(長頸壺)の編年を参考にすると、胴部形態は球形から扁球形へと変化

することから、印花文土器の中ではより古相に位置付けられる（重見 2012）。また、スタンプ文と波状文が共存することは珍しく、波状文はスタンプ文出現以前の付加口縁台付長頸壺や高杯などに多用されることから、やはり印花文土器の中では古い要素といえよう。

以上より、本資料は印花文土器の中でも古相に位置付けられ、伴出する須恵器の年代観とも矛盾しない。6世紀後半頃に製作・搬入され、ⅢB期のうちに廃棄されたものと考えられる。

（2）周辺遺跡の新羅土器

上園遺跡周辺の新羅土器として、上大利地区で採集された資料が2点ある。茂和敏氏・佐藤昭則氏により紹介され（茂・佐藤 1980）（その後、舟山良一氏により採集地点の修正あり（大野城市 1982））、白井克也氏により詳細な位置付けがなされた（白井 1999）。また、御供田遺跡（九州大学筑紫キャンパス遺跡）からも出土例が知られる（九州大学 1994）。

上大利採集品① 平底の杯である。白井氏新羅Ⅰ期（5世紀前～中葉）に位置付けられ、昌寧地域との類似性や慶尚北道慶州・月城路古墳群出土品との類似が指摘される。

上園遺跡に隣接する本堂遺跡の範囲で採集された資料であるが、上園遺跡で集落が出現する直前、近接する御供田遺跡で墳墓が出現する直前の時期にあたり、周囲に同時期の明確な遺跡はなく脈絡は不明である。

上大利採集品② 方形透かしがあるつまみを有す蓋である。白井氏の新羅Ⅱ期中葉（6世紀初頭頃）に位置付けられており、慶尚南道昌寧地域の系譜が想定されている。

採集地点は野添遺跡群の範囲にあたり、周辺に同時期の遺跡はないが、採集地点から700～800m西側には5世紀後半～6世紀前半を中心とした牛頸塚原古墳群や春日塚原古墳群がある。上園遺跡や御供田遺跡では確実に居住域が成立した時期の所産で、牛頸開窯期の前段階における当地域と新羅との交流を示す資料である。

御供田遺跡出土例 縄文時代～古代へと継続する複合遺跡で、どの時代においても当地域の拠点的・中心的集落の性格が強い。古墳時代においては、牛頸開窯前の5世紀後半頃から集落の形成が始まり、6世紀中頃以降は須恵器製作具の存在などから須恵器工人集落であったと考えられる。

新羅土器は平安期の溝から出土した。単体スタンプ文を有す蓋で、白井氏の新羅ⅢB・C期（6世紀後半）に位置付けられる。6世紀後半の集落に伴うものであろう。

（3）上園遺跡周辺におけるその他の朝鮮半島系土器

牛頸窯跡群周辺の朝鮮半島系資料については、亀田修一氏により整理されている（亀田 2008）。ここでは、主に牛頸開窯期前後の上園遺跡周辺における新羅土器以外の朝鮮半島系資料を概観する。

有溝把手付土器 上園遺跡第7次調査で把手上面に浅い溝を有す須恵質の甑が1点ある（大野城市 2014）。7世紀代に入る可能性があるが、隣接する本堂遺跡（大野城市 2008）や惣利西遺跡（春日市 1985）で須恵質の有溝把手付土器がある。

内面平行当具痕を有す土器 内面平行当具痕を有す土器は、寺井誠氏により新羅・加耶的な要素と位置付けられている（寺井 2019）。御供田遺跡では高杯・蓋杯の内面に平行当具痕を有す須恵器が複数出土した。ⅢB期を中心に一部ⅣA期まで下るものがある。

（4）上園遺跡第11次調査出土の新羅土器の評価

以上のように、上園遺跡周辺では5世紀以来、断続的に新羅土器が搬入されたことが改めて確認で

きた。第 11 次調査出土の新羅土器は牛頸開窯期直後のものであり、上園遺跡で須恵器工人集落が経営された期間と重なる可能性がある。また、有溝把手付土器の存在は渡来人の居住を示唆し、内面平行当具痕を有する土器からも新羅・加耶系渡来人が窯業生産に関わった可能性を想定できる。

牛頸窯跡群の出現期については、陶邑や宗像地域の影響のほか、朝鮮半島からの工人の参加も想定されてきた。今回上園遺跡で確認された新羅土器は、牛頸開窯直後における生産体制の一端を示す資料といえよう。

【参考文献】

- 茂和敏・佐藤昭則 1980 「福岡県牛頸表採陶質土器の紹介」『地域相研究』 9
- 大野城市教育委員会 1982 『中通遺跡群Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第 9 集
- 春日市教育委員会 1985 『春日地区遺跡群Ⅲ』春日市文化財調査報告書第 15 集
- 西健一郎（編）1994 『九州大学埋蔵文化財調査報告第三冊 筑紫地区の遺跡群』九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 宮川禎一 1987 「文様からみた新羅印花文陶器の変遷」『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』
- 白井克也 1999 「大野城市出土新羅土器の再検討—須恵器との並行関係ならびに流入の背景—」『福岡考古』第 18 号
- 白井克也 2000 「日本出土の朝鮮産土器・陶器—新石器時代から統一新羅時代まで—」『日本出土の舶載陶磁 朝鮮・渤海・ベトナム・タイ・イスラム』
- 大野城市教育委員会 2008 『牛頸本堂遺跡群Ⅵ』大野城市文化財調査報告書第 80 集
- 大野城市教育委員会 2008 『牛頸本堂遺跡群Ⅶ』大野城市文化財調査報告書第 81 集
- 亀田修一 2008 「牛頸窯跡群と渡来人」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集—』（上巻）
- 重見泰 2012 『新羅土器からみた日本古代の国家形成』
- 大野城市教育委員会 2014 『上園遺跡 3』大野城市文化財調査報告書第 121 集
- 寺井誠 2019 『渡来文化の故地についての基礎的研究—新羅・加耶的要素を中心として—』

上園遺跡8次調査地出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)①口径②器高 ③底径④最大径 *(復元値)<残存値>	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	弥生土器	甕? (口縁部)	A区 P-1	②<3.6>	内外面 磨滅のため調整不明	A:白色・褐色砂粒多く長石・雲母含む B:良好 C:内7.5YR7/6橙色 外10YR8/2灰白色	1条の刻み目突帯を有する
2	須恵器	杯蓋	A区 P-20	②<1.5>	内外面 回転ナデ 天井部外面 ヘラ切後不定方向のナデ 天井部内面 不定方向のナデ	A:微細な白色・黒色砂粒含む B:良好 C:内外N7/灰白色	
3	須恵器	杯蓋	A区 P-24	②<1.8>	内外面 回転ナデ 底部外面 ヘラ切後不定方向のナデ 底部内面 不定方向のナデ	A:微細な白色・黒色砂粒含む B:良好 C:内N7/灰白色 外N5/灰色	
4	須恵器	杯身	A区 P-25	②<1.5>高台径9.0	内外面 回転ナデ	A:微細な白色砂粒含む B:良好 C:内外N7/灰白色	
5	石製品	石鍋	A区 P-28	高<4.9>厚<1.5>			滑石製
6	石製品	二次加工 剥片	表土堀下時	長<3.3>幅<2.7>厚<1.2> 11g			サスカイト製
7	古銭	銅製品	B区溝	長<2.2>幅<2.2>厚<0.2> 2g			「寛永通寶」

上園遺跡9次調査地出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)①口径②器高 ③底径④最大径 *(復元値)<残存値>	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
8	須恵器	杯蓋	SC01	①11.5②2.2 かえり径9.7	内外面 回転ナデ 天井部外面 ヘラ切後ナデ 天井部内面 不定方向のナデ	A:2mm程の白色砂粒・長石多く含む B:不良 C:内2.5YR8/2灰色 外2.5Y7/2灰黄色	
9	須恵器	杯蓋	SC01	①12.3②2.5 かえり径9.8	内外面 回転ナデ 天井部外面 ヘラ切後ナデ 天井部内面 不定方向のナデ	A:微細な白色砂粒含む B:不良 C:内外2.5Y7/2灰黄色	
10	須恵器	杯身	SC01	①(9.8)②2.9③(6.6)	内外面 回転ナデ 底部外面 ヘラ切後ナデ 底部内面 不定方向のナデ	A:2mm程の白色砂粒含む B:良好 C:内外N7/灰白色~N4/灰色	
11	須恵器	杯身	SC01	①10.6②3.1③6.8	内外面 回転ナデ 底部外面 ヘラ切後ナデ 底部内面 不定方向のナデ	A:2mm程の白色砂粒・長石含む B:不良 C:内外10YR8/2灰白色	
12	須恵器	杯身	SC01	①10.9②2.8③7.8	内外面 回転ナデ 底部外面 ヘラ切後ナデ 底部内面 不定方向のナデ	A:微細な白色・黒色砂粒含む B:良好 C:内N7/灰白色 外N6/2灰色	
13	須恵器	大甕	SC01	①(37.6)②<9.3>	内外面 回転ナデ 指オサエ 口縁部 回転ナデ	A:3mm程の白色砂粒含む B:良好 C:内外7.5YR3/1黒褐色	口頸部1/4残存 外面に3条の沈線 口縁部周辺の内面に降灰
14	須恵器	甕	SC01	②<27.3>	体部外面 平行タタキの後部分的に 細かいナデ 体部内面 同心円状当て具痕 頸部周辺 回転ナデ	A:5mm程の砂粒・長石含む B:良好 C:内5YR3/1黒褐色 外2.5Y4/1黄灰色	頸部周辺内面のみ降灰
15	土師器	高杯	SC01	②<6.4>	内外面 磨滅のため調整不明	A:2mm程の白色砂粒・長石多く含む B:良好 C:内外10YR8/6黄橙色	
16	土師器	丸底壺	SC01	①(10.2)②<7.4> ④(12.3)	内外面 磨滅のため調整不明 体部上位外面 わずかに指オサエ	A:2mm程の白色砂粒・長石・雲母含む B:良好 C:内5YR7/6橙色 外7.5YR7/4にぶい橙色	
17	土師器	甕	SC01	①(16.4)②<8.3> ④(16.6)	外面 磨滅のため調整不明 内面 口縁部周辺回転ナデ 体部へ ラケズリ	A:3mm程の砂粒・長石・石英含む B:良好 C:内5YR4/6赤褐色~5YR4/1褐灰色 外2.5YR4/6赤褐色	
18	土師器	甕	SC01	①(17.0)②<5.6>	内外面 磨滅のため調整不明	A:3mm程の白色砂粒・長石・雲母含む B:良好 C:内外7.5YR7/6橙色	

19	土師器	甌	SC01	長10.3 幅9.5 把手部径3.5	外面 磨滅のため調整不明	A: 7mm程の白色砂粒多く含む B: 良好 C: 内外5YR5/6明赤褐色	
20	土師器	甌	SC01	②<6.8>	外面 ハケメ 指オサエ 内面 ヘラケズリ	A: 5mm程の砂粒・長石多く含む 角閃石 微細 な雲母含む B: 良好 C: 内外5YR5/8明赤褐色	21と同一個体か?
21	土師器	甌	SC01	②<18.4>③(14.7)	外面 ハケメ 内面 ヘラケズリ	A: 6mm程の砂粒・礫・長石多く含む 微細な雲母含む B: 良好 C: 内外5YR5/8明赤褐色	20と同一個体か?
22	石製品	石庖丁	SC01	長3.5 幅7.7 厚0.6			
23	石製品	石鏃	SC01	長1.8 幅1.2 厚0.4			黒曜石製
24	土師器	高杯	SC03	②<7.2>	外面 ハケメ 内面 シボリ痕	A: 3mm程の白色砂粒・石英・雲母含む B: やや良好 C: 内10YR7/3にぶい黄褐色 外10YR8/3浅黄橙 色～10YR6/1褐灰色	
25	土師器	高杯	SC03	①<7.7>	外面 部分的にケズリの痕跡 内面 磨滅のため調整不明	A: 2mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内外10YR8/3浅黄褐色	
26	土師器	高杯	SC03	②<4.2>	内外面 磨滅のため調整不明 脚部内面 ハケメ	A: 3mm程の白色砂粒・長石・雲母含む B: 良好 C: 内外5YR6/6褐色	
27	土師器	甌	SC03	②<5.7>④(10.3)	外面 磨滅のため調整不明 内面 ハケメ	A: 4mm程の白色砂粒・長石・角閃石含む B: 良好 C: 内10YR7/6明黄褐色～10YR4/1褐灰色 外10YR7/4にぶい黄褐色～10YR4/1褐灰色	底部内外面に黒斑あり
28	土師器	甌	SC03	①(15.0)②<8.4>	外面 斜方向のタタキ 内面 ハケメ	A: 3mm程の白色砂粒・石英・雲母含む B: 良好 C: 内外2.5Y8/3淡黄色	29と同一個体か
29	土師器	甌	SC03	②<10.1>④17.3	外面 斜方向のタタキ 内面 ハケメ	A: 3mm程の砂粒・長石・角閃石・雲母含む B: 良好 C: 内10YR7/3にぶい黄褐色 外10YR7/3にぶい黄褐色～2.5YR7/6褐色	28と同一個体か
30	土師器	甌	SC03	①(17.8)②<6.2>	外面 体部ハケメ 内面 体部指オサエ(わずかな痕跡)	A: 0.5mm程の黒色砂粒・雲母含む B: 良好 C: 内外7.5YR7/4にぶい褐色	
31	須恵器	杯蓋	SC04	①10.8②1.8 かえり径8.8	内外面 回転ナデ 天井部外面 ヘラ切後未調整	A: 2mm程の砂粒含む B: やや不良 C: 内外7.5YR6/6褐色	天井部外面にヘラ記号あり
32	須恵器	杯蓋	SC04	①(12.0)②<2.0> かえり径9.7	内面 不定方向のナデ 外面 降灰のため不明	A: 微細な白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N6/灰色 外N7/灰白色～N4/2灰色	
33	須恵器	杯身	SC04	①(9.6)②3.0 ③(6.1)	内外面 回転ナデ 底部外面 ヘラ切後ナデ	A: 微細な白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内外10YR7/1	底部外面にヘラ記号あり
34	須恵器	杯身	SC04	②<1.5>高台径9.2	内面 回転ナデ 外面 不定方向のナデ 高台周辺 回転ナデ	A: 微細な白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内外N6/灰色～2.5Y6/2灰黄色	
35	土師器	甌	SC04	②<6.5>④(12.0)	外面 磨滅のため調整不明 内面 わずかにハケメの痕跡	A: 3mm程の白色砂粒・長石・石英含む B: 良好 C: 内外10YR7/4にぶい黄褐色	
36	土師器	甌?	SC04	②<8.5>厚1.7	外面 調整不明(下部部に胎土の表面を拭ったような痕跡) 内面 回転ナデ 指オサエ	A: 3mm程の長石多く含む B: 良好 C: 内外10YR8/3浅黄褐色	焼成前穿孔1ヶ所あり
37	瓦器	椀	SC04	①15.4②5.4高台径6.6	内外面 ヘラミガキ 高台・口縁部周辺 回転ナデ	A: 4mm程の白色砂粒・長石・雲母含む B: 良好 C: 内10YR7/1灰白色～10YR3/1黒褐色 外10YR6/1褐灰色～10YR4/1褐灰色	
38	石製品	不明	SC04	長6.0 幅4.8 厚3.0		C: 5YR4/6赤褐色～7.5YR6/4にぶい褐色	
39	石製品	石庖丁	SC05				サヌカイト製
40	弥生土器	壺	SC06	②<6.0>	内外面 磨滅のため調整不明	A: 3mm程の白色砂粒少量含む B: 良好 C: 内外5YR5/6明赤褐色	
41	弥生土器	甌	SC06	①(42.0)②<6.4>	外面 ハケメ 頸部～口縁部回転ナデ 内面 ハケメ 体部不明瞭な指オサエ	A: 2mm程の白色砂粒多く含む B: 良好 C: 内外7.5YR5/6明褐色	
42	弥生土器	甌	SC06	②<3.0>	内外面 磨滅のため調整不明	A: 2mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内5YR5/4にぶい赤褐色 外7.5YR7/3にぶい 褐色	43と同一個体か?
43	弥生土器	甌	SC06	②<3.1>	内外面 磨滅のため調整不明	A: 2mm程の白色砂粒少量含む B: 良好 C: 内10YR7/4にぶい黄褐色 外5YR7/4にぶい 褐色	42と同一個体か?

44	弥生土器	甗	SC06	②<5.0>	内外面 磨滅のため調整不明	A: 0.5mm程の白色砂粒少量含む B: 良好 C: 内7.5YR6/6橙色 外7.5YR6/4にぶい褐色	
45	弥生土器	甗	SC06	②<2.5>	外面 底部ハケメ 内面 底部ハケメ(わずかな痕跡)	A: 3mm程の長石含む B: 良好 C: 内外5YR5/4にぶい赤褐色	
46	弥生土器	甗	SC06	②<3.4>	内外面 磨滅のため調整不明	A: 3mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内7.5YR5/4にぶい赤褐色 外7.5YR5/3にぶい褐色	底部外面煤付着
47	弥生土器	甗	SC06	②<8.5>	外面 磨滅のため調整不明 内面 わずかに指オサエの痕跡	A: 3mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内7.5YR4/1褐灰色 外7.5YR4/2灰褐色	
48	弥生土器	甗	SC06	②<4.2>③(10.0)	内外面 磨滅のため調整不明	A: 2mm程の長石多く含む B: 良好 C: 内7.5YR4/3褐色 外5YR5/4にぶい赤褐色	
49	石製品	剥片	SC06	長8.8 幅3.0 厚1.4		C: N2/黒色	黒曜石製
50	土師器	杯	SX01	②<2.6>	内外面 磨滅のため調整不明	A: 0.5mm程の白色砂粒少量含む B: 良好 C: 内外7.5YR6/3にぶい橙色	
51	土師器	移動式カマド	SX02	②<4.7> 最大厚2.7	内外面 ナデと指オサエ	A: 3mm程の白色砂粒・長石・雲母多く含む B: やや不良 C: 内外5YR6/8褐色	移動式カマドの一部であると考えておきたい
52	須恵器	甗	SX03	②<7.2>	内外面 回転ナデ	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内N5/灰色 外N4/灰色	53と同一個体か
53	須恵器	甗把手	SX03	②<3.7>	内外面 ナデ	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内外N5/灰色	52と同一個体か
54	須恵器	杯蓋	SX04	①10.5②3.5 かえり径8.0	内外面 回転ナデ 天井部外面 ヘラ切後粗いナデ 天井部内面 不定方向のナデ	A: 2mm程の白色砂粒・長石含む B: 良好 C: 内N5/灰色 外N4/灰色	
55	須恵器	杯蓋	SX04	①10.6②2.4 かえり径8.1	内外面 回転ナデ 天井部外面 ヘラ切後粗いナデ 天井部内面 不定方向のナデ	A: 白色砂粒含む B: 良好 C: 内10YR8/4浅黄褐色 外10YR6/3にぶい褐色	
56	須恵器	杯蓋	SX04	①11.0②2.1 かえり径8.9	内外面 回転ナデ 天井部外面 ヘラ切後粗いナデ 天井部内面 不定方向のナデ	A: 4mm程の白色砂粒やや多く含む B: 良好 C: 内5YR4/2灰褐色 外2.5YR4/3にぶい赤褐色	
57	須恵器	杯蓋	SX04	①14.8②2.1 つまみ径3.1	内外面 回転ナデ 天井部外面 ヘラ切後ナデ 天井部内面 不定方向のナデ	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内2.5Y5/1黄灰色 外N6/灰色	端部に重ね焼きの痕跡あり
58	須恵器	高杯	SX04	②<5.0> 裾部径(9.8)	外面 回転ナデ 内面 シボリ痕	A: 微細な白色・褐色砂粒含む B: やや不良 C: 内外10YR7/3にぶい黄褐色	
59	黒色土器	椀	SX04	②<5.1> 高台径(6.2)	外面 高台周辺回転ナデ 高台内不定方向のナデ 内面 ヘラミガキ	A: 2mmの白色砂粒・長石・雲母含む B: 良好 C: 内外10YR3/1黒褐色	黒色土器 B類
60	黒色土器	椀	SX04	②<1.9> 高台径6.3	内外面 磨滅のため調整不明	A: 微細な白色砂粒・雲母含む B: 良好 C: 内外N3/暗灰色	黒色土器 B類
61	黒色土器	椀	SX04	②<2.5> 高台径(7.8)	外面 磨滅のため調整不明 内面 ヘラミガキ	A: 微細な白色砂粒・石英・雲母含む B: 良好 C: 内2.5Y5/1黄灰色~2.5Y2/1黒色 外10YR8/1~10YR5/1褐灰色	黒色土器 A類
62	瓦器	椀	SX04	②<5.2> 高台径6.8	内外面 ヘラミガキ 高台周辺 回転ナデ 高台内 不定方向のナデ	A: 2mmの砂粒・長石・雲母含む B: 良好 C: 内外10YR2/1黒色	
63	石製品	石斧	SX05	長13.1 幅5.8 厚2.1		C: 7.5Y5/1灰色~7.5Y6/1灰色	蛇紋岩製
64	弥生土器	甗	SX06	①(27.2)②<18.6>	内外面 ハケメわずかに残る 口縁部内外面 回転ナデ	A: 4mmの砂粒・長石・雲母含む B: 良好 C: 内外10YR2/1黒色	
65	土師質土器	甗	SX08	①(35.0)②<21.9>	外面 体上部ハケメ 体下部タタキ 内面 指頭痕(わずかな痕跡)	A: 7mm程の礫・長石多く含む B: 良好 C: 内10YR3/1黒褐色 外10YR8/2灰白色	内面のみ炭素が吸着している
66	土師器	鉢	SX08	②<6.2>③(19.2)	内外面 指オサエ	A: 3mm程の白色砂粒・長石含む B: 不良 C: 内外10YR8/3浅黄色	同一個体か?
67	土師器	鉢	SX08	①(26.3)②8.8 ③(19.1)	内外面 指オサエ	A: 3mm程の白色砂粒・長石含む B: 不良 C: 内外10YR8/3浅黄色	
68	土師器	器台か?	SX09	②<8.6>	外面 部分的に丹塗りとハケメ 内面 部分的にハケメ	A: 0.5mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内外10YR7/3にぶい黄褐色 丹5YR4/3にぶい赤褐色	
69	弥生土器	甗	ビット	②<10.7>	内外面 ハケメ	A: 2mm程の砂粒 角閃石・雲母含む B: 良好 C: 内7.5YR7/4にぶい橙色 外10YR4/1褐灰	外面に1条の刻み目突帯がめぐる

70	土師器	小型壺?	ピット	②<11.0>最大径13.4	内外面 磨滅のため調整不明 外面にハケメ 内面に指オサエがわずかに残る	A: 3mm以下の砂粒 長石・石英・角閃石・雲母含む B: 良好 C: 内外7.5YR6/8橙色	体部内面上位粘土の継ぎ目あり
71	石製品	不明	ピット	長3.1 幅3.2 厚2.7		C: 7.5YR7/2明褐色	花崗岩製
72	石製品	石鍋	ピット	②<5.2>			
73	土師器	器台?	遺構検出面	長5.6 幅3.0 孔径0.9	内外面 磨滅のため調整不明	A: 0.5mm程の白色・黒色砂粒含む B: やや不良 C: 10YR8/2灰白色	
74	土師器	器台?	遺構検出面	長11.9 幅3.5 孔径1.3	内外面 磨滅のため調整不明	A: 0.5mm程の白色砂粒含む B: やや不良 C: 10YR8/2灰白色	
75	土製品 (須恵質)	土馬	遺構検出面	②<4.6> 長6.3 幅3.0	タテガミ部指オサエ	A: 2mm程の砂粒含む B: 良好 C: 7.5YR7/4にぶい橙色	頭部のみ 両耳欠損
76	土製品 (須恵器)	蹄脚砚	遺物包含層	②<3.9> 幅3.7 厚2.1	ナデか?	A: 1mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: N4/灰色	底部外面に1条の沈線あり

上園遺跡11次調査地出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)①口径②器高 ③底径④最大径 *(復元値) <残存値>	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
77	須恵器	杯蓋	SD01	①(11.8)②<3.2>	内外面 回転ナデ	A: 少量の白色砂粒含む B: 良好 C: 内外N6/灰色	
78	須恵器	杯蓋	SD01	①(12.2)②<4.1>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 天井部当て具痕	A: 2mm以下の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N5/灰色 外7.5Y5/灰色	内外面とも降灰
79	須恵器	杯蓋	SD01	①(12.8)②<3.4>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 天井部不定方向ナデ	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N7/灰白色~N3/暗灰色	
80	須恵器	杯蓋	SD01	①(13.0)②<4.6>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 天井部当て具痕	A: 微細な白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N7/灰白色	
81	須恵器	杯蓋	SD01	①(14.0)②3.9	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 天井部ヘラ切り 内面 回転ナデ 天井部当て具痕・ 不定方向のナデ	A: 3mm以下の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N5/灰色	
82	須恵器	杯蓋	SD01	①(14.6)②<3.9>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 微細な白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N6/灰色	
83	須恵器	杯蓋	SD01	①14.6②4.8	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 天井部当て具痕	A: 2mm以下の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内6/灰色 外5/灰色	
84	須恵器	杯蓋	SD01	①(12.8)②<3.6>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内6/灰色 外5/灰色	
85	須恵器	杯蓋	SD01	②3.9	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 微細な白色・黒色砂粒・4mm程の長石含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N6/灰色	天井部外面ヘラ記号 大きく焼け歪む
86	須恵器	杯蓋	SD01	②<1.4>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 天井部当て具痕	A: 微細な白色・黒色砂粒・雲母含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N6/灰色	
87	須恵器	杯蓋	SD01	②<2.3>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 不定方向のナデ 天井部当て具痕	A: 微細な白色砂粒・3mm程の長石含む B: 良好 C: 内N6/灰色 外N6/灰色	
88	須恵器	杯蓋	SD01	②<1.6>	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 天井部当て具痕	A: 2mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N6/灰色	
89	須恵器	杯身	SD01	①(10.4)②<3.9> 受部径(12.8)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 3mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N6/灰色 外N5/灰色	内外面ともに降灰
90	須恵器	杯身	SD01	①11.7②4.1 ③3.1 受部径13.6	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 底部に当て具痕	A: 3mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N6/灰色	重ね焼きの痕跡
91	須恵器	杯身	SD01	①11.6②4.4 ③3.5 受部径13.5	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 不定方向のナデ	A: 2mm程の白色砂粒・雲母含む B: 良好 C: 内N6/灰色 外N7/灰白色~N5/灰色	口縁部を焼成後打ち欠く 焼け歪む
92	須恵器	杯身	SD01	①(11.4)②<3.2> 受部径(13.1)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 3mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内外N8/灰白色	外面に降灰 重ね焼きの痕跡
93	須恵器	杯身	SD01	①(11.4)②<4.1> ③(6.3) 受部径(13.8)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 不定方向のナデ 底部に当て具痕	A: 2mm程の黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰色 外N4/灰色	内外面ともに降灰

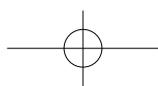
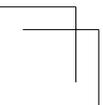
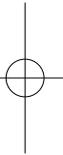
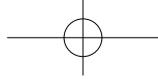
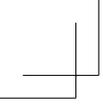
94	須恵器	杯身	SD01	①(11.9)②<3.8> ③(6.5) 受部径(13.9)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 2mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内N6/灰色 外7.5Y5/灰色	
95	須恵器	杯身	SD01	①11.7②4.3 ③3.8 受部径14.3	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 底部に当て具痕	A: 2mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内外N7/灰白色	焼け歪む
96	須恵器	杯身	SD01	①11.8②4.6 ③4.0 受部径(14.1)	外面 回転ナデ 一部降灰のため不明 内面 回転ナデ 底部に当て具痕	A: 5mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内外N7/灰白色	外面に降灰 重ね焼きの痕跡
97	須恵器	杯身	SD01	①(11.6)②5.1 ③(5.1) 受部径14.3	外面 降灰のため不明 内面 回転ナデ	A: 3mm程の白色砂粒・石英含む B: 良好 C: 内N6/灰色 外N8/灰白色~5Y6/灰色	重ね焼きの痕跡
98	須恵器	杯身	SD01	①(12.2)②<4.6> ③(4.0) 受部径(14.3)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 底部に当て具痕	A: 3mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内N6/灰色 外N7/灰白色	
99	須恵器	杯身	SD01	①(12.2)②<3.7> 受部径(14.7)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 5mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内外N7/灰白色	
100	須恵器	杯身	SD01	①(11.6)②<4.1> ③(6.8) 受部径(14.5)	外面 降灰のため不明 内面 回転ナデ 不定方向のナデ 底部に当て具痕	A: 4mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内5GYN/灰色 外N6/灰色	外面に降灰
101	須恵器	杯身	SD01	①(12.0)②<4.5> 受部径(15.2)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 2mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内外N6/灰色	
102	須恵器	杯身	SD01	①(12.2)②3.8 ③6.4 受部径(14.7)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 底部に当て具痕	A: 3mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内外N6/灰色	
103	須恵器	杯身	SD01	①(13.0)②(4.1) 受部径(15.2)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 不定方向のナデ	A: 2mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰色 外7.5Y6/灰色	
104	須恵器	杯身	SD01	①(13.0)②<4.9> ③6.0 受部径(16.0)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 不定方向のナデ 底部に当て具痕	A: 1mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内N6/~4/灰色 外N8/~7/灰白色	
105	須恵器	高杯	SD01	①(13.0)②<4.1> ③(5.7) 受部径(15.2)	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 不定方向のナデ	A: 2mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外7.5Y6/灰色	外面に降灰
106	須恵器	高杯	SD01	①(13.0)②<4.5> ③(6.1) 受部径15.9	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 不定方向のナデ 底部に当て具痕	A: 1mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内N6/灰色~N4/灰色 外N8/灰色~N7/灰色	
107	須恵器	高杯	SD01	②<2.0>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内N6/灰色 外N6/灰色	外面2条の沈線あり
108	須恵器	高杯	SD01	②<3.75>	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N5/灰色	口縁部内面1条の沈線あり
109	須恵器	高杯	SD01	②<5.0> 脚端径(9.0)	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内外N7/灰白色~N4/灰色	3方向透かし
110	須恵器	ミニチュア土器	SD01	①(3.8)②<3.6>	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内N8/灰白色 外N6/灰色	小片付着
111	須恵器	鉢	SD01	①(12.55)②<6.4>	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	A: 微細な白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N7/灰白色~10Y4/1灰色	口縁部内面~体部外面 降灰
112	須恵器?	壺?	SD01	①11.4②<2.5>	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	A: 1mm以下の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内外N5/灰色	全面降灰
113	須恵器	甕 (小型甕)	SD01	②<2.65>	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	A: 微細~2mm以下の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内5Y7/1灰色 外5Y5/1灰色	
114	須恵器	甕	SD01	②<3.9>	外面 回転ナデ カキメ 内面 回転ナデ	A: 1mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N6/灰色 外N7/灰白色	
115	須恵器	甕	SD01	②<6.05>	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 同心円文当て具痕	A: 微細な白色砂粒 3mm程の長石含む B: 良好 C: 内外N7/灰白色	
116	須恵器	甕	SD01	②<6.3>	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 同心円文当て具痕	A: 微細~2mm以下の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外5Y5/2灰オリープ 色~N4/灰色	内外降灰 部分的に自然釉
117	須恵器	甕	SD01	②<6.3>	外面 回転ナデ 格子目タタキ 内面 回転ナデ 同心円文当て具痕	A: 微細な白色・褐色砂粒・角閃石含む B: 良好 C: 内N8/灰白色 外N7/灰白色	
118	須恵器	甕	SD01	②<3.1>	外面 回転ナデ 平行タタキ 内面 回転ナデ 同心円文当て具痕	A: 微細な白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N8/灰白色 外N6/灰色	
119	土師器	丸底杯	SD01	②<4.5>	外面 磨滅のため調整不明 内面 磨滅のため調整不明	A: 微細~2mm以下の白色砂粒・雲母含む B: 良好 C: 内外5YR7/6橙色	口縁部端部指オサエあり
120	黒色土器	椀	SD01	②<2.5>	外面 回転ナデ ミガキの痕跡 内面 回転ナデ ミガキの痕跡	A: 微細な白色砂粒含む B: 良好 C: 内外2.5Y4/1黄灰色~2.5Y2/1黒色	黒色土器B類
121	須恵器	杯身	SK01	②<4.0>	外面 降灰のため調整不明 内面 回転ナデ	A: 黒色砂粒含む B: 良好 C: 内5PB6/1青灰色 外N6/灰色	
122	須恵器	杯身	SK01	②<4.1>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	A: 3mm程の黒色砂粒・石英含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外5Y7/1灰白色	

123	須恵器	杯身	SK01	①(11.0)②<4.4>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 底部に当て具痕	A: 5mm程の長石含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外5/灰色	
124	須恵器	杯身	SK01	①(12.4)②<4.7>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 底部に当て具痕	A: 2mm以下の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外6/灰色	
125	須恵器	提瓶 (把手のみ)	SK01	②<2.1> 最大厚1.7	内外面 降灰のため調整不明	A: 微細な白色砂粒・雲母含む B: 良好 C: 内N6/灰色~7.5Y6/灰色	
126	土師器	椀	SK01	①(14.9)②<3.8>	内外面 磨滅のため調整不明	A: 2mm程の砂粒・長石・雲母含む B: 良好 C: 内7.5YR6/4にぶい橙色~7.5YR8/4 浅黄橙色 外7.5YR6/4にぶい橙色~7.5YR8/3 浅黄橙色	
127	土師器	甕	SK01	①(9.4)②<5.1> ④<10.1>	外面 調整不明 内面 ケズリ	A: 2mm程の白色砂粒・長石・雲母含む B: 良好 C: 内7.5YR7/3にぶい橙色~7.5YR5/2 灰褐色 外7.5YR6/1褐色~10YR6/8明黄褐色	
128	土師器	甕	SK01	①14.5②<14.4> ④<15.7>	外面 ハケメ 頸部~口縁部回転ナデ 内面 ケズリ 頸部~口縁部回転ナデ	A: 4mm程の砂粒・長石含む B: 良好 C: 内7.5YR7/3にぶい橙色 外5YR7/6橙色~ 5YR4/1褐色	
129	新羅土器	壺	SK01	②<16.6>④<23.4> 頸部径10.6	外面 回転ナデ 上部に圏線・波状の 沈線 下部にタタキの痕跡 内面 回転ナデ 下部は当て具痕を軽く ナデ消す	A: 極めて精良 1mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内10Y6/1灰色 外10Y7/1灰白色	
130	須恵器	杯蓋	SX01	①(12.8)②<4.3>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 不定方向のナデ 天井部に当て具痕	A: 3mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N5/灰色 外N6/灰色	
131	須恵器	杯蓋	SX01	①13.4②4.5	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 天井部に当て具痕	A: 1~2mm程の長石含む B: 良好 C: 内外N6/灰色	
132	須恵器	杯蓋	SX01	①14.3②3.9	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 不定方向のナデ 天井部に当て具痕	A: 3mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰色 外N4/灰色	
133	須恵器	杯身	SX01	①(11.2)②<4.4>	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 底部に当て具痕	A: 2mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内2.5GY8/1灰白色 外N5/灰色	体部外面と受部に他個 体の融着あり
134	須恵器	杯身	SX01	①13.7②5.1 受部径16.4	外面 降灰のため不明 内面 回転ナデ 底部に当て具痕	A: 微細な白色・黒色砂粒・長石含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外2.5Y7/1灰白色	
135	須恵器	高杯	SX01	②<2.9>	外面 カキメ 内面 シボリ痕	A: 微細な砂粒・石英含む B: 良好 C: 内外N7/灰白色	
136	須恵器	高杯	SX01	②<6.0>	外面 カキメ 内面 シボリ痕	A: 微細な白色砂粒・石英含む B: 良好 C: 内外N7/灰白色	
137	須恵器	高杯	SX01	②<2.8> 裾部径(13.0)	外面 カキメ 内面 シボリ痕	A: 2mm程の白色砂粒含む B: 良好 C: 内N7/灰白色 外N5/灰色~7.5GY4/1暗緑灰 色	
138	須恵器	甕	SX01	②<1.7>	外面 カキメ 内面 回転ナデ	A: 微細な白色砂粒・雲母含む B: 良好 C: 内外N6/灰色	
139	須恵器	新羅土器?	SX01	②<1.9>	内外面 回転ナデ	A: 白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内外N6/灰色	
140	石製品	石鏃	SX01	全長<2.2> 最大幅<1.6> 最大厚<0.4>			サヌカイト製
141	須恵器	杯蓋	SX01	①(13.0)②4.4	外面 回転ナデ 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ 天井部に当て具痕	A: 微細な白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内外N7/灰白色	
142	須恵器	甕	SX01	②<2.7>	内外面 降灰のため調整不明	A: 2mm程の白色・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内7.5Y6/1灰色 外N4/灰色	
143	土師器	高杯	SX01	②<7.8> 裾部径(16.5)	外面 磨滅のため不明 内面 回転ナデ わずかにシボリ痕残る	A: 微細な白色・黒色・褐色砂粒・長石・雲母 含む B: 良好 C: 内5YR7/6橙色 外7.5YR8/3浅黄橙色	

上園遺跡12次調査地出土遺物観察表

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)①口径②器高 ③底径④最大径 * (復元 値)<残存値>	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
144	須恵器	杯身	SK01	①12.4②5.1 ③10.3 高台径9.3	体部内外面 回転ナデ 底部内外面 磨滅のため調整不明	A: 微細な白色砂粒含む B: やや不良 C: 内外 N7/灰白色	完形品

版 图





(1) 上園遺跡第8次調査地北調査区全景



(2) 上園遺跡第8次調査地南調査区全景

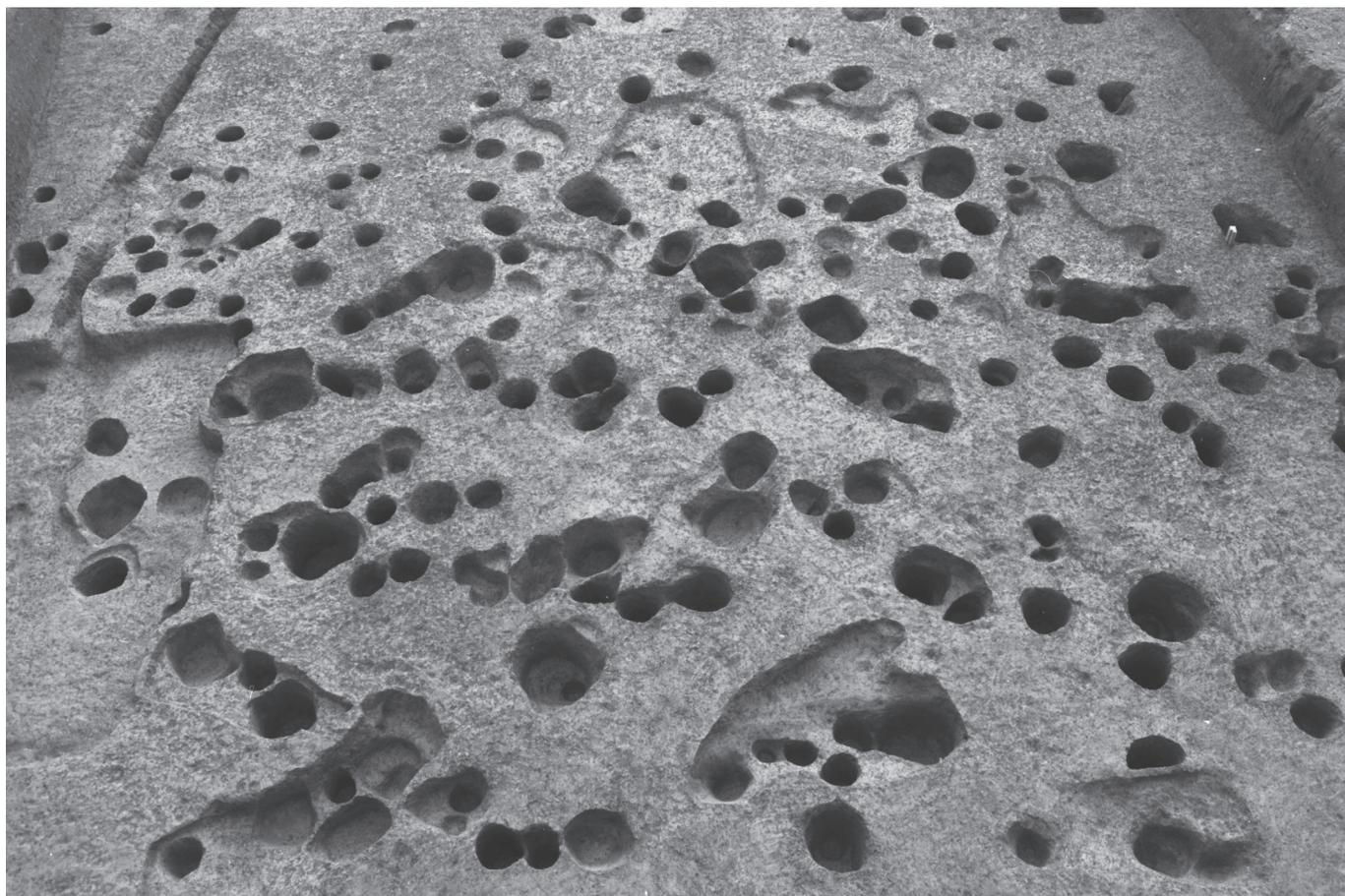
図版 2



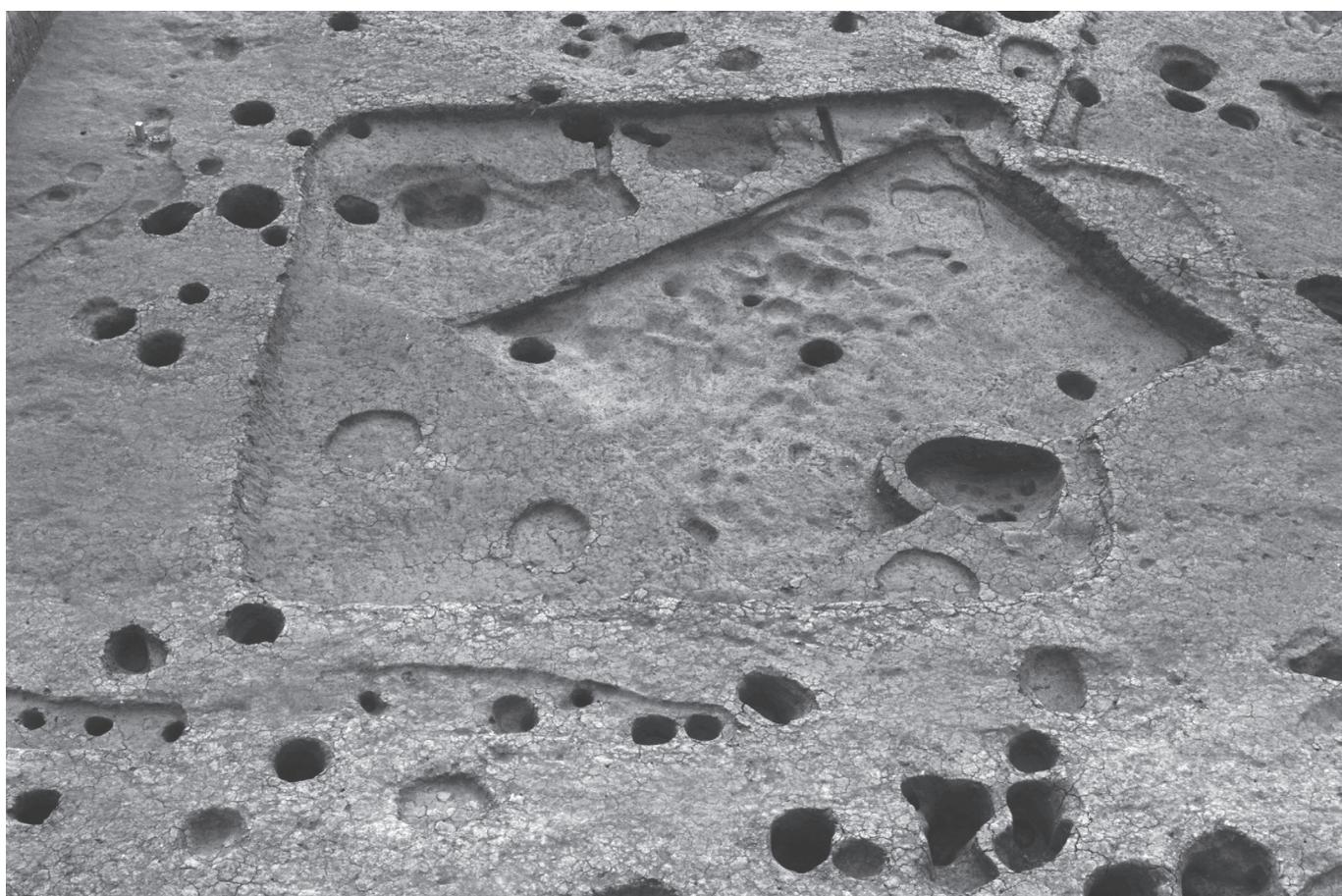
(1) 上園遺跡第9次調査地北部



(2) 上園遺跡第9次調査地中央部



(1) 上園遺跡第9次調査地南部



(2) 上園遺跡第9次調査地 SC01・02

図版 4



(1) 上園遺跡第9次調査地 SC03



(2) 上園遺跡第9次調査地 SC04



(1) 上園遺跡第9次調査地 SC01・02・03・04



(2) 上園遺跡第9次調査地 SC05

図版 6



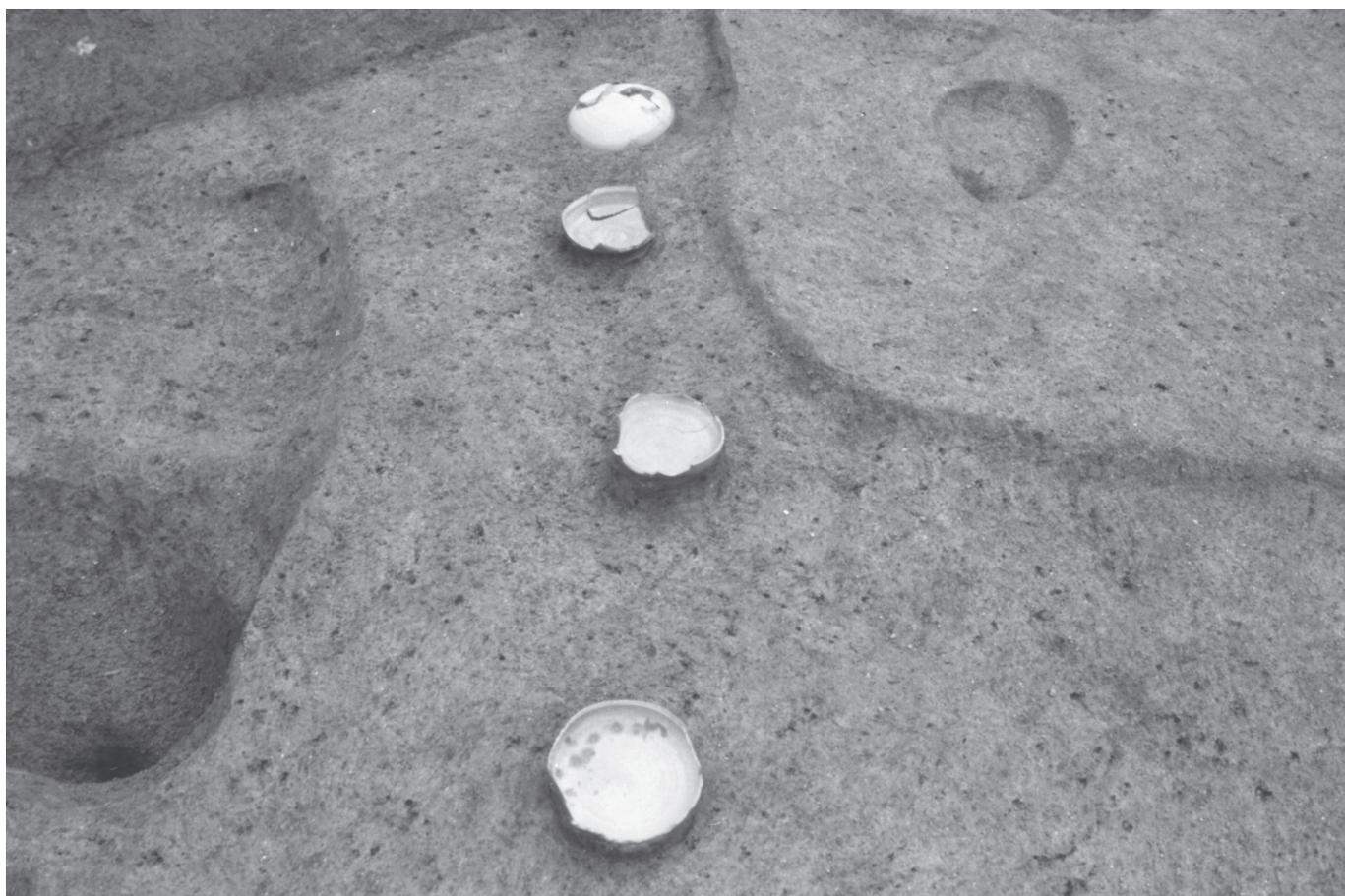
(1) 上園遺跡第9次調査地 SC06



(2) 上園遺跡第11次調査地全景



(1) 上園遺跡第 11 次調査地 SD01 遺物出土状況



(2) 上園遺跡第 11 次調査地 SX01 遺物出土状況①

図版 8



(1) 上園遺跡第 11 次調査地 SX01 遺物出土状況②



(2) 上園遺跡第 11 次調査地 SK01 遺物出土状況



(1) 上園遺跡第 12 次調査地全景①



(2) 上園遺跡第 12 次調査地全景②

图版 10

遺物写真 1









图版 14

遺物写真 5





129



129



129



144

報告書抄録

ふりがな	かみのそのいせき はち							
書名	上園遺跡 8							
副書名	第8・9・11・12次調査							
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第187集							
編著者名	徳本洋一							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話 092(501)2211							
発行年月日	2021年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
かみのその 上園遺跡 第8次調査	ふくおかけんおおのじょうしかみおおり 福岡県大野城市上大利二丁目 641番他	402192		33° 31' 01"	130° 28' 51"	19911030 ～ 19911107	約978㎡	市道拡 幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上園遺跡 第8次調査	集落遺跡	弥生・奈良	掘立柱建物	弥生土器・須恵器・ 銅銭(寛永通宝)				
要約	第1次～第7次に及ぶ発掘調査の結果、上園遺跡は平田川西岸に広がる低丘陵の平坦部に立地するものと認識されていたが、第8次調査により、より北側の低丘陵傾斜地に及んでいることが分かった。また、初めて弥生時代と奈良時代の遺物が出土した。							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
かみのその 上園遺跡 第9次調査	ふくおかけんおおのじょうしかみおおり 福岡県大野城市上大利二丁目 551番他	402192		33° 31' 03"	130° 28' 52"	19921012 ～ 19921210	約400㎡	共同住 宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上園遺跡 第9次調査	集落遺跡	弥生・古墳	竪穴住居 不整形土坑	弥生土器・須恵器・ 土師器・石製品・土 製品				
要約	本次調査において、弥生時代中期の竪穴居が検出され、古墳時代から平安時代にかけての複合遺跡と認識されていた上園遺跡が、弥生時代の集落にさかのぼることが分かった。							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
かみのその 上園遺跡 第11次調査	ふくおかけんおおのじょうしかみおおり 福岡県大野城市上大利四丁目 120番4	402192		33° 30' 59"	130° 28' 57"	20041115 ～ 20041130	約35㎡	個人専 用住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上園遺跡 第11次調査	集落遺跡	古墳	溝・土坑・不整形土 坑	須恵器・新羅土器・ 石製品		溝・不整形土坑の埋土中か ら、新羅土器が出土した。		
要約	調査面積は狭小であったが、調査地が牛頸須恵器窯跡開窯直後の集落の一部であることが分かった。特に溝・不整形土坑から出土した新羅土器は、当該期の須恵器生産体制の一端を示す資料として貴重である。							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
かみのその 上園遺跡 第12次調査	ふくおかけんおおのじょうしかみおおり 福岡県大野城市上大利四丁目 111番1の一部	402192		33° 30' 54"	130° 28' 54"	20070109 ～ 20070112	約25㎡	土質調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上園遺跡 第12次調査	集落遺跡	奈良	土坑	須恵器				
要約	奈良時代の遺構・遺物が出土されたことで、調査地が上園遺跡の範囲内に含まれることが明らかになった。							

上園遺跡 8

—第8・9・11・12次調査—

大野城市文化財調査報告書

第187集

令和3年3月31日

発行 大野城市教育委員会

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 (株)コーユービジネス

〒812-0011 福岡市博多区博多駅前3-13-1